

ダイナサン

僕とカオルとベンジーの物語



大切なのは何が一番なのかじゃない
一番であることを認めてくれる人が
いることが大切なんだ。

ダイナサン

プロローグ

「幸運の女神様はな、すごい美人なんだけど、後頭部がツルツパゲなんだぞ」

さかやき

月代のような前頭部を光らせ、担任が黒板に下手な絵を書きながら話し始める。

いつもならノリのいい生徒から「じゃあ、先生は不幸の神様なんだ」なんて危険な頭髪ネタのツッコミが入って盛り上がるどころ。しかし今回は全員スルー。なぜなら今日は期末テストの最終日。しかも今は帰りのHR。教室に残っている僕らの体は抜け殻で、心はとっくに帰宅済み。抜け殻たちは、一刻も早く心のあとを追って教室を出ることしか考えていない。

「何故かという、幸運は一度通り過ぎたらもう捕まえることはできないからだ。一度通りすぎてしまった幸運を捕まえようにも、後頭部はツルツルで掴むところはない」

十二月の外気と同じくらい冷え込んだ教室の空気も読まず、鼻の穴をふくらませて得意げに話しているけれど、そんな話ならもうとっくに知っている。

女神様の名前はフォルトウナで、幸運を表すフォーチュンの語源になっている。後頭部をツルツパゲにさせられてしまったのは、チャンスを意味する好機トクメの男神カイロスと混同されてしまったから。このカイロスこそがチャンスは二度とやって来ないと言うように、あとからは捕まえることができない後ろハゲの神様。しかしいい事は美人と一緒にやってきた方がふさわしいと古代の誰かが考えて、好機と幸運を一緒くたにして女神にまとめた。とまあこんな話だったはず。

しかしそんな理由で二十一世紀にもなって東洋の片隅で教師にウケ狙いのネタにされるとは気の毒な。せめて幸運の女神様の服は繊細にできているから、前から抱きしめてあげないと、あとから掴もうとしてもすぐに破れてしまう。みたいな艶っぽい話にでもしてあげればよかったのに。

「だから君等も、幸運の女神様がいつやってきてもすぐに捕まえることが出来るよう、気を引き締めて生活するように」

要するに、学校のテストが終わってももうすぐ大学入試があるんだから気を抜くなって言いたいらしい。でも、そんなこと言ったって毎日毎日勉強漬けでやってきたんだから、テストが終わった日くらい気を抜かなきゃやってらんない。

そもそも日本の福の神様は、異国の神様みたいにせつがちじゃないしハゲてもいない。それどころか貧乏神が福の神に変身するくらい大雑把なのが我が国ニッポンの神様だ。

そして今回の話は、そんなニッポンで僕たちと福の神との出会いの物語。僕らが出会った福の神は、怪しげな三河弁をしゃべる味噌まんじゅうみたいなジイちゃん。人は見かけで判断してはいけないという、貴重な教訓を含んでいるような気がしなくもない。

僕とカオルとベンジーの物語

「おにぎり王子」と聞いてどんな人を想像するだろう。

三角顔でヒラヒラのブラウスを着た優男？ちょっと違う。アンパンマンに出てくる顔がおにぎりで股旅姿の？それはおむすびまん。三角の型で作って海苔を巻いた目玉焼き？それはおにぎり玉子。

わが校のおにぎり王子こと大里^{おおさとべんじ}勉士は、すらりと伸びた細マッチョな体に無造作ヘアに包まれたみやび顔を持つ男前。しかも成績はこの高校三年間の間に受けたすべてのテストで九割五分を一度も割ったことがないというド天才だ。ここまで聞くと、人気者を想像するかもしれないけど、残念ながら女子にも男子にもあまり人気がない。小学校時代に名前のせいで「うんちよす（大里勉士→大便→うんち）」と呼ばれ、数々のいじめを受けたトラウマのため、赤ん坊時代からの友達で、唯一彼をベンジーと呼ぶことが許されている僕以外には心を開かないのが一つの原因だけど、もう一つ大きな原因がある。

彼は底なしに貧乏なのだ。

多少の貧乏ならば、それを武器にして友達も作れるだろうけど、触れただけで貧乏が感染しそうなほどとなると、あえて近寄ろうとする人はいない。それほどベンジーの貧乏は筋金入りだ。建築基準法の三倍量の鉄筋を入れてグラスファイバー入りのコンクリで固めたくらいにガチガチの貧乏。

しかしベンジーの貧乏は、この世に生を受けた時に始まったわけではない。彼が人になり始めた時、すなわち受精の瞬間には彼の両親は資産三十億を超える大金持ちだった。

時はバブル末期。株の下落が始まり、東京二十三区の地価でアメリカ全土を買えるとまで言われた都心部の地価暴騰はおさまっていた。しかし、地方の地価はまだまだ上昇し続け、株の暴落は一時的なものだと信じられていたらしい。

大里家の絶頂は、ベンジーのお父さんが相続した二束三文の山林にリニアが通るという噂がたったことから始まった。その当時はバブルの真っ只中。あっという間に評価額が五千万円を超えたその山林を担保に、ベンジーのお父さんは評価額一億円の土地を購入。今なら信じられない話だけれど、バブル当時は将来値が上がりそうな土地が担保ならば、評価額を遥かに上回る額が借りられたそうなのだ。電卓を片手に計算してみたい、仮に一・五倍になる取引を十回繰り返

せばいくらになるのか。資産はなんと五十八倍にもなるのだ。

そうやって何度も借金と購入を繰り返した結果、卵のベンジーが細胞分裂を始めた頃の大里家は、七つのビルと二つのホテルのオーナーで、毎日車を変えても一ヶ月じゃ乗り切れないほど高級車も持っていた。

それがベンジーがお腹にいる間に土地バブルも弾けて地価が暴落。全ての資産価値が数分の一に減っただけでなく、リニアの噂まで消えてしまった。

そしてその結果、ベンジーが生まれてきた時には、恐ろしいほどの借金を抱えていたという。どれほどの借金なのか一度ベンジーに聞いた時、彼の答えはこうだった。

「俺が生まれた頃は、利子だけで毎年一軒家が買えるほどだったらしい」

普通これだけ借金をしょってしまったら自己破産をしてゼロからの人生を歩むか、死を選んで人生をゼロにしてしまうだろう。しかしベンジーのお父さんは諦めなかった。生まれた息子に勉士と名づけ、大里ベンジを期してマイナスからの人生を歩み始めたのだ。

覚悟を決めたおじさんはすごかった。ウチのオヤジに聞いた話では、おじさんは背中一面に龍虎のタトゥーを貼り付けて銀行に乗り込み、頭取室で諸肌脱ぐとドスの利いた声でこう囁いたそうだ。

「この指、何本差し上げれば返済猶予期間を頂けるんですかねえ」

オヤジの話によると当時は「地上げ屋」なんて商売があったくらい土地取引にヤクザ絡みが多く、銀行とヤクザのトラブルは珍しいことじゃなかったらしい。斗志輝おじさんが左手を頭取の机に叩きつけ、右手に握った短刀で小指の半ばまで切ったところで二年間の返済猶予を勝ち取ったという。

こうして返済を始めるまでの時間の猶予を得たおじさんは、肉体労働の傍らにパソコンでの株取引を始め、その後は一日中部屋にこもってのデイトレード。毎年家が買えるほどの利子を払いつつ、十七年で借金をほぼ払い終えていたのだ。

しかし今でもベンジーの家は貧乏のまま。ていうか今まで以上に大ピンチ。誤算は去年九月に始まったキーマンショックだ。アメリカのペテンは世界を巻き込み、ベンジー一家の住むアパートにまで押し寄せた。あと四千万円ちょっとまで減っていた借金は、一気に億の単位に再突入。

ただ、これだけならベンジーのお父さんは乗り切れるだろう。問題は自己資本が減った銀行が、貸しはがしを始めた事。運転資金がなければ、いくら優秀なトレーダーでも稼ぐことはできない。目先の一千万を引き剥がそうとする銀行と、未来の億を主張するベンジーのお父さん。昔話だったら目先の欲に目がくらんだじいさんの方が貧乏くじを引くものだと相場は決まっていたけれど、今はデジタルマネーが光の速さで世界を闊歩する二十一世紀。ネットワークに住む神様が「貧乏くじは貧乏人が引くものである」と合理的な御神託を下した結果、大里家はわずか百万にも満たない運転資金で一億を越す借金に立ち向かうことになったんだ。

一方その家族を支えるベンジーのお母さんも大変だった。大富豪のお嫁さんという玉の輿生活が一転して借金地獄に転落したのだから。

しかも、ただでさえ妊娠期間は精神状態が不安定になるというのに、日々お腹が大きくなる

に従って資産が減っていくという異常な日々。いつの間にかベンジーのお母さんは超節約マニアになってしまったんだ。節水節電は当たり前。洗濯やお風呂は週一回だし、パソコンがある部屋はディスプレイの明かりだけで十分だということで蛍光灯がついていない。食事なんかも最初は奥様雑誌に載っている「超節約の美味しい晩ご飯」みたいな物を作っていたらしいけど、それでは買い物に頭を使わないといけないし、調理器具や食器も洗わなくてははいけない。そこで様々なことを調べ上げてたどり着いたのが「究極の雑穀おにぎり」。栄養満点の雑穀米を海苔で包んだおにぎりだ。これならば買い物に行く手間は激減するし、朝一度炊いておにぎりにしておけば、その後は炊事が必要ないし、パソコンをやりながら食べることもできる。これで空いた時間を使ってベンジーのお母さんもネットビジネスに参入し、大里家の借金返済にも加速がついた。

結果ベンジーのお弁当は全ておにぎりとなった。そして給食のない高校では、毎日巨大なおにぎりを食べる姿が目撃され、その端正なみやび顔と相まって「おにぎり王子」と称されるようになったわけ。

そして期末テスト最終日の今朝、新聞配達をしていたベンジーが事故にあった所から物語は始まる。しかもそれは殺人未遂の疑いまでであるという。

ミステリーの香りが少し漂っているような気が、しなくもない。

病室の扉を開けたとたんに飛び出してきたのは、ヘビー級のパンチ力を持った臭いの塊だった。巨大な大名寺総合病院に入ってからずっと臭^{しゅうせき}跡を辿るように歩いてきたので、扉を開ける前から覚悟はしていた。しかし炬燵のように暖かい室内で増幅された臭いの重さは、「悪臭物質であるメチルメルカプタンの分子量は空気の約一・五倍しかありません」なんていう科学で説明できるものじゃない。

「おお、タケシ君じゃないか。勉士の見舞いに来てくれたのかね」

チェシャ猫並みの大きな笑顔で僕を招いた臭いの主は、ベンジーのお父さん。無精ひげと伸びっばなしの蓬^{ほうはつ}髪が、立ち上る臭気のごとく揺らめいている。

「斗志輝^{としき}おじさん、高志ですよタ・カ・シ。お久しぶりです」

極力鼻に空気が入らないように、腹話術のような省エネモードの喋り方。

「二年ぶりくらいかな。きんどーさんは元気かね」

斗志輝おじさんと父は幼馴染。二人が子供の頃に人気だった漫画にちなんで「トシちゃん」「きんどーさん」と呼び合う間柄。ちなみにウチの苗字は近藤で、読みは当然「こんどう」だ。「元気でやってますよ。今でもおじさんと組んでクラスをしっちゃかめっちゃかにした話をよく聞かされてます」

ホントは店がつぶれる寸前で、夜はファーストフード深夜まで働いて、さらに最後の清掃のアルバイトまでやっている。そのせいもあって母さんにたたき起こされないと何時までも寝ているほど元気をなくしちゃっているんだけど、そんなことは斗志輝おじさんには言えない。

「それにしても、今日は一段とキョーレツですね」

かろうじて口呼吸。倒れそう。

「そうかな、一応着替えてはきたんだけど」

クンクンと臭いを嗅いでいるダウンジャケットは古びてはいるけれど清潔そう。しかし、この強烈な臭いの主が中に入っていれば、たとえ宇宙服を着ていても、十四層の特殊繊維を食い破って臭いの分子は飛び出してくることだろう。

「だって見てくださいよ、病室のみんな逃げちゃってるじゃないですか」

六つあるベッドの内、四つは空。しかもよほどあわてて逃げて行ったらしく読みかけの本やお菓子やらが散らかったまま。カーテンが引いてある一つのベッドだけはいるのかいないのかわからないけど、いるのなら多分眠ったまま気絶してると思う。

「それじゃ、友達も来てくれたようだし、帰るとするか」

じゃあ、と帰る姿は野武士のように颯爽^{さつそう}そのもの。にもかかわらず僕は千と千尋に出てきた「オクサレ様」を思い出す。食べ物を腐らせる臭気を撒き散らし、道行く先々で皆が先を争って逃げてゆく、ヘドロのような神様だ。オクサレ様は千尋が自転車を引きぬいたおかげで龍の姿をした川の神に戻れたけれど、僕らの世界に千尋はいない。誰も斗志輝おじさんの貧乏を引き抜いてはくれないのだ。病院の廊下を逃げ惑う人達の姿を想像し、僕は笑っていいのかどうか少し悩んだ。

「やっほうベンジー。自転車でコケたんだってね」

ギブスをまいた左足をひっぱたきつつ窓を全開。外界に頭を突っ込んで、プールの端から端まで潜水で泳いだ後のように深呼吸した。うーんニッポンの空気はうまい。

「コケたなんてもんじゃねえよ。車輪の位置にロープ張られてたんだよ。配達最終コーナーのところで」

「最終コーナーって言ったら、この病院のすぐ下じゃん。よかったねえすぐ入院できて」

「バカ言うなよ、下手すりゃ壁に激突してお陀仏^{だぶつ}だってんで朝っぱらから刑事が来て事情聴取だぜ」

大変な事態、ということは何となく飲み込めたけれど、さっきの強烈な臭いに比べると全然ショックは薄い。第一、被害者のベンジーが他人事みたいな口調で「お陀仏」なんて古臭いセリフを言っているのだから、ドラマのような大げさなアクションは取りようがない。

「で、犯人はわかったの」

「残念ながら犯人は、犯行現場に名札を置いていってくれなかった」

無駄な質問に、ベンジーの返事は冷たい。

「そりゃまあ、そんなにすぐにはわからないと思うけど、心当たりとかは」

「刑事にも同じことを聞かれたが、答えはノーだ。俺を殺そうとする奴が現れるほど人付き合いは良くないからな」

「わかんないぞ。例えばベンジーの成績を妬んだヤツとか。会長なんか怪しくない」

会長というのは、一年生の時からこの夏まで生徒会長をやっていた三上誠司^{みかみせいじ}のこと。彼もまた

呆れるほどの天才なんだけど、母親のお腹の中で普通の人生の何十倍の落差を味わったベンジーには遠く及ばず、成績は常に二番。ベンジーが休んだおかげで彼はこの期末でトップに立てるはず。

「三上がそんなことするか。あいつは地元のためにうちの高校に来たようなやつなんだぜ」

確かに三上くんはバイオレンス系とは最も縁の遠いキャラクター。経済的に地元の公立高校にしか行けなかったベンジーと違って、県会議員の息子である三上くんならば灘や開成でも余裕で行けたのに「地元高校の進学率を上げるため」にウチの高校にやってきた。地元を愛し、常に地元のために活動する三上くんは、彼を主役に教育委員会推奨映画が作れそうなほどの好青年だ。

「冗談だよ。試験期間中でもボランティアで街の清掃をやるような会長が、成績のために馬鹿なことはしないっしょ」

「誰が馬鹿だって」

病室に残っていた臭いが、たった一声でミントの香りに変わるマジック。いつの間に来たのか、開けっ放しにした病室の扉のところに三上くんがいた。オヤジがいつも「ヤマさん登場」と呼んでいる、ドラマでよくある現れ方だ。圧倒的支持率で生徒会長を二年続けたわが校のヒーローは登場の仕方までドラマティック。

「あれ、会長。わざわざベンジーのお見舞いに来たの」

三上くんとベンジーは同じ文系特進クラス・通称「^{もんとく}文特」のクラスメイトだけれど、基本誰も喋らないベンジーが三上くんと仲がいいとは思えない。ちなみに僕は理系普通クラスで通称「^{りぼん}理凡」、または「リボーン」だ。

「とっくに元会長だぜ。もともとここにはおじが上の四階に入院していてね。見舞いに来たら大里君のことが話題になったんだけど、ちょうど話している時に下からすごい臭いができてね」

「それはベンジーのお父さん」

ベンジーの目配せで、僕が代わりに答えた。

「それは失礼」

軽く慌てる仕草がちょっと芝居がかっているけれど、そこがまた憎らしいほどかっこいい。開校六十周年にして初めて生徒会にファンクラブができたのも仕方ないと認めよう。

「なんかこのところ、お風呂に入る時間もないくらい忙しいらしいよ」

うちのオヤジの話だと、斗志輝おじさんは運転資金を減らされて以来、世界中で二十四時間常に変動し続ける相場のために、平日は殆ど一睡もせず売買に明け暮れ、休日は世界中の情報を集めるためにネットの中を駆け回っているらしい。

「でも父が言っていたよ。大里さんならあと数年で借金を返し終わって、一財産を築くだろうって。ところでさっきは何が馬鹿な事なんだって」

「いやそれはその。ベンジーの事故でだれが犯人かって話なんだけど」

「俺がトップを取るために仕掛けたってことか。確かに今度のテストじゃ一番になるだろうけど、全然嬉しくないぜ、俺は。それよりも俺は大里くんが東大に行かない方が悔しいな。どうせ高校なんかのテストじゃ本当の力はわからない。どっちが首席で卒業できるかで大里くんと競いあ

いたかったよ」

根が素直じゃない僕としては、心の中じゃベンジーが東大に行かなくてほっとしてるんじゃない、って思ったけど、それを口にするほど仲が悪くも良くもない。ちなみにベンジーの志望校は名大。ここらじゃ一番の名古屋大学のことで、愛知県民は名古屋駅を「めええき」と発音するように名古屋大学も愛を込めて「めえだい」と発音する。これを「めいだい」と発音するようではエセ愛知県民とみなされるし、「なごやだいがく」と呼ぶようでは完全によそ者だ。「名」の発音はリトマス試験紙のように愛知県民度を測定する。

そして、愛知県民が大挙して大阪に住むようになれば大阪駅は「でええき」と発音されるようになるというのが僕の仮説だけど、未だ検証されていない。

「それよりも四階の噂じゃ、配達トラブルじゃないかって言ってたぜ」

「新聞配達で殺人事件になるようなトラブルなんかあるの」

「リストラさ」

一瞬間をおいてキーワードから喋り始める。まるでテレビリポーターのような口ぶりだ。

「キーマンショックに続いて起こったトミタショックのせいで、トミタの城下町でもあるこのへんじゃ新聞をとる家庭がずいぶん減ったことは知っているだろ」

「ああ、うちの喫茶店でも新聞を半分に減らしたよ。それでベンジーのところでも誰かがリストラにあったわけ」

さっきからまるで他人事のように会長の話を聞き流しているベンジーに話を振ってみた。

「ああ俺と同じ学生バイトが一人クビになったって聞いたけど」

三上くんには一顧だにせず、ベンジーは僕に向かって答えた。

「そう、大里くんが配達範囲を広げる代わりにブラジル人の少年が一人クビになったんだってね。ところがその中学生の家は親も派遣切りに遭っててね、その子が一家の大黒柱。家族の生活を守るために、大里くんにはトラップをしかけたってのが四階の噂だ」

「でも確か夏に東京かどこかで、道にロープが張られていた事件があったじゃない。最近米兵の子が捕まったから、ニュースでよくやってるよね。あれの真似じゃないの」

「ま、俺もそうだと思うけどね。ただ上のおじさんたちは噂が好きだし、それに例の発火事件とか幽霊話とか最近ブラジル人がらみの事件が多いだろ」

発火事件というのは、この病院から割と近くにあるゴミステーションから火が出たこと。警察は、この発火は乾燥剤とアルコール度数の強いお酒が混ざったことが原因であると発表し、そして同時に先月起きたゴミ収集車の発火事件も同様のことが原因である可能性があるため乾燥剤の廃棄には十分注意するように促した。

しかしこの発火したゴミステーションがブラジル人が多数住む地域であったことやゴミ収集車が燃え出したのもその地域の回収を行った後だったこともあり、一部日本人がこの発表に噛み付いた。「冗談じゃない、私たちはきちんとゴミを捨てている。注意をするならゴミの分別をしないブラジル人にしろ」と。

この言いがかりとも思えるような抗議に反発するブラジル人と、同調する日本人の間で反目が

一気にエスカレート。ブラジルの人が出したゴミをチェックしようとする日本人をブラジルの人が殴りつけるなんていう事件まで起きていた。

ちなみに幽霊話は知らない。最近サンバを踊る幽霊が出るなんて話はあったっけ。

「でもあれはブラジルの人がやったと決まったわけじゃないじゃない」

トミタショック以降来る回数はめっきり減ってしまったけれど、うちのお店にはブラジル人の常連さんも多い。確かにトイレのゴミ箱に自宅からのゴミを捨てる人もいたけれど、多分それは文化の違い。陽気で義理堅いブラジル気質は一度気に入ったお店はギリギリまで鼻真にしてくれるので、お店としてはありがたいお客さんだ。

「俺もそう思うんだけど、年配の人から見ると街のトラブルはいつも外人がらみに思えるんじゃないかな。俺んとこのボランティアグループもできるだけトラブルを減らすためにゴミの分別方法をイラスト付きのポルトガル語で作って配ってあげたんだけど、それでもなかなか日本のゴミ捨てるルールは理解してもらえないみたいだ」

テスト期間もずっと活動している三上くんのボランティアグループは、成績の上位を維持していないと入れない、わが校のエリート集団だ。その彼らをして埋められない文化の溝は、このあたりの住宅地を深く分断している。

「このへんは特に分別には厳しいから他所から来た人には分かりにくいんじゃないかな」

「その他所からってのも問題なんだよな。あのトミタショックで寮を追い出された人たちが、こちらの知り合いの家に住み着くもんだから、アパートの一部屋に三家族ぐらい住んでるだろう。一軒一軒訪問して説明してあげても同居している他の人に伝えてくれないから全然効果が上がらないんだよな。日本に仕事を求めてやってきたのなら、仕事がなくなったら、他所の家に押しかけたりせずに国に帰れば良いと思うんだけどね」

そう三上くんが言い放ったとき、カーテンを引いたベッドから「帰れないよ」と小さな声が聞こえた。

カーテンが内側から引かれ、ベッドの中にある男の子の姿が現れた。

「帰れないんだ。僕の家族はみんな向こうのものを全て売ってきたから。それに僕は日本で生まれたからブラジルの言葉はうまくしゃべれないし。日本で暮らすしかないんだ」

「すまない」

スイッチを切り替えたように、三上くんは素直に謝った。

「君のことを言ったつもりではないし、僕が言いたかったのは街を暮らしやすくしたいということなんだ。みんなが仲良く暮らせる街を作るにはどうすればいいか。ちょっと言葉が悪かったけど、お互い協力しあえばきっといい街が作れると思うよ」

集会の時に見せていた爽やか演説モード。一部強烈なアンチもいたけれど、三上くんの演説で学校の雰囲気が大きく変わったことは事実だ。

「じゃあもう帰るか」

と僕らに向かって爽やかに手を振ると、少年に向かって優しく声をかけた。

「ごめんよ。早く体を治して、元気になれよ」

漫画なら「キラッ」と文字が入るくらい白い歯を輝かせて去っていった。

「すみません。勝手に話を聞いてしまって」

カーテンの陰から姿を現したのは看護婦さん...なんだけど、目があつた瞬間、心臓が動いているのにAEDをかけられたようなショックを受けた。

ちょっと待ったあ。美しすぎるぞ。

とりあえず僕は、心のなかで呪文を唱え始めた。「あの人は別の世界の人、別の世界の人、別の世界の人」。こうでもしないといきなり魂を根こそぎ引き抜かれてしまいそうな気がしたからだ。

それでなくても僕は惚れやすい。全くもってモテたことがないのは年齢イコール彼女いない歴の実績が証明しているけど。一目惚れ体質は直らない。好みの人を見てしまったら、気持ちが一気に突っ走る。そしてなぜか相手も自分に気があるんじゃないかと思ひ込む。そしてその結果はいつも玉砕。もし流した涙と鼻水がボルヴィックなら、アフリカの子どもたちに清潔で安全な水を百リットルは贈ることができただろう。だから僕は「綺麗な人は別の世界の住民だ」と思ひ込むことに決めたんだ。

「早く声をかけなければとっていたのですが、この子が具合悪そうだったから」

「それは父が原因ですから気にしないでください」

驚いたことに、ベンジーが自ら話しかけている。いやいや驚くには当たらない。こんな綺麗な人を見てしまったら、メデューサに石にされていた人だって動き出す。

「ごめんね、臭かっただろう。でも悪気はなかったんだよ」

こちらはごく普通。辛い少年時代を送ったベンジーは弱い立場の子に優しいのだ。

「大丈夫だよ。僕んちだって夏は結構大変だったんだ。子どもが三人いる親戚のおじさんの家に僕の家族まで一緒に住んでいるから」

長いまつげを瞬^{またた}かせて微笑む姿は天使のように愛らしい。そしてこの天使の微笑みは、ごく稀にベンジーの表情にも舞い降りる。多分天使は天使として生まれるのではなく、神の与えた試練を乗り越えて、初めて天使になるのだろう。

そしてお互いに軽く自己紹介。少年は佐藤・シウヴァ・ケンタ、そして看護婦さんはなぜか苗字を教えてくれず、カオルとだけ言って「薫」と書かれた名札を指さした。もしかしたら苗字が「鬼瓦」とか「猪熊」で、恥ずかしいから隠しているのかもしれないけれど、まだそこまでは聞けない。でも名前と呼べるのが超嬉しかったりして。あ、でも薫が苗字の可能性もあるんだ。

「ところでさあ、さっきの人が幽霊の話をしていたけど、最近サンバを踊る幽霊なんているの」

少年の顔が、それこそ幽霊を見たようにこわばった。軽い冗談のつもりだったのに。

「いるんだよ。この病院で死んじゃった女の子の幽霊が。昨日も上の階に出たって言ってたもん」

「大丈夫。幽霊なんかいないから」

優しく少年のフワフワ頭をなでる薫さん。細い指先にピンクの爪が輝いている。うらやましすぎるぞ、ケンタ。僕はあまり痛い思いをせずに入院できる方法を真剣に考えてみたけど、基本ビ

ビリなので無理っばい。

「そうだ。ケンタくん、ベンジーはスゴク頭がイイから、きっと入院している間に幽霊の正体を見つけてくれるよ。何か知ってることがあったら話してくれないかな」

日常生活すべてを論理的に考えるベンジーは不可思議現象を恐れない。小学校時代、ベンジーを脅かそうと悪ガキたちが幽霊や人魂を仕掛けた時も、それらの動きが物理法則に従っているからと言って恐れず、即座に釣り糸の位置や人魂の素材を見ぬいたのは有名な話だ。ベンジーをダシに使うのは申し訳ないけど、これなら自然に薫さんと話す機会もありそうだ。

ああ、薫さんが別の世界の人間だって思い込むのを忘れてた。恋の予感。

ケンタくんや薫さんの話によると、新たな幽霊話が持ち上がったのは今週に入ってから。それ以前にも都市伝説的な幽霊話はあったのだけど、決定的に違うのはその体験者の多さと規則性。大体夜十一時過ぎからモニターの不調やテレビが勝手についたり消えたりするポルダーガイスト現象が起り、夜の十二時半から一時の間くらいには四階の廊下で足音が往復したり耳元で何か囁いたり歌ったりするらしい。この証言はほとんどがナースコールや見回りで廊下にいた看護婦さんで、今はその時間に極力廊下に出ないようにしているらしい。また、他にも人魂らしきものが飛んでいたり、窓の外に髪の高い少女が見えたりという話もあるけれど、これは一般入院患者の話で今までも似たような目撃情報は時々あったということ。

「でもなんで三上くんはその幽霊がブラジル人だと言ってたのかな」

「それは多分、先週亡くなった女の子のことだと思うの」

そう言って薫さんは、先週心臓死術で亡くなった女の子の話をしてくれた。両親がブラジルから移住し、日本で生まれたその子は生まれつき心臓が弱く手術をしないと長くは生きられないと言われていたらしい。そのため両親は共働きで必死に働き、少女は自宅で兄弟に囲まれて療養生活を送っていた。ところが先週金曜日に少女の容態が急変、急患で運び込まれたこの病院で日付が変わる頃に亡くなった。そしてその後に幽霊騒ぎが始まったのだ。

「それで、実際に幽霊騒ぎになったのはいつから」

「多分火曜日あたりからだと思う。夜勤の子が見回りに行っていたら、後ろから足音が聞こえて」

ふっと後ろを振り返る薫さん。長い黒髪がふわりと広がり、微かな花の香りが届く。今日はいい日だ。

「振り返ったけど、誰もいなかったの」

ここは怖がるどころ。空気が読めるならば、ちょっとは怖がるリアクションをしなければならぬ。しかし幸せに浸っている僕にそんな余裕はないし、ベンジーにとっては単なる基本データの入力に過ぎない。

「そしてね」僕らのノーリアクションに気を悪くするでもなく薫さんは続けた。「通り過ぎる瞬間に耳元で何か呟いていったんですって」

「その言葉はわかるかな」

データの精度を上げることに余念のないベンジー。

「ミウ、クラシオ。ブラジルの人に聞いたところでは、私の心臓ってという意味らしいわ」

「ああ、Meu coraçãoだね」

このあたりでポルトガル語を見かけるのはごく日常で、あいさつくらいなら大抵の人が知っているけど、心臓を発音できる人が多くいるとは思えない。幽霊の正体はブラジル人か、さもなければベンジーの生霊だろう。

病院からの帰りがけに事件現場に寄ってみた。ベンジーが最終コーナと呼んでいたそこは病院から徒歩三分でありながら病院の敷地まで十メートルしか離れてない。ということは僕の歩く速度は時速二百メートル。と計算した人はまさかないだろう。今僕がいるのはちょうど病院からすぐに見下ろすことが出来る位置にある遊歩道で、僕の位置からだと目の前のコンクリートの崖の上に病院の四階あたりが見える。

病院のすぐ横にある新興住宅地をグルリと囲む遊歩道は、病院を正面に見ながら下るゆるい坂道が左にカーブして病院と平行になる。平行になった後は再び緩い上りになり、まっすぐ突き抜ければ市道に出るし、手前で左折すれば住宅地の中の新聞集配所まであと数件の配達を残すのみ。坂道を下ってきたベンジーの自転車は、カーブの後の上り坂に備えてスピードを出していたはずだ。そこに張られていたロープ。目の前の崖に激突しなかったのは幸運としか言いようがない。

警察の立ち入り禁止テープで囲まれているのは、カーブの外側にある腰くらいの高さの柵の頂点を挟んで四メートル程とその外側にある電柱をつなぐ三角形。そして遊歩道の内側の頂点にある街路樹のまわりにも支柱を立てて木を囲むようにテープがぐるぐる巻きになっている。街路樹には膝下くらいの高さにはロープで擦れたと思いき真新しい跡が残っているのだけど、よく見ると二メートルくらいの高さの位置にも結構大きな擦り傷がある。犯人は一度首を狙って紐を張ったんだろうか。

でも二メートル？

犯人はベンジーがサーカスで使うような巨大自転車で新聞配達をしていると思ったんだろうか。そうなると犯人はサーカスの団員で、自分たちが普段使っている自転車が普通の自転車だと思っていた。なんてはずはないか。

次に電柱を調べてみたけれど特に目立った傷はない。まあ金属製のワイヤーでも使わない限り電柱に目立つ傷は付けられないと思うけど。しょうが無いので柵を乗り越えて電柱の裏側に行つて慎重に調べてみると、うっすらと他と色が違う場所が二箇所。どちらも街路樹の傷と同じ二メートルと膝の高さ。違うのは高い方はちょうど足場ボルトの位置にあつて割と幅広く擦れた感じがあるのに対して、低い方はよほど目を凝らさないとわからないほど細い筋があるだけ。あとはベーカー街にいる名探偵から七つ道具でも借りてこないと調べようがない。

遊歩道に戻ろうと、立ち入り禁止テープの端まで行ったところで気がついた。なぜこんなに広

く囲っている？街路樹の方は街路樹の周り三十センチ程だけなのに。しかも二等辺三角形ではなく、病院と逆方向の頂点が不自然に遠い。おお、なんか気分は名探偵。

調べてみるとビンゴ。頂点から二メートル近く離れたところの柵の格子にも同じ高さに擦れた跡がある。電柱にしばられたロープはここを通過して街路樹に結び付けられたに違いない。でもなぜここなのか。坂を下ってきたベンジーを崖にぶつける気なら、もう一つ向こうの支柱あたりを通した方が下り道に垂直、すなわち崖に平行になるので効果的だと思うけど。

このへんまで考えたところで推理は限界。そもそも昨日まで半分徹夜で試験勉強をしていたんだから、これ以上考えろというところに無理がある。

さて、ベンジーの話によるとここで転倒した後、散らばった新聞をかき集めて、折れた左足を引きずりながら残りの配達を終え、集配所までたどり着いたところでダウン。

今さらだけどベンジーの根性と体力には驚かされる。中学時代から新聞配達を続け、十五キロ離れた高校への自転車通学に休日の肉体労働で鍛えたベンジーの強さは、この坂を上がるだけで息が切れ始めている僕から見ると、同じヒト科に所属しているのが恥ずかしくなるほど凄まじい。

例えば地獄の乗鞍研修。うちの高校は進学校のくせに、というのか進学校だからとう言うべきなのか非常にキビシイ研修旅行がある。どのくらい厳しいかというと、連日朝から夜中の二時までの勉強特訓を四日間続けた最終日に乗鞍登山。受験に打ち勝つ精神力を身につけるのに、朝六時起きで山に登る必要がどこにある。ヒマラヤ山中にある大学でも受験しない限り、二時までの勉強で十分じゃないか。そんな乗鞍登山で、しかも十月の初めだというのに小雪が舞い散るといふ悪天候の中、規定時間内に十キロ先の目的地についたのはベンジーと三上くんの二人だけ。三上くんにとっては二時までの勉強は単なる日常で、ベンジーに至っては早く着きすぎたから「ついでに山頂まで登ってきた」そうだ。

そんなことを考えつつ坂を登り切ると、病院のすぐ横に出る。このまま二十分歩いて家に帰るか、十分歩いて駅でお茶するか。悩んだのはほんの一秒。なんととっても寒すぎる。駅に行って温かい飲み物でもチャージしなければ、僕は家に辿り着く前に凍死するか、全身毛むくじらの雪男に進化するに違いない。

喫茶店の息子が、マックでお茶してていいのか。という議論はさておいておこう。なんととってもここは温かい。と言いつつホットココアを飲んでいるのは洒落のためじゃない。最近美味しくなくなったという噂のコーヒーを飲んで、もしほんとに美味しかったら洒落にならないじゃない。くつろぎに来た店で、なんで実家の未来を悲観しなきゃならないんだ。

この駅のマックで気に入っているのは窓際のカウンター席。駅に来る人達を眺めているのは実に楽しい。例えばあのオッサンみたいなオバサンは、実はほんとにオッサンで、夕食をスーパーの試食コーナーで済ませるためにわざわざ女装している。そしてあのチラチラと後ろを振り返りながら歩いているサラリーマンは、実は時効成立間際の詐欺師。なんの根拠もないのだけれど、

こうやって人の人生を勝手に作って遊んでいる。ほらあの足元がおぼつかないギャルメイクの推定女子高生。よたよたしているのは実はほんとお年寄りで、化粧を落とすと森光子さんなんだ。そしてあのベージュのコートを着た薫さんみたいに長い黒髪の女の子は...リアルに薫さんだ。

ナース姿もいいけど、清楚なコート姿もまた美しい。北風にいじめられてちょっぴり赤くなった鼻先が実に可愛い。そして...、あつトイレに行っちゃった。いやいやあんな美人がトイレに行くはずがない、あそこにはコインロッカーもあったはずだから、荷物を取りに行っただけだろう。いやいやちょっと化粧直しかな。もっと綺麗になって出てきたりして。そして、出てきたら僕に気がついて、マックに入ってくるんだ。「偶然ですね」って。そして、そして、そして。

三十分たっても、彼女はトイレから出てこなかった。

「ひだまり」はトミタ市の隣三河市にある小さな喫茶店だ。国道から一本入った立地に、レンガタイルを貼った外装は不思議なほど周囲の景色に溶け込んでいる。「隠れ家みたい」と常連さんには好評だけど、初めてのお客さんが必ず一度は通りすぎてしまうようでは隠れ過ぎにもほどがある。あんみつ喫茶なら聞いたことがあるけれど、隠密喫茶では洒落にならない。「死して屍拾う者なし」なんてフレーズが浮かんできたけれど、パチンコかなんかのコマーシャルだったのだろうか。縁起でもない。

「ただいま」

ガラス越しにお客さんがいないのを確認して店の扉を開けた。

「おかえり、ベンジー君入院したんだってね」

帰ってきたのが息子だとわかって閉じかけた雑誌を開き直しているのが、我が母近藤正美。実年齢より若く見られることに手間を惜しまない努力家？なんだけど、店が傾きかけてから徐々に外見と年齢が一致してきた模様。高価な魔法の薬品が手に入らなくなったのか、手間を惜しむ気がなくなってきたのか。鏡を見ているときには話しかけないのが、近藤家の新しい家訓だ。

「なんで知ってるの？ニュースでやってた？」

「ううん、日日新聞の三輪さんが来てたから」

「なるほどね。それでベンジーの代わりの配達人は決まったのかな」

「なんか、前にやってた子をまた雇うって言ってたわよ」

「ブラジル人の」

「そう、中学生なのに偉いわね」

「ハイハイ、あんまり偉くない高校生も働いてまいります」

そう言って裏の厨房に逃げ込んだ。店の売上が激減して以来、僕にもバイトをさせようという気配が言葉の端々に滲んでいる。うちの高校でも経済的理由なら申請すれば新聞配達への許可は下りるはずだけど、バイクの許可は下りない。ベンジーみたいに三時起きで自転車配達できるほどの体力はないのだ。

僕の仕事は「お茶請け」の生チョコ作り。東海地方以外の人には馴染みがないことかもしれな

いけれど、このあたりではコーヒーを頼めば、クリームや砂糖が付いてくるように、「モーニング」か「お茶請け」が無料で付いてくる。モーニングはトーストに玉子とサラダが標準形だけど、店によってはサンドイッチやホットドッグだったり、おにぎりに赤だし付きなんてものもある。しかもトミタ城下町で交代勤務で昼夜の別なく働く人が多いこの辺ではモーニングは朝だけとは限らず一日中なんてところも珍しくない。そして我が「ひだまり」も去年までは一日中モーニングをやっていた。

チェーン店でもないのに、たった三百五十円くらいでちょっとした食事まで付けて経営が成り立つのか心配になる人もいるだろうけど、お客さんの方でもよくしたもので給料日前には夕食をモーニングで済ませる人でも、給料が入ればちゃんとカレーやケーキなんかを頼んでくれるので、それなりに利益が上がるものだった。

しかし今やそれが過去形になっている。かつては出勤前の腹ごしらえをモーニングで済ませていた人は自宅でパンと牛乳で済ませるようになり、お昼ごはんはモーニングを食べていた人は牛丼を食べるようになってしまったのだ。今やコーヒーよりも牛丼の方が安い時代。キン肉マンはついに俺の時代がやってきたと大喜びしていることだろう。

さて、そんなわけで終日モーニングから方向転換したひだまりがターゲットにしたのが主婦層だ。旦那のお小遣いは減っても、主婦同士のうわさ話にかかる費用は情報化時代の必要経費で仕分けの対象外。そんな主婦層に向けて食パンと玉子のモーニングをフレンチトーストに、ミックスナッツのお茶請けを生チョコにと変えたわけ。そしてその制作担当を任されたのが、小学生の頃から喫茶店の一人息子として夕食作成を担当していた近藤高志、すなわち僕だ。

僕が最初に作った生チョコは、クックパッドで調べた市販のチョコを温めた生クリームに混ぜるだけのもの。結構美味しいと思ったんだけど、これがたまに残される。全部残されるならチョコが苦手なんだろうと思うけど、半分とか食べて残されることも珍しくない。

これが僕の中にあつた料理魂に火をつけた。自慢じゃないが僕の作った夕ごはんは一度も残されたことがない。ネットをフル活用してあらゆるレシピを検索すると、貯めていたお年玉をつぎ込んで、世界各地のチョコや様々な生クリームを買い集めて研究を重ねたんだ。そしてその研究成果がお腹のまわりに経験値として蓄積し、ウエストがワンサイズ増えた頃、究極のレシピができたんだ。

さすがにそのレシピは公開できないけど、作り方なら教えよう。三十六度に温めたチョコレートに、五十度に温めた生クリームを加え、あとはひたすら練るべし、練るべし、練るべし。とろけたチョコがクリームと混ざり、それがチョコレートと油に分離するまでひたすら練り続ける。そしてそこに洋酒（うちではレミーマルタン）を加え、今度は分離したチョコがもどるまでひたすら練り続ける。するとある時点から急に粘りが出て、幾重にも重ねた絹がほどけるような、絶妙な口どけの生チョコに生まれ変わるんだ。

こうしてやっとできたチョコ。お客さんには大好評なんだけど、ひとつ悩みがある。練って練って練り続けて作るだけに、このチョコを作り始めてからひと月で右腕だけが一回りも太くなってしまったんだ。このままいくと夏ごろにはひ弱な肉体に右腕だけがゴリマッチョ。大きなハサ

ミを振って求愛行動をとるシオマネキというカニのオスは、ハサミが大きいほどメスにモテるために、片方のハサミだけが日常生活にも不便するほど巨大に発達したという。はたして、右腕だけが太くなってしまった人間のオスは、女の子にもてるのだろうか。

燦々と輝く真夏の太陽の下、真っ白なビーチに向かって走りながら大きく右手を振る僕。

砂の中から次々に現れる巨大メスガニたち。

...ホラーだ。

薫さんを登場させるつもりで妄想し始めたのに。仕方がない、ミステリーで行こう。薫さんはどこに消えたのか。

その一、男子トイレと違い女子トイレは駅と直通になっている。

その二、女子トイレに住んでいる。

その三、見落とした。

どう考えても三だよなあ。妄想の世界に浸っている間に出ていったんだよなあ。

ってか、殺人未遂の可能性まである親友のことを考えようか。まず誰がやったのか。東京の事件の犯人は子どもが四人で、いたずら狙いと自供している。学者かなんかのコメンテーターがベトナム戦争では実際にオートバイに乗った米兵の首にワイヤーをひっかけて殺害する手口が多発したことや、同様の手口を使った映画や漫画に影響を受けたのだろうとコメントしていた。他にワイドショーで言っていたのが、十月にも茨城で同様の事件があったことや首なしライダーの都市伝説。

ただこれらの事件や噂では皆ちようどバイクに乗った人の首にあたる一・ニメートル前後の高さ張られていたのに対して、今回は車輪の高さ。街路樹の傷から考えると三十から四十センチのものだろう。この事実から考えられる犯人像は、身長六十センチ以下の子供または背の曲がった老人。背が低いため高い位置に結びつけることができなかった。なんてはずがない。低い方ならいくらでも低く結ぶことは可能だ。逆に二・五メートルの高さに張られていたのなら犯人はチェ・ホンマンの可能性が高いけど、これに引っかかるのは暴走キリン位のものだろう。要するに、この高さからわかるのは、犯人は映画や漫画の影響を受けないド田舎の住民か幼い子供だということ。

駄目だ、どう考えてもマジメな結論に到達しない。大体いくら真面目に考えようとしても殺人未遂事件とは思えない。ベンジーは人から恨みを買うほど人付き合いがあるわけじゃないし、ここは平和の国ニッポンでアフガニスタンみたいな戦乱の地じゃない。事実は小説よりも奇なりなんて言うけれど、未だに火星人は襲来していないしリトル・ピープルに会った人もいない。

ロープはどこかの子どもが、通りがかった人を転ばせようとイタズラのために張ったもので、ベンジーが引っかかったのは不幸な事故。多分数日中に子どもが親に付き添われて出頭するだろう。

では幽霊話はどうか。たぶん病院につきものの都市伝説に過ぎないと思うけど、女の子が死んじゃってから始まる上に、病院に慣れている看護婦さんの証言も多い。現実的な選択肢は、やはりイタズラ。しかも病院内ということは入院患者が怪しい。

とりあえず今夜調べることになっているので、病院に行けばなにかヒントはあるだろう。ベンジーはまだ歩けないから、僕と薫さんの二人だけ。とりあえずパンツは履き替えよう。いやいや、別にいやらしいことを考えているわけじゃない。僕にだって勝負パンツという奴がある。武田信玄の家紋入り風林火山パンツだ。幽霊は信じちゃいないけど、いきなりなんかの音がしたときにビビる可能性がある。よもや女の子の前でチビるわけにはいかない。勝負の前に不動の心を貫いた信玄公のパンツを履けば、きっと靈験あらたかな御加護があることだろう。

でも、一応念のために水分は控えておこう。あくまでも念のためだからね。

深夜の病院。学校の怪談にでも出てくるような恐ろしい雰囲気かと思っていたら、救急外来窓口が開いているためか、一階のロビーは意外にも明るい。

入り口でアルコール消毒を済ませて入ると、待合室は親子連れが三組だけで閑散としている。テレビでは新型インフルエンザで夜間窓口は大忙し、なんてやっていたけれど大名寺病院は兵庫県の柏原病院を参考にして地域との連携を深めているのでコンビニ受診をする人は殆どいない。興味のある人のために簡単に説明すると、医師・看護師と病人や病院と病院に協力する住民グループがお互いに感謝状カードを贈りあう関係を築いたのだ。一方通行でなく相互の関係として、言葉だけではなく形として残るカードで感謝を伝え合うことにより、お互いのために働くモチベーションが高まった。その結果、医師や患者の負担を最小限にするための様々な工夫が自発的に行われるようになったというわけ。

そんな話はさておいて、窓口の人に名前を告げて薫さんを呼び出してもらっていると、後ろの自動ドアが開き次の患者さんが来た気配がした。何気なく振り返るとそこはカーニバル。しかも呆れるほど規模の小さい。大きくフリルのついた緑色のサンバ衣装に身を包み、夜だというのに白い縁のサングラスをかけた巨大な外人のオジサンが、キャリーバッグを引きずりつつステップを踏みながらやってきたのだ。

「サントスさん。ちゃんと手を消毒してください」

受付の人が叫んでも聞こえるわけがない。ヘッドフォンからのシャカシャカ音がここまで聞こえるほどの大音量なのだから。そして華麗とは言いがたいステップを踏みつつカウンターにたどり着くと、ヘッドフォンを外して「院長を呼べ」とふんぞり返った。

「ハイハイ、院長はいつものように会ってくださいますから、まずはキチンと手を消毒してください」

差し出された消毒液を受け取り、極めて大雑把に手を拭いて返そうとすると今度は「キャリーバッグのハンドルも」と一喝されている。そのキャリーバッグからは、なにやらボールのようなものが突きでていて、そこにはパソコンで打ち出したと思しきA四の紙を切り貼りした幟のようなものが取り付けられている。「大名寺病院は医療加護を認めよ！」これはまさか医療にも神の御加護があることを認めよ、てわけではなくて「過誤」だよな。

「このところ毎晩来てるらしいのよ」

と、ため息をつく姿がデジカメで撮って部屋中に飾りたいと思うほど美しいのは、言うまでもなく薫さん。

「亡くなった子のお父さんなんですか」

「それが違うの。ブラジル人社会の相談役だ、なんて言っているけど、みんなの話ではただのたかり屋。お金になりそうな話があるとなんにでも食いつくんですって」

なんかアヤシイ格好をしていると思ったら、本当に怪しい人だったんだ。人は見かけによるものなのか？

「それに幽霊騒ぎの発端になったポルダーガイスト騒ぎや幽霊の目撃はサントスさんが来てる時間が一番多いの」

「そいつは怪しい。大体真冬にサンバの格好で現れる事からして変だもんね。あの人はきっとブードゥーの魔術師で、あの緑の衣装は呪いの魔法に必要なんだ」

大真面目な顔をして頷いてみせると、薫さんは吹き出した。う～ん、吹き出す姿もまた美しい。なんで僕の目はデジカメじゃないんだろう。僕の画像記録メモリは、一枚百円のジャンク品並みの性能で、再生しようとするたびにバグが出る。妄想に現れる薫さんはいつも実物よりもツーランクぐらい落ちるし、しかもいきなりヒゲづらに変身したりと、思い通りのロマンスモードに入れないのだ。

「それはそうと、この四階への出入口はここしかないんですか」

「以前九州の方で暴力団の組長と間違えて一般の入院患者が射殺された事件があって以来警備が厳しくなって、夜はこのナースセンターを通らないと病室の方には行けないわ」

僕たちが通ってきたのは各階のナースセンターを結ぶ専用階段。そしてナースセンターを通らなければ病室に行けなくなると、外部から侵入していたずらすることは不可能に近い。従って僕たちが重点的にチェックしなければならないのは入院患者。ただし、もし幽霊が本物でなければ、の話だ。本物ならば別に律儀にナースセンターを通る必要は何もなく、壁からだろうが床からだろうが自由自在。頼るべきはセコムではなくて「妖魔退散」の護符だ。

僕らは口を閉じ、患者さんたちを起こさないように全ての病室をチェックした。夜の早い病院では十二時前でも真夜中同然で、物音一つしない。若干ロマンティックな要素には欠けるけど、断言しよう。薄暗がりや女の子と黙って歩くのは、実に楽しい。

時刻は十二時半。ベンジーの指示通り各病室のドアにティッシュを貼り、開ければ破れるようになっている。窓のロック、非常口のロックも確認済みで、念のため各部にティッシュが貼ってある。廊下の隅々までスピーカのような不審物が仕掛けられていないこともチェック済みだ。そして、薫さん以外のナースはナースコールがない限りセンターから出ない事になっている。

廊下は片側が病室で、反対側は上半分が窓で下半分の壁には手すり取り付けられている。照

明は四灯に一灯しか点灯しない省エネモード。廊下は端から端まで見渡せるし、歩く分には全く不自由しないけど、手すりや消火器の影がいつもより深い気がする。

窓には廊下の中が映り込んでいるだけで、ほとんど外は見えない。かろうじて窓に向かって右側にある市道を走る車のライトや看板のライトが見えるくらい。正面の住宅地は街灯の明かりが分かる程度で殆ど何も見えず、自分たちの姿が映り込むだけ。そして左側は山の斜面と開発中止になったゴルフ場があるだけなので真の闇。病室の扉が映り込んでいるだけだ。闇には光にない重さがある。清潔に磨きあげられたガラスで遮断された闇が窓を内側にたわませ、サッシの隙間から瘴気のように侵入しようとしている気さえする。

訂正しよう。薄暗がりや女の子と黙って歩くのは、楽しいばかりとは限らない。

僕らの足音しかしない単純な往復が十回も続いた頃だろうか、薫さんの手が僕の肩に触れた。僕は全力でロマンティック回路を全開にしようとした。しかし、残念ながらこの雰囲気ではロマンティックな要素はファンタの果汁並み、すなわちゼロだ。

「聞こえた？」

緊張のためか薫さんの声はずいぶんとハスキーになっている。僕だって喉がカラカラだ。

「シッ」唇に指を当て、そっと振り返る。確かに後ろから微かな足音が聞こえる。

ペタン、ペタン、ペタン

スリッパの足音だ。しかし姿は全く見えない。見えてもいけない。僕は慌てて視線を前に戻した。

ペタン、ペタン、ペタン。

時折立ち止まりながら、だんだん近づいてくる。僕らはもう動けない。

そして。

「ヒッ」悲鳴をあげたのは残念ながら僕だ。

足音は僕たちの間を、髪の毛一筋動かすこともなく、ゆっくりとすり抜けていった。そして五歩くらい先まで行くと足音はこちらに振り返り「ミウ・クラシオ」と囁き、そのままパタパタと僕らの間を抜け後ろに走り去っていった。

「それで」

ベンジーは巨大なおにぎりをパクついている最中なので「ほれへ」と聞こえたけど、この際それはどうでもいい。今は土曜日の朝。おにぎりしか食べないベンジーのために、大里家から特製おにぎりを出前してきたところだ。ちなみに昨日斗志輝おじさんがやってきたのは、お昼ごはんとかごはんの分のおにぎりを届けるため。おにぎり王子の口に病院食は合わないらしい。でもそのために面会時間外の朝七時に前を出前を届けさせるとは、王子様の偏食は筋金入りだ。

「その後すぐに調べたんだけど、どこのティッシュも破れてなかったよ」

本当はすぐではなくて、しばらくはその場で動けなかった。腰を抜かさなかったのは信玄公の御加護のおかげだろう。そして調べる前に僕らは一旦ナースセンターに戻った。何よりも生きて

いる人に会いたくなかったからだ。一度でも心霊現象にあった人なら分かってもらえるだろう。幽霊にあった後、何を差し置いてでも真っ先に見たいのは生きている人の顔だ。そして青い顔をしてセンターに戻ってきた僕らを見て、勇気ある婦長さんが代わりに調べましょうかって言ってくれたんだけど、僕たちはちゃんと自分たちでティッシュの確認をした。

「ということは、廊下にはタカシと薫さん以外誰もいなかったってことだな」

「間違いはないよ。看護婦さんたちも誰もナースセンターから出てないって」

「音は間違いなく後ろから聞こえたのか」

「最初はわからなかったけど、確かに後ろから僕らの間を通過して前に行った。しかも、あのミウなんかかって声も子どもの口くらいの高さから聞こえた気がする」

今思い出しても背中じゅうに小さな虫が這い回っているような寒気がする。あの時、姿は見えなくても、確かに足音の主はこちらを振りかえって囁いていた。

「要するに幽霊はちゃんと動いていたわけだ。そうすると後は化けて出る動機だな」

僕が体験しただけでなく、ベンジーが指示した方法で外部から誰も入っていないことを実証した以上、さすがのベンジーでさえも不可思議現象を認める気になったらしい。それにしてもさすが理論派。化けて出るものにも正当な理由が気になるらしい。

「悪いがタカシの方で、出てくる動機を調べてくれないかな。とりあえず親族、特に兄弟の様子が知りたい。それと謎のサンバ巨人から情報を集めてくれ。ポイントはなぜ医療過誤だと思ったのかだ」

まるっきり悪いとは思ってない表情で、サラリと指令を下す我らが王子。高貴なお方は人使いが荒い。

「あ、そうそう」病室を出ようとして思い出した。

「昨日帰りにベンジーがコケたところ見に行ったんだけど、聞きたい？」

「聞きたいわけじゃないけど、聞いてもらいたくて行ったんだろ」

まったくもって王子様は素直じゃない。

「張ってあったロープは多分警察が持って行ってしまったと思うんだけど」

そう言って、昨日調べたことを一通り話した。

「コーナーの頂点同士をつなぐのが高さ二メートルで、手前にずらしていた方が膝くらいだったわけか。低い方の正確な高さはわからないか」

「測ってないけど、ちょうど足のこの辺だった」

ギブスで固めて吊るしてある左足の脛にチョップを入れた。

「なるほどね。ちょうど自転車の車輪の中心だ」

「何がわかったの」

「まず高い方は、単に近所の子がバトミントンなんかのネットの代わりにして遊んでいただけだろう。あの遊歩道で完全に平地になっているのはあのあたりだけだからね。二メートルというのは高すぎる気がしないでもないけど、ちょうど足場ボルトの高さなら引っ掛けやすいし、たまに

来る通行人や自転車の邪魔にならないように気を使ったんだろうね」

「それで低い方は」

「回転モーメントだ」

いくら僕が理系でも、いきなり回転モーメントと言われてもわからない。ベンジーの処理速度は早すぎて時々不親切だ。

「なにそれ。回転するモーニング男達と」

くだらない処理速度なら負けない。モーニング娘とモーニングメンをかけたのが理解できたかねベンジー君。

「そこのボールペンをとってくれ」

スルーだ。

「このペン先を前輪の中心とすると、自転車と人間を合わせた重心はその後方七十センチ、高さも七十センチくらいのところにあるから、運動体としての自転車はこのボールペンのノックの方におもりを付けた状態で、こうやって四十五度上に傾けた形で移動している」

ペンの上端を持ち、ベットに据え付けられたテーブルの上に線がつくのも構わずベンジーはペンを滑らせる。

「さて、この移動体が障害物にぶつかると、すなわちペン先が急停止すると、どうなるか」

言いながら、滑らせていたペン先をティッシュの箱にぶつける。

「するとこのようにペン先を中心とした回転運動に変わる。自転車の上に乗っていた物体は斜め四十五度上方に投げ出され、柵を飛び越えてコンクリの崖に激突する」

自分の話なのに、ベンジーの話はテレビの解説者のように冷静だ。

「これがもし車輪の下の方でぶつかったのなら、運動は車輪がそれを乗り越える方向、すなわちペン先が上がる方向にも働くので回転モーメントは抑えられ、乗っていた物体はやや斜め前方に飛ばされるので、柵に当たるかハンドルに足をとられる形になる」

「じゃあ上なら」

「たとえば重心と回転軸の中心で急停止した場合」

ベンジーは四十五度で滑らせているボールペンの真ん中あたりを左手で止める。

「回転モーメントはゼロになり、自転車に乗っている物体は慣性の法則に従ってまっすぐ正面に移動し...ハンドルの付け根で股間を強打する」

ボールペンをつまんでいた人差指と親指はボールペンを離れ、左手首に指の股をぶつけていた。妙なところに芸が細かい。

「じゃあ犯人は、ベンジーの子孫よりもベンジーそのものの命を狙ったってことで、やっぱり殺人未遂じゃん」

「そうとは限らんさ。単に通行人が足を引っ掛けるのを狙ったのかもしれないし、スケートボードでジャンプする練習をして外すのを忘れただけかもしれん」

「でもなんで妙な角度でロープを張ったんだろ」

「そいつがわからん。遊びならばどんな角度でもそれなりに理由があるのだろうけど、もし俺

を狙ったなら角度は自ずと決まる。曲線運動では慣性は接線方向に働くから、角度さえ浅ければ崖にぶつけることは可能だ。しかしなぜ中途半端な位置に。なるほど、でもどうして」

「一人で納得するなっつーの。で、何がなるほどでどうしてなの」

「気にするな。それよりも調査をよろしく」

これだから頭のイイ奴はキライだ。

「今年はインドネシアの政治が安定しているようだ」とオヤジは言っていた。

マンデリンはインドネシア産の珈琲豆の一つで、焦げる寸前まで深煎りしても香ばしさを失わず、すっきりとした苦味を得られる。だからキレの良いブレンドを作るのにはかかせないのだけど、この豆には一つ大きな欠点がある。それはクズ豆が多いこと。

自家焙煎の店でもいい加減なところは生豆を選別もかけずに焙煎するけれど、夫婦揃って珈琲好きのうちの店ではかなり厳しく選別をかける。だから、手伝いの僕にも当然それが求められる。珈琲の生豆は生産国でも出荷前に選別をかけるため、店で選別をしても普通は5%もクズ豆はない。分かりやすく言うと、お盆に生豆を一掴みほど広げた時にざっと見て十粒くらいの不良豆が見つかるくらいの割合だ。これが質のいいコロンビア産のスプレモやエメラルドマウンテンだとざっと見ただけでは見つからず、目を皿のようにして探す必要がある。

ところが今目の前にあるマンデリンはG-1クラスでありながら不良豆の見本市みたいな状況で一々探す必要がない。割れ、欠け、虫食い、傷は当たり前。発酵して黒くなった豆はすぐに見つけることができるけど、成長異常の極小豆は他の豆に隠れて分かりにくい。これらの不良豆が至る所に見つかるのだ。そして時には豆以外にもとうもろこしや石ころやネズミの糞、僕はまだ見つけたことがないけれど時にはちっちゃなカエルの干物なんかが発見できるという、まるでチリモンみたいな状況だ。小学校あたりでブームになって、みんなで選別してくれるようになると大助かりだけど、今のところその気配はない。

こんなに不良豆が多いのだけど、オヤジに言わせると今年は不良豆が少ないのだそうだ。今年はいたい一割ちよい、多くて二割も捨てていないけど、悪い年は三分の一くらいも捨てていたらしい。そしてこれだけクズ豆が少なくなったということは「政治が安定してきて、人の気持ちに余裕ができたから、いい物が出荷できた」のだとオヤジは言いたいらしい。

ちなみにこの話をベンジーにすれば、きっと彼は「それは経済が良くなったからだ」と言うだろう。経済の暴発とでも言うべき荒波を二度もかぶった大里家に育った彼にしてみれば、政治が良くなったからと言って人がより良いものを作ろうと努力するものではなく、経済的な豊かさを得るために努力するものだと考えるのが当然だ。だからこそベンジーのお父さんは経済的豊かを得るために必死で頑張っているのだし、うちで扱っている珈琲豆でも「フェアトレード」という生産者がちゃんと利益を得られる方法で取引された豆は、同じ地域で採れた他の豆よりも確実に美味しい。

ただ、これは僕の漠然としたカンなのだけど、ベンジーは経済的な豊かさを得ることよりも、

今の社会の「経済」とは別の「経済」を作ること、大里家をたたき落とした経済にリベンジしようと思っているんじゃないだろうか。何となくだけど、そう感じる事が時々あるし、そのほうがベンジーにふさわしいと思う。

「きんどーさんはいるかい」

そう言って唐突に店にやって来たのは斗志輝おじさん。今日はお風呂に入ってきたらしく、伸びっぱなしの髪は後ろできっちりと束ねられ、無精髭は口ひげを残してきれいに剃りあげられている。年代物の革のジャケットとサングラスをかけたおじさんは昨日とは別人のようにカッコいい。

「ちょっと待っててください、今呼んできますから」

選別中の豆のお盆を作業台に乗せて、住居になっている二階への階段に向かうと、ちょうどオヤジが降りてきたところだった。

「おお、トシちゃんじゃないか。珍しいなあ。どしたあ」

もうじき昼だというのにヨレヨレのキノコ柄パジャマを着て寝ぐせ頭を逆立てているのが我が父近藤武蔵。ファーストフードのアルバイトを朝四時までやっているのも万年寝不足。土日だけは僕が豆の選別と焙煎をやって、お昼近くまで寝ることができる。

「うちの勉士が事故っちまってな。しかもそれがアイツの命を狙ったって噂がある。しかし噂くらいじゃ警察も真面目には捜査しないだろうから、俺たちで聞きこみに行こうと思うんだが、きんどーさんも付き合ってくれんか」

「行っちゃう行っちゃう。すぐ着替えてくるからちょっと待っててちょ」

普段から落ち着きのないオヤジではあるけど、斗志輝おじさんが来た時のハイテンションはまた別格だ。「エイツエイツ」と奇声を上げ、訳のわからんポーズで太めの尻を振りながら階段を上がる後ろ姿を見ながら、僕はそっとため息をついた。

「どうだい、タケシくんも一緒に行かないかい」

「高志ですったら。行ってもいいんですか」

渡りに船だった。ベンジーから調査を頼まれたものの一人じゃ心細い。かと言って気軽に頼める友達もいない。いや友達がいらないというわけじゃなくって、いるにはいる。携帯の友達ファイルには五十人以上のアドレスが入っている。ただその連中は、何となくただでは頼みにくいのだ。

かつて二年生の半ばまでは友達が多かった。バイト禁止の学校にあって家業で小遣いを稼げる僕は高校内では勝ち組で、気前のいい僕はあちこちのグループから引っ張りだこだったのだ。それがトミタショックで僕の小遣いが激減すると、誘いの数もそれに正比例。「メシ奢るから宿題見せて」という交換条件の友人関係しか築けなかった僕が悪いのか、それとも経済の問題なのか。ベンジーなら何と言うだろう。

事故現場の近くまではうちの車で行った。遊歩道に車は入れないので、造成地の前に路駐し現場に向かう。

「それにしても寂しいところじゃないか、きんどーさん」

「この住宅地はバブルが生んだ未熟児でね。なんにもない丘陵地帯を無理やり造成して高級住宅地を作ろうとしたんだけど、途中でバブルが弾けたもんだから、市道側の三分の一位しか住宅ができてないんだ」

このホワイトヒルズは僕が生まれる直前のバブルの頃に県の肝いりで作られたらしい。市道沿いにはおしゃれな飲食店や高級マンションが並び、その内側に高級一戸建て。暴走族などの騒音から守るためヒルズ内を整然と仕切る広い道路はどれもどん詰まりで、外とのつながりは市道にでる四本の道しかない。一方、ウォーキングや犬の散歩などのセレブな目的のために外周にはぐるりと遊歩道が造られている。

「駅に近い西側は市道の方しか家がないけど、東側は土地が安くなってからアパートや県営団地がいっぱい建ってて、外周の方まで結構賑やかだよ」

いちいち説明しなかったけど、そちら側に住んでいるのは主にブラジル人で、バブルがはじけた後も「元気な名古屋」を牽引したトミタ関連企業を目指して日本に移住してきた人たちがたくさん住んでいる。

「そっちには安くて美味しいブラジル料理があるから後でトシちゃんも食べようぜ」

「おう、トシちゃん感激」

とても四十の半ばを超えた不惑のオッチャンたちの会話とも思えない掛け合いを聞いているうちに、現場のカーブに到着した。

「このカーブで、あれが例の電柱と街路樹です」

という僕の説明は全く無視で、二人は持ってきたズタ袋の中から虫眼鏡やメジャーを取り出した。他に何が入っているかは知らないけれど、今職務質問されたら絶対マズイよな。

「マッドストーンでやってみたいに、ここにピアノ線を張って勉士クンの首をはねようとしたのかね」

「張ってあったのはロープだし、首をはねるなんて物騒なことしてないって」

「きんどーさん。どうやらロープはずいぶんと長いことここに置きっぱなしになっていたようだよ」

虫眼鏡を持った斗志輝おじさんの指差す先を見ると、確かに電柱に巻きつけるようにして何かがおいてあった形でアスファルトの上に土が固まっている。

「これだけ土が固まっているってことは、ずいぶん長いことここに置きっぱなしで最近は使っていないかったってことですよ」

二人は僕の言葉をまったくスルーし、今度はオヤジが斗志輝おじさんを肩車して街路樹を調べ始めた。

「おおい、きんどーさん。ここの街路樹の傷までの高さは百九十六センチもあるぜ」

「ってことはトシちゃん、犯人は勉士クンの身長がチェ・ホンマン並にあると思ってたってことか」

発想の貧困さが遺伝に過ぎないことを思い知り、僕はそっとため息をついた。

「ってことは、きんどーさん。犯人は世界一平均身長の高い国、オランダ人の犯行とみて間違いないな」

「トシちゃん冴えてるう」

「そんなわけないでしょ。犯人はベンジーの首を引っ掛けようとしたんじゃなくて、タイヤを引っ掛けようとしたの。そこの柵を見てください」

僕は二人をロープの跡がついたところまで連れていった。

「なるほど、ここから前のめりに吹っ飛んでいくと確かにあの崖まで飛んでいくな」

「でもおじさん。ここだと少し角度があるでしょう。もう少し先の格子を通せば道に直角になるのに不思議だと思いませんか」

「確かに妙だな。きんどーさんならこの位置にロープを張って何に使う」

「そうだなあ、光ゲンジみたいにローラースケートで滑ってきてジャンプとか」

「ベンジーもスケボーの可能性があるって言ってたけど、それなら失敗してロープに引っ掛かった時にもっと木に傷が入るんじゃないかな。それにいくら人通りが少ないからっていっても、この道は桜ヶ丘から駅への近道になるから朝と夕方は結構自転車とかが通るから、遊んでて忘れたなら絶対誰かが気づいてるって」

昨日は気づかなかったけど、金曜日ならば間違いなく夜遅くまで人が通っている。仕掛けたのは終電後の十二時すぎからベンジーが通る明け方の間。十二月の夜中にわざわざ仕掛けに来たとなると、ただのいたずらはありえない。

「そうなるここにロープを張った奴は、真夜中に遊んでいたことになるな。ってことはきんどーさん。犯人は妖怪一族」

「さすがトシちゃん。もしかしたら勉士クンが配っていたのが恐怖新聞で、それが妖怪たちの恨みを買ったのかもしれないな」

とりあえず説明しておくど、恐怖新聞とは、古い漫画にあった未来の出来事が書いてある代わりに読むと寿命が百日縮むという新聞のこと。これがなぜ妖怪の恨みを買うのかは不明。そもそもそんな新聞を息子が配ると思うか、ふつう。

「よし、じゃあ次は新聞屋に聞き込みだ」

自分の息子が殺されかけたかもしれないというのに、なんて脳天気な。僕は「行くぞ、エイ・エイ・オー」なんてやっている二人をおいて、配達店に向かって歩き出した。

日日新聞ホワイトヒルズ販売店は日日新聞社がホワイトヒルズ開発に協賛した関係もあって開発当初に管理事務所に併設される形で設置された。そのためホワイトヒルズの中でも駅に近い西側の一等地にあり、周辺の家はいちいちデカイ。

「これが勉士クンが乗っていた自転車だな」

「さすがに実用車だけあって頑丈そうだな、ハンドルが曲がっている以外ほとんど壊れてないじゃないか」

原付が並ぶ駐輪場の隅に置かれた二台の自転車はどちらもかなり年季が入っているうえに恐ろしくゴツイ。僕ならば新聞なんか積んでなくても立ちゴケしそうな重量感がある。

「ベンジーはここからホワイトヒルズ全体と向こうの桜ヶ丘の一部が配達区域で、ヒルズの中をぐるりと配達してから桜ヶ丘に回って、外周を回って帰ってくるんです」

説明する僕の話の聞いているのかいないのか、二人は「恐怖新聞じゃなさそうだな」などとヒソヒソ話している。

「あら、近藤くんじゃない。どうしたの」

外の不審者が気になったのか、ガラス戸を開けて中から三輪さんの奥さんが顔を出した。

「ご無沙汰してます。こちらは大里くんのお父さんで、事故のことを知りたいということで案内してきたのですが、よろしかったでしょうか」

販売店の三輪さんの奥さんとは、夏休みにベンジーと一緒に販促活動をしたので顔見知りだ。

「はじめまして。大里勉士の父、斗志輝と申します」

サングラスを取ってあいさつする斗志輝おじさんは、さっきとは打って変わって紳士モードになっている。

「はじめまして。近藤高志の父武蔵です」

こちらもキリリと二枚目モード。この二人の態度からわかるように、三輪さんの奥さんはかなりの美人だ。おかげで二人はふざけることもなく、事故後の様子を聞き出した。

「ところで勉士のあとを引き継いだ方なんですけれども」

斗志輝おじさんがこう切り出すと、今まで穏やかだった空気がグレイに変わった。

「そのことでしたら、彼は関係ないと思います。家族思いのとってもいい子です。今回のことで変な噂が立ってとても大変な思いをしていますので、そっとしておいてください」

そう言われてしまうと、警察官でも何でも無い僕等としてはそれ以上追求のしようがない。僕らはやむを得ず販売店を後にした。でも、噂の広がるのが早すぎない？

ホワイトヒルズの東端は西側とは別世界だった。

ポルトガル語一色のブラジル系のお店が並ぶ市道から一本中に入ると、至る所にアーティスティックな落書き。陽気なラテン系のポップな文字は、そのカラフルな配色にもかかわらず妙にうすら寒い。理由はその落書きに上書きされた日本語の落書き。「ブラジルに帰れ」「ブラジル人死ね」「ブラ逝け」。二次元に変換された悪意は、制作者の人格を伴わず純粋な毒を撒き散らす。

そしてこの街をさらに荒んだ雰囲気になっているのは、至る所に放置された盗難バイクや散らばるごみじゃない。あちこちにたむろしている人間だ。目的もなく、することも無い人間だけが発することのできる粘った空気が、細い糸になって僕らの体に絡み付いてくる。

とはいえそんな空気を感じているのは多分僕だけ。オッサン二人は、屋台で焼かれている鶏の丸焼きしか視界に入っていない。

「凄いぞトシちゃん。あの兄ちゃん一人で丸々一匹食っとるぞ」

「だって一羽でたったの五百円だぞきんどーさん。ありゃほんとにニワトリか」

「もしかしたら雀のマツコ・デラックスかもしれないが、匂いがたまらん。行くぞトシちゃん」

「待ってくれ。今日は金がない」

「ええい。久々の再会じゃないか、今日は俺がもつ。行くぞ」

「サンキュー。金が入ったら次は俺がダチョウをおごるぜ」

二人の眼中に、ゼツタイ僕はいない。

オヤジたちが何羽食べるか言い争っているのを放っておいて、僕は団地の公園に入っていった。ここに来た目的は、ベンジーに代わって配達をしている子の家を探すことと、病院で亡くなった子の家族を探すことだ。所在無げにたむろしている大人たちから聞く勇気はないけれど、公園で遊んでいる子たちからなら何かを聞き出せるかもしれない。

しかし僕が公園に入ると子どもたちはみんな逃げてしまった。子どもたちが抱きついた親たちが僕に送る視線は、ユニクロのジャンパーを貫いて僕の心を凍らせるほど、冷ややかだった。

仕方なく公園を抜けると、今度は誰かが言い争う声。

「○☆%*@！」「●△&\$#¥！」何を言っているのかさっぱりわからないけど、声に聞き覚えがある。ブラジル人のおばさんたちと言い争っている背中は昨日見たばかりだ。

「三上くんじゃないの」

振り返ったのはやっぱり元会長。ボランティアグループと思しき仲間も一緒だ。

「やあ近藤くん」

振り返った瞬間に輝く笑みを見せる千両役者。しかし主役が目を離れた瞬間に脇役のおばさんは消えてしまった。

「ああ、全く困ったもんだよ。可燃ごみの回収は月曜だって言ってるのに、強引に置いて行っちゃうんだから」

「まあでもしっかり網をかけておけば、カラスにやられることもないでしょ」

「君まであのおばさんみたいなことを言うのか。確かにしっかり網をかけておけば、今は大丈夫かもしれない。しかしこのゴミを見たほかのブラジル人がゴミを持ってきて、その時しっかりと網をかける保証がどこにある」

「そしてそのあと、散らばったゴミを集めて袋に詰め直すのはいつも僕らなんだぜ」

ボランティアメンバーの一人が大げさにため息をついた。そしてそのため息をからかうように何処かでカラスが「カァ」と鳴いた。

「ところで、今日は落書き消しなの」

マスクとゴーグルを首から下げて、ゴム手袋にブラシまで持っている。ベンジーならこんな無駄な質問はしないだろう。

「ああ。夏は溶剤がすぐ乾いちゃうから。テストも終わったことだし、入試前に一気に片付けて、綺麗な街にしてから東京に行きたいからね」

すぐにでも作業にかかろうとする三上くんを呼び止めて、僕は必要な情報を手に入れた。

「ただね、いきなり日本人が行っても警戒されるから、ブラジル人の顔役を通した方がいいよ。顔役は外周の近くで中古車屋をやっているサントスって人で」

「サンバの衣装を着た陽気なオッサン？」

「何だ知ってるじゃないか。見た目は怪しいけど、ここらのことは何でも知ってる。日本語はペラペラだし、あてにはできないけど、頼りになる人だよ」

あてにならないけど頼りになる。誰かに当てはまるな、と思ったらうちのオヤジだ。あてにしていると肩透かしを食わされるけど、ほんとうに困ったときには必ず手を差し伸べてくれる。サントスさんも限りなく怪しいけど本当はいい人なのかもしれない。

「おおい、早く来ねえと冷めちゃうぞ」

これも正確には「ほほい、はやふほなひろはめひまふほ」。正確に聞き取れるのは長年の親子関係の賜だ。

「なんでそんなにいっぱい買ったの」

右手にはあらかた骨になった鳥の半身、左手には小さめのバケツくらいのプラカップを抱えていて、中には切り分けられた鶏肉が山のように入っている。

「勉士くんの代わりに配達してる子のことを教えてもらうのと、手土産を兼ねてな」

それでたくさん買ったんだ。ふざけているようだけど、やっぱり大人は頼りになる。

「じゃあわかったんだ」

「ああ、ロベルタ林クニオくんという中学生三年生で、その県営団地におじさん夫婦と一緒に住んでいる」

オヤジは右手に持ったチキンの残骸で、Dと書かれた棟をさした。

「アッ、きんどーさん危ない」

オヤジの右手めがけて黒い影が。カラスだ。振り払おうとしたのが逆効果。左手が留守になってあたり一面に餌をまく形となり、黒い影が次々に舞い降りてきた。

やはりあてにしてはいけない。

「三百二号室ってことはここか。ひどいな」

ひどいとオヤジが言ったのは壁の落書き。マジックで「人殺しは死ね」「ヒトゴロシ」とドアやら壁やらに書きなぐっている。

「ちょっと待ってて」

そう言って僕は三上くんのところへ溶剤と布を借りに行った。誰がこんな噂をばらまいている

のかは知らないけれど、噂だけで実行するにはあまりに卑怯なやり方だ。

僕はベンジーの小学時代を思い出す。学校にいくと誰が書いたのかマジックで巨大なウンチの絵がベンジーの机に描いてある。それは上履きや教科書にも広がった。僕がクラス会で問題にすると、今度は僕のものにも絵が書かれた。ハエの絵だ。そして一言「ハエはウンチにたかってな」。それを知ってからベンジーは僕とさえも口をきかなくなった。僕を嫌ったのではなく、僕を守るために。人を傷つけたいのなら、せめて姿を晒せ。誰がどんな理由でベンジーや僕を嫌い、憎んでいるのか。せめてそれだけでも知りたかった。

しかし今は少し違う。憎しみや嫌悪の理由にあまり興味はない。僕を含めて人はみんな勝手に人を嫌い、憎む。本人にとってどんなに深刻な理由であろうと、他人が共感できるようなものではないのだ。この落書きをした人だって大した理由はないはずだ。書いた人はクニオくんのことを知りもしないだろうし、ベンジーのことだって知らないかもしれない。少なくともベンジーのために書いたなら、生きているベンジーのために「人殺し」とは書けないだろう。

どんな事情で、何のためにこんなことを書いたのかは、知らないし知りたくもない。ただ、この身勝手に無自覚な憎悪が生み出す痛みの大きさを僕は知っている。

だから僕は、ベンジーを傷つけたかもしれない少年のために、猛烈に怒っているのだ。

意味不明の盛大な怒鳴り声と共にハリケーンのような勢いでドアが開き、斗志輝おじさんが向かいのドアまで吹っ飛んだ。チャイムのあたりを拭いていたオヤジは無傷。そして壁を拭いていた僕は、もし斗志輝おじさんがいなければ、Tシャツに貼り付いたど根性ガエルのようにドアに貼り付いていたことだろう。

恐る恐るドアの向こうに顔を出すと、プロレスラーのように巨大なおばさんが腰に手を当てて睨みつけてきた。

「ボア・タールジ。メウノーミエ・タカシ・コンドウ」

僕は慌ててポルトガル語で自己紹介した。このあたりに住んでいれば誰でもポルトガル語であいさつくらいはできる。ただ、あいさつくらいしか僕はできない。

驚いたことに後を引き継いだのはオヤジだった。落書きを消した跡や僕たちを指さして、さっきの三上くんと比べてあまり流暢とは言えないポルトガル語ではあるけれど、身振りを交えて説明してくれたのだ。そしてその後買い足したチキンを差し出すと、おばさんは盛大なキスの嵐をオヤジに浴びせ、エアバッグが破裂したのかと思うような強烈なハグを僕にした。そして倒れている斗志輝おじさんをつまみ上げると、キッチンに連れて行って濡れタオルをあてた。

「すみませんねえ、うちの家内は朝からピリピリしていたもので」

割と流暢な日本語で現れたのは日系を色濃く残した小柄なおじさん。多分この人がこのおばさんの旦那さんなのだろう。僕はチョウチンアンコウの夫婦を思い出す。僕らがチョウチンアンコウと呼んでいる提灯をぶら下げたゴムマリみたいな生き物は全てメスで、メスの二十分の一くらいの大きさのオスはその体に張り付いて生活している。

僕が失礼な連想をしている間に話は着々と進んでいた。そもそも長年日本に住んでいるこの家族はみんなそこそこ日本語が話せるし、クニオくんと二人の弟は日本語の方が達者なのだ。

彼らの話をまとめると、クニオくんが寝ている部屋から外に出るためにはおじさん夫婦が寝ているリビングを通らねばならず、気づかれずに外出することはほぼ不可能だということ、通常誰かが事故や病気で休むときには他の販売区域の人が分割して補うため代わりに誰かを雇うことはないということ、がわかった。特に重要なのは後半だ。雇われる見込みがないのなら、事故を起こす必要は何も無い。

しかし日日新聞の三輪さんの奥さんは、そんなことは言っていなかった。あの社交的な奥さんがこの事実を積極的に話していれば悪い噂はここまで急には広まらなかっただろう。

それともこのおじさんが言っていることが嘘なのか。ベンジーに聞けばすぐわかることだけど、とりあえずここはこの家族を信じよう。この家族は温かいし、なんといっても小さな兄弟たちにチキンを分けてあげているクニオくんを疑うなんて、とてもできない相談なのだ。

「よし、もう帰るか」

「え、もう調べなくてもいいんですか」

「ああ、勉士を殺そうとしたなんて噂は、悪意から生まれた都市伝説だ。クニオくんの目を見ただろ。あの子は絶対に自分の為に人を陥れたりはしない」

「僕もそう思うんですけど」

「ならいいじゃん。きんどーちゃん帰ろうぜ」

「でもおじさん」

僕にはずっと気になっていることがあった。

「なんでおじさんはベンジーが殺されかけたかもしれないっていうのに、そんなに楽しそうにしていられたんですか」

おじさんがベンジーを大切にしていることは知っている。でも、今日の態度を見ているとどうしてもベンジーをダシにしてオヤジと遊ぶのを楽しんでいるとしか思えないのだ。

「まず第一に勉士は生きている。第二に心にも体にも後遺症も残らないようだ。仮に命を狙われているとしても、アイツは賢い子だ、二度目からは自分で何とかできるだろう。それよりも何より嬉しかったのが君だ」

斗志輝おじさんは僕の肩に手をおいた。

「勉士のことを心から心配し、偏屈なアイツのために自ら動いてくれる。そんな友がいることが嬉しくて仕方ないんだよ。そしてきんどーさん」

「なんでい」

「二年ぶりにいきなりやって来たというのに、何も聞かず付き合ってくれた。相変わらずバカなことも付き合ってくれる。ありがとよ」

「何言ってるんでい。俺とトシちゃんの仲じゃないか。ええい今夜は飲むぞ！つてもトシちゃんは酒絶ちだったっけ。よっしゃ、コーラでもウーロン茶でもどくだみ茶でも好きなだけおごったる

から飲むぞ」

「じゃあきんどーさんの珈琲を飲ませてくれ」

「おーけー。俺のスペシャル飲ませたる。おまけに当店自慢の生チョコ付きだ。汗が茶色くなるまで飲ませるから覚悟しな」

そんな二人を見送って、僕はここに残ることにした。ベンジーに頼まれたもう一つの仕事。幽霊退治があるからだ。あのペタンペタンという足音と囁くような声が耳に蘇ってくる。ちょっと寒くなったような気がするの、少し曇ってきたからに決まっている。こんな時は勇気が出る歌を一発。「お化けなんてないさ～お化けなんて嘘さ～」

三上くんが言っていた中古車屋さんはすぐに見つかった。というか派手すぎ。道路に面した事務所の壁にはスプレーガンで描いたサンバカーニバルの絵が一面に広がっている。豪華な飾り車に乗っているのは派手な衣装を着たセクシーな女性たち。そして間に立っている巨人は多分サントスさんだ。サンバのリズムが聞こえそうなほど躍動感のある絵。もしサントスさんが自分で描いたのなら凄過ぎる。中古車を売っている場合じゃない。

そして、売り物の車もサンバグッズでデコレートされている。軽トラに銀とオレンジの羽飾り、おまけにフロントには金色のブラジャー？ってなにか宗教的な意味でもあるのだろうか。しかも値段が車一台六万三千元って何？

まず事務所らしきところに入って見たものの誰もいない。ポルトガル語は読めないけれど「御用の方はボタンを押してください」と書いてあるような気がするボタンを押してみても返事はない。とりあえず自爆スイッチのおそれはないようなので連打してみると、裏でピンポン鳴っているような音がある。少なくとも、壊れているわけではないらしい。

一旦表に出て裏に回ってみると、倉庫のような建物があり、微かに人の気配もある。ノックしようか声をかけようか悩んでいると、いきなりドアが開いて巨大な人影が現れた。

「サントスさんですか」

昨日と違って普通のメガネに作業着（ただしショッキングピンク）姿なのだけど、爆破コントの後みたいなモジャモジャ頭とシャカシャカうるさいヘッドホンは昨日と同じだ。

「ポッソ アジュダーロ」

ヘッドフォンを外し、頭からまるかじりされそうなくらいの笑顔でいきなりハグだ。本日二回目のエアバッグ。ちなみに、このくらいポルトガル語ならわかる。いらっしやいませ、だ。でも高校生が車を買いに来るとするか普通。確かに、友達と歩いていても僕だけが選挙カーから握手を求められるおっさん顔ではありますが。

「三河高校の三上から聞いてきました。近藤といいます」

なんで外国人相手だと日本語までおかしくなるんだろう。

「おお、ミカミくんのアミーゴ。今日はなんですか。お買い物ですか。トラブルですか」

「お買い物ってふつう」

高校生は車買いませんよね、と続けようとした言葉が巨人の耳に届く前に僕は倉庫に連れ

込まれた。

「なんでもあるよ。CDプレーヤにDVDプレーヤ。アイポッドもいろいろあるよ」

確かになんでもある。さすがに中古車屋さんだけあって一番多いのはカーナビやカーステレオのたぐい。中古品なら一個三百円からある。しかし家電品も結構あってアイポッドなんか山積みで一個三千円。

「その横の薄汚れたアイポッドはなんで八千円もするんですか」

「それは本物の中古」

なるほど。

「ところでここに来たのは買い物じゃなくて、大名寺病院で亡くなった女の子のことなんですけど」

営業スマイルが一転、買い付け人の目付きが変わった。まるで値踏みをするかのように、サントスさんは上から下まで僕をスキャンした。

「オーケー。それなら事務所で聞きましょう。ここは寒い」

それには僕も激しく同意。確かに倉庫自体も寒いんだけど、それ以上に寒々しいのが隅で解体中のパーツ類だ。事故車から取り外したことがありありと分かる凹んだ無線機に折れたアンテナ等々。血痕でも付いていそうな機械類が無造作に並べられている姿は、昨日から「幽霊います派」に宗旨替えした僕にとっては寒すぎる光景なのだ。

「さあここデス」と案内されたのは怪しいピンクの小部屋。

まず最初に戻った事務所はストーブが灯油切れで、「特別室に案内しましょう」と事務所の引き出しから鍵を取り出して、連れてこられたのがこの部屋だ。怪しいピンクの作業着を着た巨人と二人きり。壁はピンク。奥には巨大なベッド。どうする。

「何なんですかこの部屋は」

入口近くにあるポットでインスタントコーヒーを入れる巨人。後ろをすり抜けるには妖怪一反木綿のスリムさが必要だ。

「オ・クアルト・デ・ナモラードス。恋人たちの部屋さ」

言いながら、胸に下げたアイポッドもどきをペンスタンドのような白い装置に挿すと、奥のスピーカーからサンバのリズムが流れてきた。よかった。ムード音楽じゃない。

「どうだい、いいだろう。これがあるとキャンプなんかでモテモテ。スタンド型のアダプターとスピーカーのセットで三千円」

よかった、商売の話か。と思ったらベッドに腰掛させようとするじゃないかエロオヤジ。固辞して立ったままコーヒーを受け取ると、自分はポットのそばの椅子に腰掛けた。そっちの方が出入口に近いじゃないか。

「なな、なんで自動車屋さんに恋人たちの部屋なんかあるんですか」

「ブラジルは情熱の国さアミーゴ。私たちは愛の時間をとても大事にする。でも、トミタショックがそれを邪魔しました。トミタで寮を追い出された人がたくさんここに来ました。だから、みんなと一緒に住みます。愛の時間が難しくなります」

クニオくんの部屋を思い出す。二LDKの間取りでおじさん夫婦を含めて七人。確かに愛の時間は難しそうだ。だけど、それとこれとは話が別。僕には今、心に決めた人がいるんです。それ以前に男に興味ないし、巨人だとアレルギー反応が起きるおそれがあります。

「だから、ここは恋人たちの部屋になりました。さあもう時間がありません」

いや、もういいです。帰りたいんです。さあ勇気を出して言うぞ。

「あと、十五分で予約のナモロードスが来ます。話を早く済ませましょう」

急に地球の重力が増えた。僕は十Gの力に押され、ベットに座り込んだ。

「それで、貞操は守られたわけだ」

これも「ほれへ、へいほうは...以下略」。今は日曜の朝。またしてもベンジーの弁当配達で、当のベンジーは食事中。食事のオカズとして、昨日のハイライトシーンから話していたところ。

「ああ、真田幸村のパンツのご加護があつたらしい」

大軍の徳川勢を寡兵ではねのけた真田幸村を、巨人のサントスさんをはねのけたお守りになぞらえた高度なジョークなんだけど、理解できるかねベンジー君。

「タカシのパンツなんかどうでもいい。結局そこはブラジル人用のラブホテルみたいなものだったんだな」

どうでもいいんだ。

「そ、一時間千円だって。アミーゴにしか貸さないらしいけど、ミカミのアミーゴなんで僕も電話すれば空いてる時間教えてくれるって。ただし、土日は一ヶ月先まで予約でいっぱいな上に夜は九時までだって」

「空いてたって相手がいらないんだろ。それより、なんで夜はやってないんだ」

「九時からサントスさんと奥さんが使う時間なんだって。で、奥さんを送ってから病院に来るもんだから、いつも十一時過ぎにやってくるんだって」

「夜中にあそこに人がいれば、外周のロープのことを知っている可能性があるんだが」

「土日は自分たちがそこに泊まるらしいけど、他の日は自分たちの後は誰にも使わせないで閉めちゃうんだって。お泊りでも使えるようにするとそこをねぐらにする人も現れるかもしれないから、って言ってたな。でもロープのことは知ってたよ。夏ごろ中学生がバトミントンをやっていたって」

「ロープの種類は」

「そこらで売ってる細いのじゃなくて、あのあたりの放ったらかちにされた建築現場に落ちてる真っ黒でごつい奴。自転車どころか車が引っかかっても切れないみたいだけど、一旦結ぶと解くのが大変みたいで、大きめの輪っかで電柱に結びつけておいて、足場にひっかけて使って、使わないときは電柱に巻きつけていたらしいよ」

「街路樹の方はどうやって結んだんだ」

「それがおもしろくて、あの高さじゃ手がとどくのが精一杯じゃない。だから、ロープの先に錘をつけておいて、一人がつま先立ちでロープを抑えて、もう一人がその錘を何回も投げてロープに巻きつけるんだって、そうすると錘の重さでロープが締まって落ちてこないんだって」

「ああ、それでか」

「なにが」

「それであの半端な角度になったんだ。要はロープの長さが足りなかったってことさ」

「なるほど、ホントは直角に張りたかったんだけど、街路樹に届かなくなっちゃうんだ」

ロープを絡ませて錘の重さで固定するとすると、余分なロープの長さは二メートルがいいところだろう。

「でもなんでベンジーを引っ掛けようとしたのかなあ。普通はベンジーが怪我しても他の販売区域の人がカバーするんでしょ。なんでクニオくんにすぐ決まったの」

僕は昨日クニオくんのところに行った話をした。ん、何か見落とした気がする。

「それは俺が販売店についたときに三輪さんに前にやっていた人に引き継いでもらえるよう頼んだからさ。足が折れてるのはわかったから、リハビリも含めれば二ヶ月は配れない。完治する頃には高校も自由登校になってるから、別のバイトも見つかるだろうと思ってな」

「じゃあなんで三輪のお婆さんは、僕たちにその話をしなかったんだらう。ベンジーが頼んだってことがわかれば、変な噂なんか立たないのに」

「俺が頼んだのは三輪さんの方で奥さんはいなかったし、それに」

「それに？」

「それはそうと、亡くなった子の家族はどうだったんだ」

肝心なところは答えない。君はアニメの名探偵か。

「オリベイラ・ジュリちゃんだったよね。残念ながらご両親には会えなかった。あの子の治療費のために掛け持ちで休みなくずっと働いてるみたいだから。兄弟には会えたけど、とても悲しんでいて、たいした話はできなかったよ」

「それはいいさ。知りたいのはどんな遊びをしていたかってことさ」

「それは聞いてないけど、ボールがあったんでサッカーはしてると思う。それから部屋には漫画の本が沢山あったし、コナンくんのシャツ着てたんで好きかって聞いたら毎週見てるって言ってたから漫画好きなんじゃないかな」

「なるほどね」

ほらまた一人で納得する。

「そういや、この幽霊騒ぎって警察沙汰になってるのかな。刑事さんが聞き込みに来たって言ってたよ。コナンくんの目暮十三警部みたいにヒゲを生やしてるのに、こち亀の中川巡查みたいに超カッコいい人だったんだって」

「メグレも中川も知らんが、刑事が来たというならそうなんだろ」

やっぱ知らなかった。これで一本取り返した。

「あ、そうそう。今朝ベンジーのそこ行ったらさ、お父さん大変なことになってたよ」

「何があったんだ」

「激やせ。一晩で三キロは減ってたね。ヒントは昨日うちのオヤジと出かけたこと。豆の焙煎しなきゃならないんで帰るから、お昼までに考えておいてね」

たまには王子様の頭を悩ませなきゃね。

「どうせおにぎり以外のものを食ったんだろ」

「正解。詳細はまた後で」

これだから頭のイイ奴は、以下略。

パチパチと断続的に豆がはじける音がする。今焙煎しているのはブラジル産のサントス No. 2・モジアナだ。ブラジルの豆に No. 1 は神の領域として存在せず、No. 2 が最高グレードになる。サントスはサンバを踊る巨人の名前じゃなくて出荷する港の名前で、モジアナは農園のある地区名になる。

このモジアナの豆は軽やかな味わいと余韻のある香ばしさがその持ち味だけど、下手に焙煎するとすぐに香りに苦味が混じる。これを避けるためには今のパチパチという一ハゼでの温度上昇を緩やかにしてゆっくりと通過させ、ピチピチと高い音のする二ハゼが始まったらすぐに焙煎釜から取り出して冷却しなければならない。十五分強の焙煎の中で今が最も大切な時間だ。

パチパチという音の間隔が段々大きくなり、もうすぐ一ハゼが終了する。時間が数倍に感じられる緊張の時間。頭が冴えてくる。今朝のベンジーの話で気になったところ。そう、怪我したという結果から考えたからクニオくんに動機が無くなったんだ。これがもし殺意なら。ベンジーが死んでしまっていたら、かなり高い確率でもともと配っていたクニオくんに依頼が来る可能性がある。しかし、そのために人を殺そうと思えるか。でも、家族のためなら

。

げっ、焦げ臭い。教訓、焙煎終了間際には考え事をしてはならない。

「ちゃんと目玉は開いてる？」

朝八時半、無理やり開いた目玉が左右非対照になっているのは我が父近藤武蔵。朝の四時にバイトを終えたのだから四時間ほどしか寝てない計算になる。

「モーニングの準備は終わってるから、まず顔を洗ってきたら。左目が四重まぶたになるよ」

「ういむっしゅ。もうまみちゃんは行っちゃったのか」

まみちゃんとは母・正美のこと。昨日は一人に店を押し付けて出て行ってしまったので、今日の午後はオヤジ一人で店番。午前中は僕が手伝うことになっているらしい。もっとも主婦の集まりがメインになってから、忙しいのは平日ばかり。土日の集客が今後の課題だ。

「うん、朝一緒におにぎりするって張り切って出かけたよ」

「これで茉莉亜^{まりあ}さんもスランプから抜け出せるな」

茉莉亜さんというのはベンジーの母親。斗志輝と茉莉亜なんてヤンキーカップルみたいな組み合わせだけど、別にふたりとも元ヤンというわけじゃない。だいいち茉莉亜さんというのはペンネームで本名は秘密なんだって。聞いたことないかな「茉莉亜の部屋」ってオークションサイトを。

ベンジーがお腹にいる間に、ナイアガラの滝をダイブする勢いで貧乏に突き落とされた茉莉亜さんは出産後、家計の足しにと蔵が建つほど買い集めていたブランド品をオークションで売り始めた。ところが普通に売ると、どんなに程度がいいものでも半値程度。使い込んだものはタダ同然の値段しかつかなかったそうだ。そこで茉莉亜さんが開いたのが「茉莉亜の部屋」だ。ここで売っている商品には、一つ一つに世界に一つだけのストーリーが付いてくる。それは時に詩だったり、エッセイだったり、短編小説だったりするけれど、どれも皆幸せな言葉と愛に満ちているらしい。

最初のうちは、そこでの商品も大手オークションサイトと同じくらいの値しかつかなかったそうだ。しかし、あるお客さんからのレビューで「このストーリーを読んでから幸せが次々と舞い込むようになった」という評価を得てから一転した。閑古鳥が鳴いていた宝くじ売り場が一等が出ると一変するように、同じようなレビューが次々と舞い込みはじめ、幸せを呼ぶ不思議なサイトとして雑誌等にも紹介されるようになったのだ。そしてその結果、茉莉亜の部屋の商品は驚くほどの高値がつくようになったそうだ。

しかし、いいことばかりは起こらない。人の幸せを願いつつ、必要最低限の明かりしか灯さないような生活に耐えるのは、僕らの想像を遥かに超えて精神に負担をかけるものらしい。その結果、時々茉莉亜さんは暴走する。斗志輝おじさんの運転資金に手をつけて高額商品を買ってあさったり、家中のものをひっくり返したり、時には自らの手首を切ったこともあったらしい。そうやって一通り暴走した後は激しく落ち込んで部屋にひきこもり、誰とも口を

きかなくなる。

そしてそんな時に頼りになるのが我が母「まみちゃん」だ。茉莉亜さんと古い付き合いになる母は、なぜか復活可能なタイミングが分かっている、その時が来ると一緒におにぎりをしに行くんだ。そして母と一緒ににおにぎりすると、茉莉亜さんは元気に復活し、再び創作活動に戻っていく。

今回はベンジーの事故と茉莉亜さんのひきこもりが重なったために、斗志輝おじさんはベンジーの病室にオクサレ様のような状態でやってくるようになったわけで、復活がわかったからこそ昨日はオヤジとはしゃぎまくっていたというわけ。

もつべきものは友、とありきたりの言葉で締めくくってみたりする。

「オヤジいつの間にあんなにポルトガル語がしゃべれるようになったわけ」

昨日クニオくんのところでオヤジが示した意外な能力を思い出す。

モーニングタイムが終わり、これからしばらくは真空のランチタイムが始まる時間だ。

安さで勝負は無理だけど「ひだまり」ならではの手作りランチを作れば、多少よそより高くてもお客さんと呼べるだろうと、目下様々なメニュー開発中。しかし今のところ、この店ならではの決め手に欠けている。しばらくランチタイムのお客さんは見込めそうにない。

「俺は生まれつきポルトガル語どころか十二ヶ国語がペラペラよ」

とまあいつもの調子で話し始めたところによると、夜中のバイトで清掃の時にいつも組んでいる相手がブラジル人だということ。

「ところがなあ、そのオリベイロさんという人は日本に三年も住んでいるのに日本語がほとんどダメでな、工場勤めの時にはそれでも良かったみたいだけど、トミタショックで工場を追い出されると、どこも日本語が喋れないと雇ってくれないらしくてな」

話がたらたらと長いので要約しよう。要するに日本語が喋れないので夜中の清掃くらいしか雇ってもらえない。だからオヤジに日本語を習おうと積極的に話しかけてきて、逆にオヤジもポルトガル語を覚えてしまったというわけらしい。

「だが高志、おかしいと思わないか。日本語さえ喋れば職はあるというんだぜ。なのになんであんなに派遣村みたいなところに大勢日本人がいるんだ」

「それは、そんな職場は賃金が安くてきついからじゃないの」

「安い賃金でキツイ思いをして働くくらいなら、派遣村に行くってか。このままじゃ俺がヨイヨイになったときに、世話してくれるのは外人さんばかりってことになりかねんな。全く政治家は何やってんだか」

政治がやるべきことは、介護なんかの賃金を高くすることなのか、それとも安い賃金でも働いてくれる外国人の教育に力をいれるべきなのか、それとも安い賃金でも文句を言わず働

くように僕らを教育することなんだろうか。ベンジーならなんと言うだろう。

とりあえずオヤジの愚痴は放っておいて、まず朝失敗した豆の焙煎のやり直し。早くベンジーのところに行きたいので、モーニングタイム中に予熱は済ませている。早速豆を投入。この豆は水分が多いので、まず百五十度あたりでじっくりと乾燥させる。これを怠ると表面は色よく焼けているのに芯が焼けていないという素人臭い仕上がりになる。

そして昇温。百九十度まで一気に上げる。これがマンデリンならば一気に二百度まで上げるところなんだけど、ブラジルサントスはここからが微妙な操作になる。じっくり温度を上げ、芯までしっかり火を通さなければならない。

店では親父の趣味のBGM、ビートルズがミステリーツアーに行こうと誘っている。僕も一刻も早く、ベンジーのところでミステリーの謎解きやりたい。あわよくば薫さんにも会いたい。一ハゼが終わる。火力を上げる前に、排気口を開けると、かすかにポール・マッカトニーの音が聞こえる。天井を這う排気管が店内の音を拾っているのだ。何か僕が記憶に引っかかる。ミステリーツアーが僕を遠くに連れ出そうとしている。まだ何かつかめない。ミステリーバスが僕を置いて走り去る。

また焙煎に失敗した。

結局三度目の焙煎は夜にすることにして、大名寺病院に来た。

ベンジーのいる三階は素通りし、まずは四階に。今は面会時間内なのでナースステーションを通らなくてもいい。一昨日の事件現場、薫さんと足音を聞いた場所に立ってみる。天井に換気扇らしきものはない。仮説その一、崩壊。

窓を見る。立ち位置はちょうど窓と窓の境目にあたり、左右に開く形で窓をあけることができる。ただ、この冬のさなかに窓を全開にする人はいないだろう。窓に近づいてサッシをチェック。内側は先日チェック済みなので外側を上から覗き込む。仮説その二、ビンゴ。サッシの外側にコードがある。コードの先をたどっていくと、隣り合った窓の一番離れた両側に何か小さな黒い物体が見える。

ロックを解いて窓を開けると、そこには親指の先ほどの大きさの黒いイヤフォンのようなものがサッシに張り付いている。窓から身を乗り出して見ると、黒いコードが二つの窓枠の真ん中まで伸び、小さな白いケースにつながっている。多分あれが受信機だ。幽霊の正体発見。下手に触ると証拠が消えるかもしれないので写メに撮ろうと胸ポケットに手を伸ばした時、突然大きな声が聞こえた。

「動かないで」

振り返ると、僕は数人の看護婦さんに囲まれていた。

「なんだ、今頃気がついたのか」

僕を捕まえに来た看護婦さんたちの追求は厳しかった。幽霊騒ぎは患者さんたちを通して病院の外にまで噂が広がっていたからだ。手術ミスの噂は、たとえそれが根も葉もないデマであったとしても病院の信用に傷がつく。だから薫さんが駆けつけてこなかったら、きっと僕は警察に突き出されていたことだろう。それを「今頃気がついたのか」とはひどすぎる。しかも「なんだ」とはなんだ。

「今頃って、ベンジーはいつ気がついたのさ」

ビートルズのマジカルミステリーツアーは曲の中で車が左右に走り抜ける効果音を使っている。その音の動きと排気管を通る音で僕は、スピーカーが換気ダクトの中か窓枠にステレオになるように仕掛けられていると思ったのだ。

「タカシのおぼけ話を聞いてすぐさ。患者のイタズラでもない、廊下にも仕掛けられていない。そうすると外しかない。しかも音が動いていたということは音源は少なくとも二つというところまでは誰にだってわかる。現に薫さんだってわかっていたじゃないか」

そう、薫さんもすでに気がついていて、だから普段日中はオフになっている窓のセキュリティがオンになっていたのだ。そしてそんなことも知らず脳天気窓を開けた僕が罠にかかったというわけ。

「でも確かに、ミウ・クラシオは子どもの口があるあたりから聞こえたし、足音は僕たちの間をすり抜けていったんだけどな」

「耳は二つしかないからな。横の動きには強いが縦には弱い。よほどでかい音なら頭蓋骨の振動で上下方向もわかるし反響音も使える。でもささやくような音じゃ大体どっちに向かって動いているかくらいしかわかりやしない」

「でも確かに聞こえたんだよ」

「タカシはテレビ見るだろ」

いきなり何だ。わけも分からず頷いた。

「テレビの出演者の声はどこから聞こえる。安物のテレビのスピーカーなんかテレビの横についていることが多いし、仮にステレオになっていても、スピーカーの高さとしゃべってる奴の口の高さは違うだろ。それでも俺達はしゃべっている奴の口元から音を聞いている。人間は耳で聞くんじゃなくて、脳で聞くんだ。ささやき声の位置も足音の位置も、少ない情報を脳が補って完成させたというわけさ」

なるほど。これで長年の謎が解けた。名探偵コナンくんではいつも、コナンくんの正体がバレないように変声機を使って他人がしゃべっているように見せかけている。しかし普通に考えると、しゃべっているはずの人の位置と変声機のスピーカーの位置が異なる以上、近くにいる人には別のところから声が聞こえてくるのがバレバレじゃないかと思っていたのだ。ある人の声が聞こえてくれば、多少音源の位置がずれていたとしても、その人の口から聞こえてくるように脳が修

正するというわけだ。

「ところで、なんで亡くなった子の家族のことを調べさせたのさ」

「仕掛けた奴の狙いがわからなかったからに決まってるだろ。なんでわざわざミウ・クラシオなんてポルトガル語を使う。親たちはともかく日本で生まれ育った子たちは日本のアニメや番組を見て育ってきたのだから私の心臓くらい言えるはずさ。まあ。家庭によってはポルトガル語オンリーなところもあるかもしれないが、それはタカシが確かめてきてくれた。となると、それをわざわざポルトガル語にしたということは、犯人の家庭環境がポルトガル語オンリーで、なおかつあの家族が日本語を使えることを知らなかったのか、それともポルトガル語にすることに意味があるかに絞られる」

「それで、なんでポルトガル語を使ったの」

「その前に、装置の写真を見せてくれ」

僕は開放されたあとに撮った写真呼び出して、ベンジーに携帯を渡した。写真はスピーカー部分が窓枠に張り付けられたイヤホンのアップとコードと受信機、そしておもいきり手を伸ばして全景を収めている。イヤホンや受信機は大きさがわかるように僕の指と一緒に写した。

「なるほどね、スピーカーを窓枠に貼り付けることで窓全体をスピーカーにしたわけか。コードの延長は子どもでもできるようなもんだけど、受信機がこんなに小さいのは意外だな。何時間くらいもつんだ」

「全然小さくないよ。今なら耳に入るサイズだってある時代なんだから。これだけの大きさがあれば待機時間は少なくとも二百時間。一日十分しか鳴らさないのなら一週間以上はもつんじゃないかな」

「ということは、まだまだ生きてるというわけだ。あと送信機の大きさはどんなもんだ」

「送信機の大きさは...あああのサントスさんが持っていた奴じゃないかな。ペン立てくらいの大きさの。あれがブルートゥースのサーバーだったんだ」

「タカシに売りつけようとした奴か。でもブルートゥースってキーボードやマウスを繋ぐ奴だろ。到達距離は五メートルもないんじゃないか」

「マウスを繋ぐのはレベル3で規格で到達距離は一メートルくらいのもんだけど、レベル1なら百メートルくらいはいけるはず」

「混信はどうだ。近くにごつい通信機があった場合ハウリングなんかは起こさないか」

「周波数ホッピングしながら同期するから一度ペアリングしてしまえば、他のブルートゥースや無線機とかぶっても基本的には混信しないよ。仮に混信しても音切れやプツプツ音が出るくらいでハウリングは起こさなかったと思う」

ペアリングというのは車のキーレスエントリーを認識させる作業のようなもので、これを行うと自分のキーで他の車のキーが開かないように、他のブルートゥース機器があってもそちらの電波を拾うことがない。

「相変わらずテストに出ないことには詳しいな。このイヤホンのアップでまともに写っている奴はないのか」

「多分六枚目か七枚目か、一応ちゃんと撮れたの確認してから来たから、送ってみて」

「なるほどね」

「写ってるでしょ」

「ああ、左右の表記がポルトガル語だな。大須あたりでも売っているだろうけど、サンバのオッサンのところで買った可能性もあるな」

「と、いうことは」

サントスさんもこの件に絡んでいるということだろうか。

「それはそうと、そのサンバのおっさんはなんで医療過誤だと思ったんだ」

全く、肝心なところに来るとすぐに話を逸らす。

「それは」

ピンクの部屋の記憶が蘇る。

「日本の医者はポッタクリです」

ピンクの巨人は僕の質問を聞くなりシャウトした。しかもなぜか「ポッタクリ」の発音は妙にいい。

「そんなことはないでしょう」

「いいえポッタクリのお店と一緒に。可愛い子いるよて甘いこと言って、ビールちょっと飲んだだけで八万円。救急車で運ばれて、助けるために手術しますかと言われてOKしたら失敗したのに三百万円。ポッタクリにもほどがあります」

これには僕も驚いた。これではうかつに救急車に乗れない。

「でも、保険に入っていれば三割しか払わなくていいんじゃないですか」

「日本の会社、なかなか保険に入れてくれません。それでコクミンケンコウ保険に入るとコクミン年金にも入らされます。コクミン年金は二十五年も払わないと一円にもなりません。これもポッタクリです。もし途中でブラジルに帰ることになったらドロボウされたのと一緒です」

このへんの事情になると僕にはお手上げだ。我が家も国民健康保険だけれど、年金がどうなっているのかとか、いくら払っているのかなんてことはさっぱりわからない。

「それはそうなのですが、どうして医療過誤だと思ったんですか」

「衣装カゴ？私の衣装はちゃんとクローゼットにしまってます」

「衣装カゴじゃなくて医療過誤。だからどうして手術は失敗だったと思ったんですか」

「ジュリちゃんが死んでしまったから」

「そんなこと言ったって、もともと心臓が悪かった子が救急車で運ばれたくらいなんだから、病院に来た時点でかなり危険な状態だったんじゃないですか」

「助からないなら手術しなければいい。オリベイラさんはジュリちゃんが生きるために頑張ってお金を貯めた。それを、どうして殺されたのに払わなければいけない」

「気持ちはわかるんだけど、でも、どうして殺されたと思うんですか」

「手術の時間が短い。心臓なら五時間はかかるね。二時間は短すぎる」

「それはお医者さんが言ったんですか」

心臓手術の時間が長いか短いかなんて素人に分かるものじゃないだろう。

「院長に聞いたら、難しいこと言ってごまかそうとした」

微妙に話がずれている。そのことを指摘しようとした時、ピンポンとチャイムが鳴った。今まで激しい口調だった巨人は、厳かな声でこう宣言した。

「ナモラードスの愛の時間を邪魔してはいけない」

「要するに医療過誤の根拠はないんだ」

僕の長い話を王子様は一言で片付けた。

「まあ、言ってしまえばそうなるな。一応その後も少し粘ったんだけど、殺されたんじゃないや幽霊が出るはずがないなんて言い出すし」

「その幽霊に奴が絡んでるかもしれないわけだ」

「これってもしかして、医療費踏み倒すための狂言なの」

「そうかもしれんが、そうじゃないかもしれん。それより院長がなんて言ったのかももう少しわからないか」

「サントスさんの話じゃ、手術にミスはないの一点張りで、高額な医療だからとりあえず金を払えとしつこいらしいよ」

「そのへんに関しては一方の意見だけじゃなんともいえないな。だいたい話の筋は読めたけど、薫さんに頼んで院長先生に会わせてもらって話を聞いてきてくれ」

「いいけど、婦長さんとかの方が良くないかな」

「いや、彼女は特別だから大丈夫だ」

確かに薫さんは特別だ。他の看護婦さんはみんな白衣なのにピンクだし、回診には参加していない。いつ見ても子どもたちの話を聞いているから、病気の子どもたちの精神面をケアする特別な資格を持っているのだろう。

いや待てよ。もしかしたらベンジーと薫さんが特別な関係なんじゃないだろうな。看護婦さんと患者なんてベタ過ぎるけど、ありえない話じゃない。夜中にこっそり密会なんかしてるんじゃないだろうな。「勉士さん」「薫さん」なんて呼びあっていたりして。ウォー！許せんぞ、このむつつりスケベ！

暴走しまくる僕の妄想は、爽やかな闖入者によってシャットアウトされた。

「上は結構大変なことになってきたな」

四階にいるおじさんのお見舞いついでにやってきたという三上くんは、大げさに肩をすくめた。僕が同じことをしたら「肩がこってんのか」としか言われなような動作も、三上くんがすれば実にスマートに見えるところが悔しい。

「何があったの」

「上にはブラジル人の患者さんが四人いるんだけど、そのうちの一人が幽霊騒ぎは医療ミスのせいだって言い出したもんだから、それにカチンと来た日本人が大里くんのことを持ち出してブラジル人は人を怪我させてまで仕事が欲しいんか、って言って喧嘩になってね」

結局四階の男性病棟ではその四人のブラジル人を四人部屋一つに集めることで騒ぎを収めたらしい。

「ていのいい^{かくり}隔離政策って奴だな」

珍しくベンジーが自分から喋り始めた。

「隔離ってという言葉は悪いけど、騒ぎを沈静化するには有効だろう。ついこの間だって、タイで起きた暴動には戒厳令が敷かれたじゃないか。無理矢理にでも頭を冷やす時間を作るのも、俺はいいやり方だと思うけどね」

「四階が力の政府なら、三階は対話の政府だな。子どもたちの話にじっくりと耳をかたむけることで、不安を取り除き平和を保っている」

「子どもはそれでもいいかもしれないけど、大人はがんこだからな。幽霊話にしても信じていない人がトリックだの気が弱いせいだのと言っても、信じている連中は耳を貸さない。何か証拠でもあれば納得するんだらうけど」

「それなら」

さっき証拠が見つかったよ、という僕の言葉はベンジーの一睨みで霧散した。

「幽霊騒ぎなら、明日の夜で終りになる」

明日の夕食はカレーだ、というのと同じくらいにサラリと宣言したのは我らが王子。

「それは大里くんが終わらせるということなのかい」

「別にそうとは限らない」

「でもどうやって」

「さあな」

「俺もその現場に立ち会えないかな。今、日本人とブラジル人の対立が一触即発状態じゃないか。少しでも早く結果を知って、この街の平和のために役立てたいんだけど」

「夜中だぜ」

「多少遅れるかもしれないけど、その時間なら抜け出せると思うな」

「抜け出せる、っていつてもその後どうやってここまで来るの」

三上くんちがどこだか知らないけれど、冬の夜中に動くのは大変だ。抜け出すってことは親に内緒で来るわけで、僕みたいにオヤジに送ってもらうというわけにはいかない。

「どうやっても何も、俺んちはすぐそこさ」

病室の入口の方を指さした。

「日日新聞の向かいだ」

「ああ、大里くんは知ってるよね。うちも日日新聞とっているから。それじゃ、明日の夜にまた来るよ。これで騒ぎが収まるといいね」

そう言って、ミントの風を残して帰っていった。

「ねえベンジー。いつの間に解決しちゃったわけ」

「別にまだ解決したわけじゃないさ。明日の夜、って言ったろ」

「でももうわかってるんでしょ。誰が何のためにやったのか」

「論理的には解決済みさ。しかし物理的な証拠がない」

ドラマや小説でもそうだけど、なんで探偵役は証拠がないと説明してくれないんだろう。

「そこでタカシに、証拠集めを頼みたいんだが」

王子様の口から「頼みたい」なんて謙虚なセリフ。続く言葉がいいことのはずはない。

「タカシのお年玉って、どのくらい残ってる」

庶民が同じセリフを口にすればそれは質問だけれども、王子様の御口から発せられたそれは指令となる。

「何を買ってくればいいの」

庶民に逆らう術はなし。

ここは大須。といっても中部地方以外の人にはわからないだろうから補足すると、かつては名古屋の秋葉原と呼ばれた街。アメ横ビルを始めとして大小の電気店が軒を連ね、その隙間を縫ってオタク系の店があらゆるジャンルの需要を満たし、さらには演芸場から古着屋までと老若男女をターゲットとした店まであり、さらに各国の料理店から雑貨屋さんまでと外国人さえ惹きつける。かつて名古屋の秋葉原と呼ばれた街は「無い物はない」とまで言われるカオスの街に変貌している。

そんな何でもありの街にやって来たのは、ベンジーの依頼の品を探すため。ウエストポーチを巻いてショルダーバッグを肩にかけたオタク青年とキャリアバッグを引いた腐女子がすれ違うその横に、孫の手を引くジイちゃんがいる混沌の街で、口にするのもためらうような怪しい商品を求めて探し歩く僕。依頼主がベンジーでなければ、たとえオヤジからの依頼であろうとも、十分と経たないうちに投げ出してしまったことだろう。

そんな街を一時間以上さまよって得た結論はただ一つ「所望の品は、僕の予算では買え

ない」こと。歩き疲れただけでなく、すっかり心が折れてしまった僕は、メイドマッサージの看板をもつ猫耳娘に心惹かれつつも大須の街をあとにした。

「やっぱり無理だったか」

本日三度目のベンジーの病室。ベンジーはすでにおにぎりを食べた後なので発音の解説は不要。ちなみに僕は、大須名物百円お好み焼きが昼食だった。

「最近、あの手の商品は小型高性能化が進んでるけど、マニアが相手なだけに値崩れしてないんだよね。やっぱあの定額給付金を貯金しておけばよかったな」

定額給付金といえばキーマンショックの直後にヒョットコ首相が打ち出したバラマキ政策のこと。大人一万二千円子ども一人二万円の臨時収入で景気を変えられると思うなんて、庶民の暮らしを知らない人の発想は本当に浮世離れしている。

「あれを貯金なんかしてたら縁を切るって言ったろ」

「そういえばそんな話をしてたっけね。オヤジも同じようなこと言ってたな。国から預かった金を懐にしまい込んでどうするって」

「さすがきんどーさんだな。馬鹿な経済評論家にはダメされない」

そのきんどーさんは、トミタショック以来行けなくなった飲み屋さんに、週一で通って一ヶ月がかりで使い切った。そして僕もオヤジに言われて、普段なら絶対買わないような戦国フィギアを買った。こんな使い方をする人を「さすが」と言っているんだろうか。

「でも経済学者も言ってたよ。どうせなんの景気効果もない無駄遣いで国の借金が増えるだけだから、しっかり貯金して自己防衛するのが正しいとか」

「そんな奴は経済学者じゃない、家計学者だ。二兆円規模の経済を家計と同じ基準で考えていいなら学者はいらない。確かに家族に六万とか七万とか入ったとしても、使いきろうが貯金しようが生活はたいして変わらない。でもそれを一年かけて普段買わないものを買うようにすれば市場に出回るお金は二兆円増える。そして増えた分がすべて新規雇用に回ったとすると、年収二百万なら百万人が職につけるんだぜ。これを貯金しろなんて言えるか普通。みんなが未来を考えて計画的に使えば、さらに劇的な経済効果を発揮して景気を変えられたかもしれないものを、自分の権力闘争に使う政治屋と、不安を煽って商売にするマスコミがよってたかって無駄金にしようとしやがった」

経済の話になるとベンジーは激しい。自分のことでは決して出さない感情が表に出てくるのだ。そんな友の姿を見るのは悪くないのだけど、今はちょっと話が違う。

「それはそうなんだけど、もう過ぎちゃったことじゃない。まずは買えなかった現実を何とかしようよ」

「そうだな、とりあえずあるものを使うしかないから、タカシんちにあるものでやってもら

うことになるな」

「でもタイマーなんかついてないし、どこに隠すのかは知らないけど、僕が中学校の時に買った奴だから結構でかいよ」

「タイマーくらいタカシなら作れるだろ。問題は大きさか」

「ねえ、それを一体どこに仕掛けるのさ」

「それは」とベンジーが言いかけたとき、病室の扉が開いた。そして、現れたのが我らが薫さん。今日もやっぱり美しい。

「すみません。ケンタくんをお願いしてお二人の話を教えてもらっていたのですが、私も仲間に入れてもらえないのでしょうか」

そう言って薫さんは話し始めた。まず驚いたのはケンタくんはクニオくんの従兄弟であること。クニオくんのところに行った時、同居しているおじさん夫婦に子どもはいないのかと思っていたら、盲腸を悪化させてここに入院していたというわけだ。最初に黙っていたのは、僕らがクニオくんのことを疑っていると思ったためらしい。

僕らがクニオくんの敵ではないことと、病院の幽霊話を解決しようとしていることから薫さんは僕たちと仲間になろうと思ったらしい。

「別に僕は薫さんが仲間になることに異存はないけど、ベンジーはどうなの」

「俺も別に構わんさ。ただひとつだけ確認しておきたいんだけど、薫さんって大名寺薫さんでいいのかな」

まっすぐなベンジーの視線の先で、薫さんはゆっくりと頷いた。

「ええ、大名寺ってこの病院とか学校とかいろんな企業を経営してる大名寺グループの大名寺さんってこと」

「それ以外に何がある。そうでなければ、これほど自由な看護師がいるわけ無いだろ。回診はないしシフトもないし、爪はピンクで髪も束ねていない。ありえんだろ、普通」

「すみません。父が院長なものですからわがまま言ってやらせてもらっているんです」

「いいさ、別に不愉快な思いをしたわけじゃないし。それどころか薫さんのおかげで三階の連中は幽霊話にも必要以上に怯えなかったし、国籍問題も起きちゃいない」

そう言ってベンジーは普通に会話を続けているけど、僕にとってはまだ驚きが冷めない。大名寺グループといえばこの辺りで知らない人はいない大財閥。そんな大金持ちのお嬢様が身分を隠して子どもたちの心のケアを行っているなんて、いい話過ぎる。それにもし僕が薫さんと付き合うことになったりなんかして、そしてそしてもし結婚なんかしちゃったら、超逆玉の輿じゃないか。どうしよう「若様」なんて呼ばれたら。

「ハイ、妄想ストップ」

「なんだよベンジー、妄想なんかしてないよ」

「いや、目が完全に向こうの世界に行ってたぜ。それよりも薫さんが仲間になってくれるん

なら色々出来ることがある。院長に頼んでもらえれば病院全体をトラップにすることもできるし、さっきの問題も解決できる」

「それはそうだけど」

お金の問題を女の子に頼むのは、男子の^{こけん}沽券に関わる問題ではないのだろうか。

「それって、朝言っていたお年玉の残りがどうこうっていう話でしょ」

そう言って薫さんはケンタくんの方を振り向き、ケンタくんは「そうそう」と小さく頷いた。

「私のお年玉も少しは残ってるから使っていいわよ。五十万もあれば足りるかしら」

「ああ、うん。全然まったくもって足りること間違いない」

男子の沽券は、金銭感覚の違いを前にあっさりとは降伏した。ただ、完全なる無条件降伏ではなく、お金は出してもらうけど買いに行くのは僕だということは譲れない。とりあえず大須に買いに行った話をして、二メートル四方の電気屋さんまであるカオスの街で目的の商品を見つけることは難しいことを伝えた。

「でも高志さんはさっき行ってきたばかりなんでしょ。大須ならタクシー使えばすぐだし、わからなかったら聞けばいいんだから私が行ってくるわ」

「いいよ、僕は^{大須}に行くのが好きなんだ。それにフレームレートや感度なんかのスペックがわかんないと選べないし」

本当はこんな恥ずかしい商品を薫さんに買わせるわけにはいかなかったからだけど、とにかく僕は必死に説得して、納得してもらった。

「よし、それじゃ薫さんも仲間に入ったことだし、もう一度事件をおさらいしておこうじゃないか」

そう言ってベンジーは、自転車のことから話した。ケンタくんにも聞こえているはずだから、事件にクニオくんは関係ないということなのだろう。

「その勉土さんの事件も幽霊事件に関係があるのですか」

「まあね。明日になればそれはわかる。それよりも仲間なら勉土さんはやめてくれ。友達ならばベンジーと呼ばばいい」

驚いた。学校の連中がベンジーと呼んだときには返事するどころか眉一つ動かさなかったベンジーが自分からベンジーと呼んでくれとは。

「僕はタカシと呼んでくれると嬉しいな。薫さんはなんて呼ばばいいのかな」

「カオル、って呼んでください。同い年なんですから」

「ええええっ、てことはまだ高校生？」

「そうなんです。大名寺学園高校三年六組大名寺薫、よろしくお願いします」

「驚いたな。普通の看護師さんじゃないとは思っていたけど、医療知識もしっかりしてるし、児童心理学もかなりのもんじゃないか」

ベンジーは僕の知らない彼女の姿を知っている。当たり前といえば当たり前なんだけど、なんかジェラシー。

「好きなんです。この仕事が。でも本当はお医者さんになりたいな、と思ってるんです」

「大名寺学園大学には医学部もあるからいいんじゃない」

この大名寺病院も正式には大名寺学園大学付属病院。大名寺学園大学は法学部から医学部まである総合大学だ。

「お二人もうちの大学に来てくれたらいいんですが」

「残念ながら、それは無理っぽい。僕たちふたりとも家がビンボーだから」

大名寺学園初等部は良家の子女のみ通う名門校。初等部から大学まで大名寺学園で通した人は「本家」と呼ばれ、中学から入った「親藩」や高校から入った「譜代」や大学から入った「外様」とは明確に区別される。しかし外様でさえも最高レベルの教育環境を備えた学園に通うにはそれなりの経済レベルが要求される。そんな大名寺学園大学生が名駅や栄のブランドショップあたりをグループで歩いていると「大名行列」と若干のやっかみと羨望^{せんぼう}を込めて呼ばれている。

「それよりもまず、続きを話しておこう」

そう言ってベンジーは、幽霊事件で薫さんが知らないことを要領よくまとめて話した。

「ということは、病院につけられた受信機とBluetoothでペアリングしている送信機があれば、その持ち主が幽霊事件の犯人ね」

要点をまとめて話すベンジーもすごいけど、説明だけでBluetoothの本質を理解する薫さんの頭の回転も凄過ぎる。やっぱ医学部を目指す人は頭の構造が違うんだ。

「犯人かどうかはともかく、関係していることは間違いないと見ていいんだな、タカシ」

「ああ、イヤホンの場合ペアリングにパスキー交換をしないから、絶対というわけではないけど、同じ地域でダブる可能性はほとんどないと思うよ」

「よし、じゃあ作戦は決まった」

「どうすんの」

「サントスさんに電話してくれ。明日の放課後オ・クアルト・デ・ナモロードスを予約したいって言ってな。できるだけ遅い時間にできるだけ長い時間でとってくれ」

「でも恋人たちの部屋に入るにはサントスさんから鍵を借りなきゃいけないんだよ。どう考えたって一人じゃ不自然じゃん」

「一人じゃない。カオルと一緒にだ」

ちょっと待った。健全な高校生としてそれはいかんでしょ。

「いいわよ私は」

「よくないよ。あの部屋に行くんだったら何か他の用事を作ればいいじゃん」

「俺もそう思ったが、せっかくカオルがメンバーに入ったんだ。二人で行くのが一番自然だ

ろう。罌を仕掛けるときは自然に見せるのが一番効果的だ。サンバのオッサンが言っていたことが本当なら、うちの学校の生徒も利用している。疑われることはないだろう」

不意に小学校の頃、国語の時間に本の読みあわせで好きな女の子と夫婦役になったことを思い出した。プライベートでやりたいことを、役としてやる。うれしいんだけど素直に喜べない微妙な感覚。よもやまた味わうことになろうとは。

まずは形から。ということにしておこう。

我が家では基本的に僕が晩ご飯を作ることになっている。

今日のメニューはハヤシライス。ひだまりのランチメニュー候補の一つだ。レトルトばかりを作ってきた貧弱な厨房では複雑な工程の料理はできない。仕込みさえ済ませておけばその場で手間がかからないカレーが一番やりやすいのだけれども、カレーは専門店が多いので、喫茶店が片手間で勝負をかけることはできない。そこでハヤシライスに絞って何回か試作しているんだけど、まだこれといった決め手がない。だから今日はちょっと変則技で勝負してみることにした。

「今日は母さん遅くなるの」

「ああ、今回は勉士くんの入院と重なったから大変だったみたいだな。遅くなるってメールがきたよ」

「じゃあ、二人分作るから、明日の昼にオヤジが同じもん作って母さんの評価も聞いてくれる」

そう言って、オヤジに手順を教えながら作ったのが「焼きハヤシ」。ご飯をグラタン皿に入れてハヤシソースをかけ、卵の黄身とチーズを載せてオーブンで焼く。ポイントはチーズ。とけるチーズは必要だけど、これだけじゃハヤシソースに負ける。そこで登場するのがエダムチーズだ。パルメザンチーズに似ているけれど、焼いた時の香りがハヤシソースに入れた醤油と実に相性がいいんだ。少しパン粉を加えて焦げやすくすると、焼いてる途中からおなかの虫がラインダンスを踊りだすほどいい匂いがする。

「めっちゃめっちゃうまそうな匂いだな。もういいんじゃないか」

「もうちょい待って。もう少し焦がすと、死にそうなほどいい匂いがするんだから」

「もう死んでもいいから食べよう。てか、腹減り過ぎて私はすでに死んでいる」

最後のセリフはケンシロウの口真似。本人はお気に入りのギャグだけど、毎日聞かされているとリアクションする気も失せる。よってスルー。一人で「ひでぶ」なんてセルフリアクションしてるオヤジは放っておいて、お茶の準備。ブラジル人のお客さんからもらったマテ茶だ。正しい飲み方は茶葉をカップに入れてお湯を注ぎ、茶こしのついた金属製のストローで飲む。しかし我が家では一度オヤジが口の中を火傷して以来、急須と湯のみ茶碗のジャ

パニーズスタイルで飲む事になっている。

「じゃ、そろそろ食べようか」

「いただきます」もそこそこに猛烈に掻き込もうとするオヤジ。しかしあまりの熱さに吹き出す。マテ茶の教訓は生かされていない。

「めっちゃめっちゃ熱いけどめっちゃめっちゃうまいやないか。しかもソースの味が前回と微妙に変わってないか」

「うん。醤油を地元産のいいのに変えたから。やっぱ焼けたときの香りが違うからね。あと、甘みが足りなかったからオレンジジュースを加えたんだけど、どうかな」

「いいね。でも俺としては前回の赤味噌の方が旨みがあって好きだけどね」

「赤味噌は旨みがあるけどしょっぱいんだよね。ターゲットが主婦層だから旨みより甘みの方が受けると思うんだけど」

「ならヤクルトとかカルピスはどうだ。発酵食品で旨みはあるし、酸味も甘みもあるぜ」

どうせ単なる思いつきだろうけど、たまにはいいことも言う。今度試してみよう。

「ところで、今日ベンジーと話してたんだけど、定額給付金の時オヤジは普段買わないものを買って使い尽くせ、って言ってたよね」

「ああ、あの金は働いて稼いだお金じゃなく、キーマンショックで落ち込んだ景気を回復させるために、国から預かったお金だからな」

「じゃあ何で普段買わないものじゃなきゃダメなの」

「普段買うものなら別に給付金をもらわなくても買うわけだから、使うお金のトータルは増えない。要は貯金したのと一緒じゃないか。お金は使ってこそ価値があるんだぞ」

「そこんところがよくわかんないんだよね。だって二万円を貯金したって、二万円の価値が減るわけじゃないと思うんだけど」

「違うな。例えば高志に今千円渡したとする。さあどうする」

「とりあえず机にしまっておくよ」

「ならば満足したのはお前だけだ。もしお前が、その千円でその価値に見合うもの、例えば戦国武将パンツを買ったとしても同じ千円分の満足が得られるわけだろう。しかしこの場合満足するのはお前だけじゃない。パンツ屋だって千円が得られて満足する。これで満足が二倍になった。そしてそのパンツ屋が売上の千円を使って、うちでランチを食ってくれたとする。そうすると結局千円は俺の手に戻ってくるわけだけど、俺も売上に満足するから満足は三倍になる。だからお金は使ってこそ価値があるんだ」

「なんかわかるような気がするけど。こんな景気の悪い時にわざわざお金を使うのはもったいないとみんな思うんじゃない」

「そう。だから給付金でそれほど景気は良くならなかった。これがもしみんなが給付金をもともとなかったアブク銭だと考えて一年がかりで普段買わないものを買ったならば、今年は

世の中に普段より二兆円多く出まわることになったはずだ。そしてもし、みんなが半年で使いきって、その半年で増えた利益を残りの半年で使いきればその一年で四兆円が普段より多く出回ることになる。それだけ出回ればかなり景気は良くなったはずなんだけどね」

うちのような小さな喫茶店をやっているオヤジでさえも景気のために使えたのに、みんなが景気のためにお金を使えなかったのはなぜなのか。ベンジーが言うように政治家やマスコミのせいなのか。それともこの経済理論自体の問題なのか。

オヤジに聞いてみようと思ったら、僕が聞いてないのも構わずに「これがもしひと月で使いきっていたら二十四兆円、これが一日なら七百三十兆円でGDPを超える。一時間で使いきれば…」と白目剥きながら無駄に頭を使っている。

「でも結局景気が良くならなかったってことは机上の空論に過ぎなかったことだね。でも机上の空論で終わらせようとしなかったオヤジって」ちよっぴりかっこいいな、という言葉は気恥ずかしくて続けられなかった。

「何だその、矢吹ジョーのクローン、って」

無理やり過ぎだろ、それは。続けなくてよかった。...かな。

百分の壁が問題だ。

あの後すぐに大須に買いに行ったのだけど、どうしてもタイマー付きの商品がなかったのだ。いや、もしかしたら聞けばどこかにあったのかもしれない。でも、もしその理由を聞かれたらどう答えればいいのかわからなかったし、なにより恥ずかしい。商品をレジに持って行く時でさえ、レジのオッチャンに「これ何に使う気でっか」と聞かれたらどうしようかと必死で言い訳を考えていたくらいなのだから。ただ、レジのオッチャンは僕のような客に慣れているのか「兄ちゃんあんましスケベなことに使ったらあきまへんで」なんて余計なことは言われなかったのは良かった。でも何でこんな時は関西弁の方がしっくりいくのだろうか。

まあそんなことはどうでもいい。タイマーがないなら作るまでだ。隠すためには小さくなくてはならないけど、スイッチを入れるだけの機能なら百円ショップのキッチンタイマーで十分だ。アラームのスピーカーに液晶画面に時間合わせのボタンなど、不要なものをすべて取り払えば切手くらいの大きさに作り変えることは簡単だ。

しかし問題はキッチンタイマーの設定時間は九十九分五十九秒まで。要するに百分以上は使えないのだ。しかしベンジーが求める時間は二時間。あと二十分の空白がある。二台を連結してリレーにすれば確実だけど、サイズは二倍になる。抵抗を増やして二割遅らせるのが妥当だろう。

ハンダゴテを握り、松ヤニの焼ける匂いを嗅ぎながら慎重に作業をすすめる。念のために

三台のキッチンタイマーを買った。パーツ類はジャンク品が段ボール箱に四つほどが常にある。サイズの古いハードディスクの部品が手頃だろう。理論的な値に近い抵抗器を選び出す。自慢じゃないけど理科だけは得意だ。物理と化学ならベンジーと同じ点を取ったことがあるほどだから間違いない。小テストで満点とっただけだけど。

パーツさえ選んでしまえばあとの作業は機械的に進めるだけ。まずはハンダゴテでハンダを溶かしてジャンク品から所望の抵抗器を取る。次にタイマーからも同様に抵抗器を取り去り、ジャンク品から取った抵抗器をくっつける。ほとんど何も考えずに手が動く。

妄想が始まる。

明日の夜、八時から九時まで薫さんと二人きりでピンクの小部屋。出来ればもっと長い時間の方が良かったけれど、夜までブラジル人のお客さんでいっぱいだったのだ。

薫さんの方から僕らの仲間に入りたいといったぐらいだから、きっと彼女は僕らに好意を持っているはずだ。見た目はベンジーの方がカッコいいけれど、アイツはほとんど喋らない。足を吊った朴念仁より、しゃべりやすい僕の方がいいと思っている可能性は低くない。しかも、二人で行ってもいいといったのは薫さんの方だ。

これはきっと愛だ。

明日履いていくパンツは、愛の直江兼続か。いやしかし、もし見られてしまったら引かれるかもしれない。いや、一時間しか時間はないのだし、いきなりパンツを見る関係にはならないだろう。いやいや、最近の若者は乱れちよるからのう。

いかん、加熱しすぎて抵抗器が溶けた。

月曜日。早速テストの返却が始まった。物理は問題無し。化学はまだ返ってきてないけど問題ないだろう。数学と地理もまあまあいい。英語は理凡クラスの平均スレスレ。国語は現国が平均よりちよい悪。古文漢文は返ってきてないけど最悪だろう。要するに私立ならそこそこのところにいけるけど、国公立はヒジョーにキビシイ。ベンジーと同じ名大に行こうなんて夢のまた夢。我が家に私立に通う金はなし。かと言ってこの成績で、近くに通える国公立はない。従って、僕に明るい未来はない。

「オーケー。手順はよくわかった。けどどうして愛の小部屋に仕掛けるかが分かんないんだよね」

放課後。ベンジーの病室で今日の手順を打ち合わせたところ。幽霊事件の手口や利害関係からしてサントスさんがこの件に絡んでいるのは間違いないだろう。でも、なぜ愛の小部屋なのかがわからない。病院自体をトラップにする以上、証拠は病院で揃えれば十分だと思う

んだけど。

「俺も確かなことは言えない。保険みたいなものだ」

「じゃあその保険の意味を教えてよ」

と言ったところで教えるようなベンジーじゃない。案の定ベンジーは僕の言葉を華麗にスルーして足のギブスをボリボリ搔いている。

「昨日オヤジと話してたんだけど、なんで定額給付金は効果がなかったんだろ。この定額給付金という経済対策自体が間違ってたのかな」

まるでモンゴル人にフランス語で話しかけてしまったような白けた空気に耐えられず、僕は話を変えることにした。

「今の経済学ではキーマンショックみたいな急激な信用不安に対してできる手立ては二つ。一つは金融機関が破綻しても信用崩壊を起こさないように緊急融資枠を確保すること。かつてスウェーデンが金融危機に陥ったときに緊急看護室と呼ばれる莫大な融資枠を準備することで危機を回避している。こいつに関して麻布元総理は素早くIMFに十兆円の拠出を行ったけれど、他国にその余裕がなかったんで今ひとつ効果がなかった。そしてもう一つが消費を喚起することで市場に出回る現金を増やして、景気の失速を止めること。これが定額給付金を始め各国で給付金や減税を実施している。ただしこれはカンフル剤みたいなもので、短期的な効果しかない。それでも大抵の国では日本より効果を上げている」

経済の話になるとベンジーは生き生きしている。緊急なんたらのはよくわからなかったけど、そんな対策をやっていた事自体を知らなかった。ヤカンのような顔をした元総理を少し見直した。

「でも何で日本じゃ効果がなかったの」

「原因は二つある。一つは額が小さかったこと。そしてもう一つは時期が遅すぎたこと。日本の財政規模からすると少なくともその三倍くらいは必要だったと言われている。そしてカンフル剤としての景気対策は、失速したらすぐに手を打たなければ効果が薄い。半年も経ってから給付しているようじゃ遅すぎだ」

「じゃあやっぱり麻布さんのせいなんだ」

「そうとも言えるしそうじゃないとも言える。緊急看護室の設置については、国際的な手当を率先して行なったという点では評価できるけれど、日本が十兆円も出せば他国も出してくれるだろうという見込みが甘すぎたとも言えるだろう。そして国内対策の額が小さかったのは、莫大な赤字を抱える中で、さらに赤字国債を発行してまで給付金を実行すれば野党の格好の餌食になったからだし、時期が遅くなってしまったのはねじれ国会を利用して野党が遅らせたせいだ。野党をおさえこめなかったという意味では総理のせいだし、政権を取るためには何でも反対すればいいという野党のせいでもある」

そう言ってベンジーは赤字国債を発行しないために「埋蔵金」に手を出したことや、野党

が過半数を占める参議院でギリギリまで粘って否決されたら国会期間が終わるため給付金を実行するための法案自体が廃案になってしまうので延期せざる得なかったことを説明した。

今は埋蔵金を使うことが当たり前になっているけど、存在は知られていても使うには冠婚葬祭を一度にやるくらい複雑な手続きが必要だった埋蔵金を、まるで貯金を下ろすかのように使ったのは麻布さんが初めてだそうだ。今度からヤカン太郎と呼ぶのはやめておこう。

「ただね」とベンジーにしては言いにくそうに続けた。「結局は誰かのせいというよりも、正義の見方の問題なんだ」

「正義の味方？」

「アクセントがちょっと違う。正義というものの捉え方の問題なんだ。例えば一昨日タカシが消した落書きを書いた奴は、まず間違いなく自分が正義だと思ってやったはずだ」

「あんなもん正義のわけないじゃん。クニオくんがやったなんて証拠は一つもない上に、ベンジーがピンピンしているのに人殺しなんて書いたんだぞ」

「それでも書いた本人にしてみれば、悪いヤツに制裁を加える正義の行動だ。俺達はみんな正義の味方になりたくて、誰かや何かをワルモノにすることが正義なのだと無理やり勘違いしてしまっているのさ」

まるで明日の時間割の話でもするように淡々と話すベンジー。確かにワルモノが出てこない正義のヒーローはいないように、僕らが正義の味方になろうとするとワルモノが必要だ。それは無理な勘違いなのだろうか。王子様の哲学は今ひとつ理解しがたい。

今日の晩ご飯は和風きのこスパゲッティだ。

これもひだまりのランチメニュー候補の一つ。狭い厨房でも小型の Pasta マシーンくらいなら置ける。ソースをフライパン一つで作れるようにすればランチで出すことも不可能じゃない。あとは他店との差別化。新鮮な魚介のソースを使った本格イタリアンのお店と競り合っても勝ち目はない。

今回のポイントは茹で汁。昆布でしっかりとだしを取った茹で汁を使っている。そして和風ソースにはしっかりと鰹だしと地元三河の本格醤油。ソースの方には昆布だしを使わない。日本人独自の口内調味という奴で、噛むことによって味を完成させる。のどごしを楽しむ日本の麺と違って、アルデンテで噛みごたえを求めるスパゲッティならではの調味方法と言えるだろう。

具に使うきのこは、店で作る時のことを考えて予め油で炒めている。ここでのポイントは熱した油にきのこを入れる前に醤油を垂らすこと。焦がし醤油の匂いほど日本人の食欲を引き出すものはないからだ。パスタはディチェコのスパゲッティ。よくあるブイトーよりも麺の表面にざらつきがあるので、さらさらの和風ソースとの相性がいい。

今日は七時前に出かけなければならないので一人で晩ご飯。材料と作り方をセットにしておいてあるので、七時半頃に仕事が終わってから、自分たちで作ってもらうことになっている。

そんなわけでたった一人の晩ご飯。それでもちゃんと手を合わせて「いただきます」と言うあたり、育ちがいいと思わないかい。

ちゃんと美味しくできてるかをチェックしないといけないんだけど、つい夕方の会話を思い出す。

正義が問題なんだとベンジーは言った。悪いヤツを責めている間は自分が正義だと実感できるから、どうすればいいかを考えることよりも、誰が悪いのかを考える方を優先する、そんな安っぽい正義が問題なんだと。

あの後ベンジーと中学時代の話をした。

中学一年の頃は、ただベンジーはハブられていただけだった。しかし二年になると、HRの議題として「クラスが勉強に集中できないのはベンジーの臭いのせいなので、毎日風呂にはいることを義務付けましょう」なんて馬鹿なことを言う奴が現れた。いくら勉強してもベンジーに敵^{かな}わないことをやっかんでいたことが今ならわかる。何人かが協力してベンジーに恥をかかせることに熱中し始めた。「僕はピンボ一人です」なんて紙が背中に貼られ、体育の時間中に密かにズボンの尻の縫い目の糸が切られてるなんて事件が次々に起こるようになった。客観的には単なる卑怯者の行いだ。

「でも奴らには奴らの正義があったんだ」とベンジーは言った。週に一度しか風呂に入らないベンジーの臭いがクラスの連中の迷惑になったことがあるは事実だし、生徒会のバザーやアルミ缶回収なんかにベンジーの家が殆ど貢献していなかったのもまた事実だ。しかし問題になってからは、ベンジーは冬でも毎日濡れタオルで体を拭くことを欠かしていないし、アルミ缶は日日新聞さんに協力してもらって誰よりもたくさん集めている。それでも、少なくとも家族の裕福さという点でベンジーは彼らに劣っていた。そこで彼らは自分が優位に立てる立場でベンジーに制裁を加えることによって正義を主張していたのだと。

給付金騒ぎも似たようなものだ。小さなことで優越感を持った多くの国民は麻布元総理を責めることに正義を見出していた。給付金を決めるとバラマキだと文句を言い、給付金が他国でも実施されてることが広まると、少なすぎるとか遅すぎると文句を言った。

その一方でバラマキだと文句をつけた国民は、もっと派手なバラマキを約束した政党に投票しているし、投票された政党はすごい勢いで赤字を拡大させようとしているらしい。

しかしなにより情けないのが僕だ。僕自身も麻布さんのことを漢字が読めない空っぽヤカんとバカにしていた。他の大人たちより政治のことも経済のことも知らないくせに、僕が読める漢字を読めなかったというだけでバカにしていたんだ。そんな小さな優位しかもってい

ないのにあらゆる政策に文句をつけ、見た目まで馬鹿にした。こんな僕には、学力でも体力でもベンジーに勝てないクラスメートたちが、ベンジーをバカにしたことを責める資格はない。

僕がしたり顔で麻布さんの無知をあげつらい、大げさにこの国の未来を嘆いていたとき、ベンジーは悲しそうな顔をしていた。当然だ。僕はその時、ベンジーをいじめていた連中と同じ顔をしていたはずなんだから。

その点オヤジは立派だった。麻布さんが定額給付金を決めたとき「これじゃ地域振興券の二の舞だ」と反対したのは、かつての経験から来る根拠のある批判だろう。そして反対する立場にありながら、給付が実行されると、それが最大限に活用できるよう、普段できなくなってしまうことに使いきったのだ。自分の知識で判断し、たとえ反対であろうと、決まったことには文句をつけるよりも自分にできることを考えたオヤジ。この国で本当の正義の味方は、キラリと歯が輝く精悍な二枚目ではなく、少々腹が出た冴えない中年オヤジなのだ。

戦隊モノのコスプレに身を包んだオヤジの姿を想像し、これが現実かと呟いてみる。

少し大人になった気がする。ということにしておこう。

集合時間にベンジーの病室に行ってみると、驚いたことに薫さんはギャルメイクだった。

「すごいな、声を聞かなきゃ見ただけじゃわかんないや」

カールした茶髪に、瞬きするだけで吹き飛ばされそうなまつ毛。アイラインのせいか目の大きさは二倍くらいになっている。

「病院のトラップでは看護師さんに戻ってもらわなきゃならないからな。サンバのオッサンの前ではできるだけ喋らなくていいようにしておいてくれ。それから、受付の方は準備できたか」

「ええ、いつでも仕掛けられるようになってます。それから、万が一サントスさんが暴れた場合に備えて元ラグビー部の外科部長さんと、元相撲部の小児科の先生に残ってもらってます」

「ノゾキは持ってきたか」

「トーゼンさ。てか、こんなもん部屋に置いといてオヤジに見つかったらエライことになるからね。それより早く行かないと間に合わないんじゃない」

あと十分ほどで約束の八時になる。別に仕掛けるのに時間はかからないけど、遅れて行って不審に思われると、その後のサントスさんの行動が変わってしまう可能性がある。

「それは大丈夫。おじいちゃんが運転手さん付きで車を貸してくれたから、入り口で車が待ってるわ」

たしかに入り口に車が停まっていた。正面から見たときにはただのハイヤーみたいな車だ

ったんだけど、近づくにつれて遠近感が壊れてきた。横から見たらハリウッドスターか叶姉妹しか乗らないような長いリムジンだったのだ。

「そんなので行ったら目立ちすぎない？」

「大丈夫。おじいちゃんはホワイトヒルズにも家を持つてるからヒルズ内では目立たないし、音は小さいからちょっと離れたところに止めればサントスさんにもわからないわ」

ホワイトヒルズにも、ってことは当然他にも家はあるのだろう。最初に唱えた呪文「あの人は別の世界の人」を思い出す。カオルさんはやっぱり別の世界の住人らしい。

でもこれからその彼女とリムジンで初デート。

これも現実さ、と呟いておこう。

出掛けにベンジーが僕だけを引き止めた。手招きをして僕を呼び寄せると耳元で「カオルに惚れるなよ」と囁いた。

ベンジーも薫さんに惚れているのか。親友との友情を取るか、恋を取るか。まるで青春ドラマのような展開じゃないか。

ビバ、青春。

約束の時間に事務所に着くと、今日も誰もいない。チャイムを鳴らすと愛の小部屋の方から陽気な歌声で返事があった。

「ようこそオ・クアルト・デ・ナモラードスへ」

僕は無視して薫さんへの熱烈ハグ。

「ベットは綺麗にしておきましたから、九時に電話するまで思いっきり楽しんでください」

もうちょっと何か言ってくるかと思ったら、首を振りながらあっさり帰っていった。

「なんか予想と違っていい人そうね」

「うん。見た目は限りなく怪しい人なんだけど。もしかしたら純粹にジュリちゃんちのためにやってるのかもしれないね」

「それもあるんだけど、わざわざ装置を作って仕掛けるタイプでもないみたい」

薫さんはどこでそれに気がついたのかわからないけど、僕もそのことに気がついてた。

「だよ。開きっぱなしの事務所にここの鍵を置いとくほど警戒心もないし、それに見た？ 入り口の監視カメラ。むき出しの鉄骨に直貼りしてるからダミーだってことがバレバレじゃないか」

「どういう事？」

「本物ならば電源もいるし画像も送らなきゃいけないからコードが必要なんだ。だからもし本物だとしたらコードが見えるか穴をあけてその中にコードを通さなきゃいけないし、本体

の重量も結構あるから壁に穴をあけてビス止めしなきゃいけないんだ。それなのに穴のあけにくい鉄骨についているということは、軽いダミーが両面テープで付いてるだけってことになる」

「タカシくんてすごい」

「単に機械いじりが好きなだけで、別にすごくもなんともないさ。薫さんなんか医学部志望だろ僕なんかよりずっと頭がイイじゃん」

「もってる知識の量なんかで人を見ちゃダメってことね。それより私たち相変わらず、くんとさんね」

「でも、いきなりカオルってのも照れくさくない？」

「タカシ」とつぶやく小さな唇。

あれ、なんかいいムードになってきたっぽくない？

「タカシ、まず言っとかなければならない大事な話があるんだけど」

え、それって通常男の方から告白すべき事柄ではないのでしょうか。いやしかし、これまで全てこちらから告白して玉砕してきた以上、先方からの告白を待つて謹んでお受けしたほうが、事の次第がすべからく上々に運ぶこともありにけりかも、さもありなんし。

「なな何の話でありますか」

駄目だ、日本語が崩壊している。落ち着け。

「驚かないで冷静に聞いて欲しいの」

レイセイって誰だ。違う冷製だ。違う冷静だ。冷静になれ俺。

「私、本当は」

駄目だ、心臓が止まる。こっちを見ないで。

「男なの」

オトコナノ。ええとあの、薫ではなく音子というお名前なののでしょうか。ってボケる必要もないくらい声が男じゃん。

「え、それってあの、つまり、結局、どういう事」

薫さん、というかカオルは大名寺家の長男として生まれ、小学校の頃は普通に男の子として生活していたらしい。とはいえ、幼い時からすでに女の子のようにかわいいと評判で、男の子の服を着た美少女として名古屋のセントラルパークでスカウトされたこともあるという。

そんなかわいい少年だったカオルが試練に出会ったのは中等部に入ってから。カオル同様の家柄ばかり揃っていた初等部と違って、中等部には同じお金持ちでも一代で財を築いたツワモノを親に持つ子たちも入ってきた。

だいたい一代で財をなすような人というのは、余程の才覚を持った人を別にして、人を踏

み台にしてのし上がってきた人か、すでに財をなした人の引き合いで成功した人が多い。

そんな親を持つ子たちは、当然その親を見て育っていたわけで、似たような視点で周りの子たちに接するようになるものだ。大名寺学園中等部も同じで、初等部からの持ち上がりである坊ちゃん嬢ちゃんは、初めて自分を蹴落そうとしたり利用しようとしたりする人に遭遇することになる。ただ例年は初等部の子たちは誰も似たり寄ったりなので、誰か一人に集中することもなく、細かいトラブルを繰り返すうちに大体落ち着くところに落ち着いてきた。

しかしカオルは特別だった。中部地方を代表する大名寺家の御曹司であるだけでなく、見た目はかわいい女の子。その財力に擦り寄ってくる子も少なからずいた一方で、いじめのターゲットとしてこの上なく美味しい獲物とみなす子もいた。

最初のうちは体育の授業中に制服を女子用にすり替えるなんて、お金のかかる割に地味ないじめだったらしい。それがネットを活用するようになると徐々に陰湿さがエスカレートしてきた。援交サイトに写真入りで名前と携帯番号が投稿され、2ちゃんねるでは盗撮されたカオルの写真を使ったコラで連日祭り状態になるほどになったという。さらにカオルのコラを使ったエッチなサイトを運営するような手の込んだものが現れるようになると、押し寄せるストーカーのため学校外を歩けなくなるほどになったそうだ。ただ、学校外については親がボディガードをつけるようになったので直接的な被害は最初のうちにいきなりキスをされたのと、車に連れ込まれそうになったことだけらしい。まあそれは人に言えることは、という意味かもしれないけれど、聞いても仕方のないことだし聞く必要もない。

「それで人からの被害はなくなったわけだけど、ネット上には僕が書いたことになっている僕の写真入りのエッチなサイトが残っていた。父が八方手を尽くしてくれたらしいけど、サーバーがバハマ国籍だったので手が出せなかったんだ」

ギャルメイクのカオルが男の子の声で話す内容は、その外見からは想像もできないくらい悲惨なものだった。

「ところがそのことがおじいちゃんの耳に入ると事態は一変。おじいちゃんに証拠なんていないから、犯人だと思われていたIT成金の息子は一週間で自主退学。その後家も破産したらしいんだ。そうしたらみんなの態度も一変。今まで親しかった子も、露骨に無視してた子も、みんな僕に気を使うようになって、教室で僕がくしゃみしたら全員が風邪薬を差し出しかねないような状態になっちゃったんだ」

「それって、いいことじゃないの」

「全然。何をやるにもみんな僕の意見が最優先。僕が一言いえばすべてが決まるし、誰も不満なんか言わない。でも後になると必ず誰かがご注進にやってくるんだ。〇〇さんが大名寺さんの意見に不満を持ってましたよ。とかxxさんが大名寺さんの悪口いってましたよ、って」

その失望は僕にも多少は分かる。僕の羽振りが良かった頃もご注進野郎はやってきた。そ

の時はその悪意に気がつかなかったけど、お金がなくなって真っ先に消えた友達はそいつらだ。人の悪口をわざわざ持ってくる奴がいい奴のはずがない。今頃は、僕が誰かの悪口を言っていたと誰かにご注進しているに違いない。

「そんなこんなで誰も信用できなくなって、一ヶ月くらい不登校。そして一ヶ月後に登校した時は...女の子になっていたの」

最後の一声は女の子。

「こうやって女の子になるとクラスみんなはなんて声をかけていいかわからないみたいで、みんなスルー。何があったかなんてものも聞いてくれなかったわ。でもそっちの方が気が楽でよかったけれど」

気が楽で、と言った瞬間の影を僕は見逃さなかった。みんなからスルーされることが嬉しいはずはない。僕は女の子としてのカオルさんを好きになったことも事実だ。でも病院で子どもたちに一人ひとりに心から語りかけている人間として、そして僕とベンジーの仲間としてもカオルが好きになったこともまた事実なんだ。

「じゃあ僕が聞こう。何で女の子になったんだい」

「タカシなら聞いてくれると思った。女の子になったのは別の自分が欲しかったから。ネットにはまだまだたくさんの私の写真が出回ってたし、今も出回っていて好奇の目にさらされているの。でもそんなこと普通耐えられる？」

コラージュされた写真とはいえ、自分の恥ずかしい格好の写真が何百枚も出回っている。そんな事態を想像し、僕は黙って首を振った。

「でしょう。でも女の子になれば、男の子だった頃の私は今の自分じゃないって否定できるじゃない。それに女の子はお化粧でいくつもの顔を持てるから、もしこの顔をネットで晒されても別の顔になれると思うと、とっても楽なの」

「でも男が女で暮らすのって、色々大変じゃない。あの」トイレとか、とは聞きにくい。「おトイレなんかはむしろ逆。以前は私が男子トイレに入るとぎよっとされたけど、今はそんなことないし」

「あと喋り方とか混乱しない？声も使い分けなきゃなんないし。ていうか声の使い方すぎない。声優さんでも男でそこまで女声が使えなんて石田彰さんくらいしか僕は知らないよ」

「石田彰って人は知らないけど、私の声は声優さんと違って二つしかないの。生まれつき声帯の交差筋が二つあるらしくて、特にトレーニングをしなくても二つの音域が簡単に切り替えられるの。ただ私の中では、女の子になっているときは高い方の音域が自然にでるから、喋り方も女の子にしないと落ち着かないのよね」

確かに聞いている方としても女の子の姿（しかもため息が出るほど美しい）で男の子の声で喋られるより女の子の声の方が落ち着く。でもなあ、こんなに綺麗なんだけど男の子なん

だよな。

「でもカオルは女の子の格好をしている時でも気持ちは男の子なんだろう」

「どうかな。多分気持ちも女の子かな。最初のうちは男の気持ちと女の姿でギャップを感じていたんだけど、最近それはなくなったから」

う～む、なんかとっても複雑な気持ちだ。女の子の気持ちということは、男の子を好きになったりしないんだろうか。でもそれを聞いてどうする。てか、僕は何が望みなんだ。僕の気持ちはどこにどう納めればいいのか。

「ところでカオルが僕たちの仲間に入ろうと思ったってことは、男の子であることも明かすつもりだったんだろ。せっかく女の子として落ち着いていたのに、どうして？そんなことしなくても、僕とベンジーは二人でも幽霊の正体を突き止めるつもりだったから、放っておいてもよかったんじゃない」

ちょっと意地の悪い言い方かもしれないけど、やっぱり気になる。もしかして僕の男の魅力か。って、だからそれを聞いてどうするオレ。

「私、ちょっと不思議な能力があって、人の心が何となく見えるの。もちろん何を考えてるかなんかわからないけど、人の周りに色が様々な形で広がっているのが見えて、何となく様子がわかるの」

僕は病室で子どもたちに話しかけているカオルを思い出した。カオルに話しかけられた子は必ず話しかけられる前よりも幸せな顔をしていた。たぶんカオルのこの力が子どもたちの不安や悲しみを和らげていたのだろう。

「そして大里くん、じゃないベンジーが入院してきたとき、ベンジーは私と同じような深い孤独を抱えているのが見えたわ。そしてその孤独はベンジーを悪魔に変えることができるほど強力なものだとも」

僕はちょっと恥ずかしくなった。ベンジーの親友でいたつもりなのに、ベンジーの孤独に気づけなかったからだ。誰よりも賢く誰よりも強いベンジーは、孤独なんて感じないと思っていた。ベンジーだって僕と変わらない十八のガキなのに。

そして、そういうカオルもまた、自分を悪魔に変えるほどの孤独を抱えている。今いる友達も、カオルを慕う子どもたちも、そして僕もまだ、みんなカオルの仮面をかぶった姿しか知らないのだ。

「でもね、ベンジーの孤独はタカシが来ると一気に消えてしまうの。まるで砂漠の真ん中に置き去りにされた雛鳥が親鳥を見つけたように、それはもう見ていて嬉しくなっちゃうほどの変化なの。タカシがいるからベンジーは心のなかの悪魔を封じ込めていられるのね。それを見てたら私もどうしても本当の友達が欲しくなっちゃって」

ということは、カオルは僕と友達になりたかったということなんだ。なんか嬉しい。いや、だから、カオルは男なんだってば。...でもこんなにカワイイんだよな。

「でもカオルだってちゃんと心の中の悪魔は封じ込めているじゃない」

子どもたちの心のケアをして、医学への道を志す。天使のような外見には、僕には到底マネできないほど立派な心が宿っている。

「そうかしら？私の中の悪魔は結構がんばりやさんよ」

そう言ってカオルは、天使の微笑みを浮かべながら僕のほっぺにキスをした。

「やっぱりタカシは気がついてなかったんだな」

大名寺病院一階にある会議室にいるのは僕と車椅子に乗ったベンジー。カオルは変身中で、後からカオルのお父さんでもある院長先生も参加する予定だ。

「ベンジーは知ってたの」

「知ってたわけじゃないが、見当は付いてた。腰のあたりの骨格や筋肉の付き方は男のもんだし、微かだが喉仏もあった。声もキーは高かったけどトーンが平板だったしな。あとは表情かな。常に薄皮一枚ベールを張っていたような気がしなかったか」

「でも胸があったじゃない」

「んなもんブラがあればごまかせる。しかし腰はごまかせない。タカシも機械ばかり見ないで、人を見る眼を養うんだな」

他人には興味がないなんて顔をして、意外に細かいところまで見てるじゃないか、このドスケベ王子。

「へいへい以後精進いたしますだよ、王子様。ということはベンジーはカオルの性別にかかわらず仲間ってことでいいんだよね」

気になっていたのはベンジーの反応。もしベンジーがカオルのことを女の子として仲間にする気だったのなら、話が変わるかもしれないと思ったのだ。

「当然だろ。カオルはカオルだから仲間になったんで、性別は関係ない。それよりもタカシの方こそ女の子じゃなくてがっかりしたんじゃないのか」

ピンクの部屋でのキスを思い出す。柔らかな唇の感触がほっぺにまだ残っている。危険な小悪魔に魅入られたような気がしなくもないけど、ベンジーとの相性もよさそうだし、仲間としても最高だ。

「がっかりなんかしてないさ。ただ、僕たちのような貧乏コンビにすごいお金持ちが入ってきちゃったなって思っただけさ」

これもホントの気持ち。でも仲間なんてのは全部が全部似たような奴が集まるわけじゃない。ホンの一点さえ共有できれば、どんな違いがあってもきっと楽しくやれるだろう。

「小学生の頃タカシのところでゲームやったとき、仲間のキャラがバラエティ豊かの方が強かったじゃないか。俺たちなら最強さ。大名寺学園大学ならここから近いし、大学に入っ

てからもみんなでこんな謎解きができるといいな」

いつになく口数が多いベンジー。孤独を共有できる仲間ができたことが嬉しいに違いない。そしてそんな嬉しそうなベンジーを久しぶりに見た僕もやっぱり嬉しい。

でもこの仲間の中で僕の役割はなんなのだろう。知力と体力のベンジー。美貌と感応力のカオル。僕の特技って一体…。二人ともSキャラだからMキャラでバランスを取る役？まあそれでもいいだろう。でも一番気になることは…

果たして僕は大学生になれるのか、だ。

夜十一時。僕は入り口に背を向けて待合室にいる。待合室には他に親子連れが四組と中年男性が三人。内二人は応援の先生方だ。新型インフルエンザを警戒し、みんなきっちりマスクを掛けている。

ベンジーは応接室で待機。受付にはベテランの婦長さん。

十一時二十分。カーニバル、スタート。じゃない、サントスさん登場。例によって派手な緑の衣装でボンバーヘッドにサングラス、キャリーバッグを引いている。

ベンジーの推理ではあのキャリーバッグの中は、違法に出力を上げたトラック無線とバッテリー。この点については院長先生も全く同意している。^{のぼり}幟をつけたポールはアンテナで、重たいバッテリーを運ぶためにキャリーバッグを使っているに違いないと。

携帯電話の普及で急激に減ってはいるものの、違法トラック無線の被害が現在でも多発している。一番多いのはテレビやラジオに無線の会話が飛び込んでくる事だけど、他にもリモコンのスイッチの誤作動も多い。また、強力な電磁波は前頭葉を刺激して半覚醒時には幻覚などを起こすこともあるという。

サントスさんがやってくる時間に多発している機器の不調や幽霊の目撃談などは、この電磁波によるものの可能性が高いというのだ。

しかし問題はサントスさんがそのキャリーバッグを一時も手放さないこと。中を見せてくれとお願いして開けてくれるとは思えないし、強引に見ようにもあの巨人が相手では誰も歯が立たない。

そんなわけで今日の作戦はサントスさんをいつもの応接室ではなく、受付裏の資料室に案内することから始まる。資料室は東海大地震などの災害に備えて一段高くなっているため、受付横の通路を階段かスロープで一・五メートルほど上る必要がある。そしてそのスロープの前後には段ボール箱が山積みになっている。

婦長さんに案内されたサントスさんが重たいキャリーバッグを持って階段を上るのを諦めてくれることを期待したんだけど、ブツブツと呪いの言葉をつぶやきながらも持ち上げてしまった。第一次作戦失敗。

第二次作戦は資料室の狭さ。院長先生が応接室が使えないことを詫びつつ、部屋が狭いので荷物は外においてくださいと頼んだんだけど、サントスさん応じず。

ならば最後の作戦に賭けるしかない。最後は僕が考えた作戦。名付けて「魔性の微笑作戦」。ましようとびしょうで韻を踏んだのが判って頂けたらどうか。どうでもいいけど。

これはサントスさんが資料室からの帰りに、階段を降り切ったところで資料室の向かいの部屋に待機していたカオルが「サントスさん、ちょっとこれを見ていただきたいんですけど」と微笑みかけるといふ作戦だ。もし、これが院長先生が呼びかけたのならサントスさんは院長先生の方を呼びつけるか、またバッグを持って上がっていくだろう。しかしこれが魔性の微笑をもった美女からの呼びかけとなると話が違ふ。一刻も早く駆けつけようとバッグなんか置いていくだろう。

ただし、この作戦では時間がない。キャリーバッグと資料室のドアまでは十メートルと離れていない。サントスさんが振り返ってしまったら、どんな正義の味方が駆けつけるより早く、あの巨体が降りかかってくるだろう。

ここでの僕の役割は無邪気な少年。いくら怪しいバッグとはいえ、無断で開けるには大義名分が必要だ。サントスさんがバッグから離れた隙に、バッグの中に粉々にしたドライアイスを入れ「あっ、バッグが燃えてる」なんて叫びながらバッグを開けて、証拠の無線機を「あれえ、これは一体なんだろう」なんて言いながら引っ張り出すのだ。ドライアイスはすぐに気化してこちらの証拠は消え、相手の証拠だけ手に入れる小芝居だ。そう、どこぞでちっちゃな名探偵がいつもやってるあの手口によく似たやり方。彼に比べると少々オッサン臭い少年だけど、ケンタクんのような無関係の少年にやってもらうには危険過ぎるし、大人がやったら真剣な乱闘騒ぎになりかねない。あくまでも無邪気に、偶然見つけちゃったことにしなければならない。

僕は受付とは逆サイドの通路脇に寄りかかり、サントスさんが出てくるのを待った。

「チャウ アミーゴ オブリガード」

陽気に感謝の言葉を口にしながらサントスさんが出てきた気配がする。ベンジーのアドバイスに従って今日は通訳を付けたのが良かったらしい。サントスさんは日本語が達者なようでもあるけれど、細かい用語になるとどうも怪しい。それに言っていることがよくわからなくても適当に解釈する傾向もあったから今までこじれてしまったのだろう。

ゴロゴロとキャリーバッグを引きずる音が消え、階段を降りる気配。まだ顔は出せない。「サントスさん。こちらの書類にサインを頂きたいんですけど」

カオルの声。一呼吸おいて顔を出す。いつもより濃い目のルージュに目を奪われる。でもそれは僕だけじゃない。サントスさんもキャリーバッグから手を離し、フラフラと吸い寄せ

られている。

足音を殺してキャリーバッグに忍び寄る。身を屈め、バッグの影に隠れるようにして、ホックを外す。中にはやはり無線機。ポケットの中のドライアイスが入った保冷袋を取り出す。サントスさんの大きな声。心臓が半分口から飛び出した気分で前を見る。ご機嫌でカオルに話しかける巨人の背中。OK。保冷袋を揉み、くっついてしまった中のドライアイスをはぐす。

後ろで何か騒ぎが起きた。

巨人が振り返る。急遽ドライアイスを投入。「あっ、アイスが燃えている」違う、バッグだ。言い直している暇はない。カオルを引きずりながら迫る緑の巨人。バッグから無線機をつかみ出す。なんか言わなきゃならなかったっけ。階段を降りるボンバーヘッドのシュレック。応援の先生達はまだか。後ろからフラッシュ。思わず後ろを見るとカメラを構えた中年男。前を見ると...

巨人はカオルに抑えこまれていた。

「いったいあなたは何者なんですか」カメラを持った中年男に迫る院長先生。

「私は日日新聞の斉藤といいます」と名刺を差し出す中年男。

「当院では取材の申請は受けておりませんが」

「いえ、たまたま体調が悪くなったので寄らせていただいただけで」

「そんなことはありません。最初から資料室の方ばかりを気にしてました」応援の先生A。

「受付では付き添いと伺っておりますが」婦長さん。

「失礼しました。大名寺病院に悪質な嫌がらせをしているブラジル人がいるという情報がありまして、偶然こちらに来る用事があったので、予備調査も兼ねて寄らせていただいたのです」

たまたまとか偶然とか、誰がなんといっても怪しすぎる言い訳だ。そんなに都合よく事件現場に出会えるのはテレビの世界だけ。事件はテレビで起きてるんじゃない、現場で起きているんだ、なんて昔の偉人が言ってませんでしたっけ。

「それはともかく、当院の関係者が写っているようですので写真を確認させていただきたいのですが」

「申し訳ありませんが、取材過程の写真は報道の自由によって保護されており、お見せすることができないのです」

美女に取り押さえられたブラジル人と怪しげなバッグから取り出された無線機が写った写真があれば、系列の週刊誌なら「ブラジルの呪術師 v s 美人看護師 真夜中のゴーストバスターズ」みたいなセンセーショナルな記事がかけられるだろうし、新聞でも地方版なら「大名寺病院で幽霊詐欺事件」の見出しの次に「容疑のブラジル人捕まる」と小見出しがついたよ

うな記事がかけるだろう。しかしそんな記事が載ってしまえば、このあたりの人種問題がさらに深刻なものになってしまう。

「待ちなさい」と腹の底に響く声。受付の奥から現れた白髪の男性からだ。

「おじいちゃん」

「理事長」

「カオル、サントスさんを放してあげなさい」

「はい」カオルは素直に従った。

「このサントスごうき氏の身柄は私、大名寺剛毅が責任をもって預かります。調査の結果、もし違法行為があれば御社に一番にお知らせしましょう。しかし、もし御社が私の調査結果を待たずに記事にし、そしてその記事が私の調査結果と異なっていた場合、または何らかの不手際によってその写真が外部に流出した場合、大名寺グループが一丸となって御社の責任を追求させていただきますので、その点しかとご覚悟いただきたい」

カオルをネットに晒した少年の家族を破産に追い込んだ、と聞いたときには半信半疑だったけど今は違う。この老人ならその程度は確実に行うだろう。その証拠に様々な事件現場に遭遇しているはずの記者でさえ腰を抜かして立てないし、僕を含めた他の人は身動き一つできない。

「お帰り頂きなさい」

微かに首を動かすと、応援の先生方A・Bが記者を両側から支えて連れ出した。

「あかん。標準語はどえらい疲れるに」

厳しい声が一転して気の抜けた三河弁に変わった。

「ほんなら、おまんた一の話を聞こま一か」

そう言って僕らの方に向けた人懐っこい顔が、僕の記憶の中の何かに引っかかる。冬だというのに茶色く日焼けした顔は年相応のシワを刻みながらもツヤツヤと輝いている。この色ツヤ、どこかで見たことがある。頭の中の小人さんを総動員し、記憶の引き出しを手当たり次第に開けてみる。たしか、子どもの頃におばあちゃんちで見たような気が...

そうだ、味噌まんじゅうだ。

玄関にシャンデリアがある家に入ったことがあるだろうか。それくらいなら、無い事もないか。では幅十メートルはある上がり框で、靴を脱いだ途端に家政婦さんが靴を片付けに来てくれる家はどうか。そして、その家政婦さんがリアルにメイド服なんか着ている家に行ったことはあるかい。そんな感じのメイド喫茶に行ったことがあるって？ならばそれに上品な老執事と、三つ揃いよりも短パン一つでリングに上がっている方が似合いそうなごっ

ついボディガードがいる家ならどうだ。

僕らは今、そんな家の広大な応接室にいる。

大名寺剛毅老人と共にリムジンに乗って連れてこられたのは、僕とあの後ちようどやってきた三上くん、そしてベンジーだ。驚いたことにあの長いリムジンは車椅子を乗せるためのリフトまで付いている。あの手のリムジンは高齢のVIPを乗せることもあるだろうから標準的な装備なのかもしれないけれど、世の中知らないことはまだまだ多い。

カオルは応援の先生方A・Bと共にサントスさんを連れて愛の部屋に寄ってからやってきた。名もなきAB先生達は玄関先でお役御免。端役^{はやく}の辛いところだ。

「ほんじゃあサントスさんよ、院長から話は聞いちよるに、素直にしゃべりんね」

そう言われてサントスさんが話し始めたことによると、事の始まりはやはり医療費が高いとオリベiraさんから相談を受けたこと。そこで値切り交渉を引き受けたはいいけれど、医療に関する知識がない。しかしブラジルには現代医療だけでなく呪術的医療がまだ残っていて、時に呪術側の訴えを現代医療側が金で解決することもあることは知っていた。そこで倉庫にゴロゴロ転がっている違法無線機を使つての幽霊騒ぎを思いついたというのだ。

「何で無線機がポルダーガイストのようなことを引き起こすことを知ってたんだ」

核心を突いた質問をするのは、われらが探偵役のベンジー。

「それはミカミくんから聞きました」

「あんまり人聞きの悪い言い方をしないでほしいな。僕は倉庫にある違法無線機によって引き起こされる可能性があるトラブルを指摘して、むやみに転売しない方がいいと忠告しただけなんだけど」

「わかってるさ。三上がわざわざ幽霊騒ぎを引き起こしたなんか誰も思っちゃいないさ。ただ、治療時間が短いことを教えたのも三上だろ」

「ああ。だけどそれだつてサントスさんが聞いてきたから、入院しているおじの例から標準的な心臓手術の時間を答えただけだぜ」

「まあな。通常の治療のための手術時間と救急救命のための手術時間の違いまで教える義務はないからな。それを聞いて医療ミスと勘違いしたのはサントスさんのミスだ。そして医療費が高すぎると思ったのもな」

「それはとてもすみませんでした。でも、高額医療費という名前も悪すぎます」

高額医療費というのは、健康保険加入者のひと月にかかる医療費を一定以内に抑える制度のこと。確かに高額医療費返還制度とか、せめて高額医療費制度と名前をつければいいのに、と僕も思う。とにかくこの制度を使えば普通の家庭なら三百万の手術でも十万程度の負担に収まることになるのだけれど、日本人でさえこの制度のことを知っている人は少ない。だ

から、今この話を聞いて初めて知ったとしても恥ずかしいことは全くない。僕だって昨日はじめて知ったのだ。

とにかく、ジュリちゃんのご両親は彼女の治療のために一生懸命働いていたのだから当然健康保険には加入している。それをサントスさんは他の多くのブラジル人と同じように無保険だと思い込んだのが混乱の始まりで、高額医療費を制度ではなく普通に高額な医療費のことだと思い込んだために院長先生との会話が全くかみ合わなくなってしまったんだ。

おまけに高額医療費は払い戻しが原則のため一旦全額を入金する必要がある、とりあえず入金して欲しいと院長先生が言ったものだからサントスさんはボッタクリだと思い込んだのだそうだ。そういえばボッタクリの手口の一つとして、金を持っていることがわかれば無茶なことはしないからと言って財布を出させ、有り金すべてを取り上げるという手口があると聞いたことがある。たぶんサントスさんはその手でボッタくられたことがあるのだろう。

「こちらの説明に問題があったことは認めますが、人の話をちゃんと聞かずに、この病院には悪霊が憑いているだの、私のことを金の亡者だの文句ばかり言っていたサントスさんにも問題があるんですよ。それに医療機関に高出力の無線機を持ち込むなんて危険すぎます。当院の医療機器は全て耐電磁仕様になってますし、ペースメーカー使用者は全て電磁波を遮断された病室に入院してますからいいようなものの、下手すれば殺人を犯すところだったんですよ」

温厚そうな院長先生もさすがに怒りを隠しきれない。ポルダーガイスト騒ぎがサントスさんの無線機だと見当がついて以来、患者さんの命を守るためにペースメーカーを使用している患者さんは夜十一時以降しばらく病室からでないように工夫しなければならず、さらにナスコールなど耐電磁仕様になっていない機器などの不調にも振り回されてきたのだから。

「それから、そこにあるスピーカーとBluetoothアダプターはサントスさんのところから持ってきたもので間違いありませんね」

「そうですが、どうしてこれを持ってきたのですか」

「サントスさんが幽霊騒ぎを起こしている時とまったく同時期に、四階でも幽霊騒ぎがあつてね。そちらの方は、この装置を使って幽霊の足音なんかを流していた」

そういつてベンジーは四階に取り付けてあつたBluetoothレシーバーとスピーカーがむき出しになったイヤホンを取り出した。

「サントスさんも知っていると思いますが、Bluetoothは一度ペアリングを行うと、リモコンキーで他の車のキーが開かないように、同じ型の装置であっても他のBluetooth機器では反応しないんです。ちょっとサントスさんのMP3プレーヤーを貸してください」

そういつてサントスさんのプレーヤーを受け取りアダプターに装着した。

「Bluetoothはこのアダプターなら追加すれば五つの機器までペアリングできますが、同時に使える機器は一つだけ。まずこのスピーカーと繋いでみよう」

ベンジーがスピーカーのスイッチを入れると、陽気なサンバのリズムが流れてきた。

「そしてもし、四階の幽霊騒ぎを起こしていた人物がこのアダプターを使っていたのなら、こちらのイヤホンの方からも同じ音楽が流れることになる」

スピーカーの電源を切り、イヤホンにつながったレシーバーのスイッチを入れる。スピーカーに比べるとずいぶんと音は小さいものの、この静かな部屋ならば十分に同じ曲とわかるリズムが聞こえてきた。

「ちょっと待ってください。私、そんなもの知らない」

「なあにい、知つとるも知らんもあらずか。おんしがわしの病院に無線機持ち込んだのは事実だらあ。どえりゃあ往生こいたで、ただで済むと思っちゃだちかんで」

すごい迫力なんだけど、サントスさんの横で院長先生が「すごく大変だったんだから、ただで済むと思うなよ」と通訳してるところが笑える。でも笑ったら、おそぎゃあ事になりそうなんでぐっところえた。つられて三河弁になっちゃったけど、おそぎゃあくらいわかるよね。恐ろしいってこと。

「ミズホ。宮下と一緒にサントスを説教部屋に連れていきん。何でもするちゅう証文とるまで帰したらだちかんで」

院長先生とボディーガードが動き出す。連れてきんは連れていきなさいの意味だけど、説教部屋がどんな部屋かはわからない。横にいるカオルをつつくと、説教部屋とはコンクリ打ちっばなしの部屋で机と椅子しかないらしい。この足首まで埋まりそうな絨毯が敷かれた豪華な部屋からコンクリ打ちっばなしの部屋へ、僕らの肩幅くらいに胸板が分厚いボディーガードに連れ込まれたら、死ぬほど怖そうだ。

ちなみにミズホは院長先生の名前。確か名札には「大明寺瑞穂」と書いてあった。おじいちゃんの名前が剛毅なのに、息子と孫の名前は妙にみやびだ。

「三上、何やってんだ」

携帯を出してキーを押し始めた三上くんがベンジーが声をかけた。

「いや、いちおう知り合いの新聞社の人に、サントスさんが幽霊事件の犯人だったって知らせておこうと思って」

「たわけ」

いきなり剛毅さんが吠えた。一般的に気の抜けた感じが多い三河弁でも「たわけ」だけは強烈だ。

「わしが預かるちゅうたんを、おんしが勝手しちやかんに」

文字にすると可愛いけど、三上くんの手が凍りつくほどの迫力だ。

「そうさ、まだ事件はすべて終わったわけじゃない」

そう言ってベンジーはカオルから切手サイズのパーツがぶら下がったペンを受け取った。

「これはビデオカメラだ」

僕が大須で買ってきたのはこれだ。ちょっと大きめのボールペンで、パッと見どこにもレンズはない。にもかかわらず鮮明画像が四時間も撮れるのだ。誰がなんと言ったって盗撮用以外のナニモノでもないのに、一般人が普通に買えるところがオソロシイ。

「ほう、大里くん意外な趣味があったんだな。いったい何を撮ったんだ」

「さあな。まだ俺も見ちゃいないんだが、楽しいものが写っているといいな」

そう言ってベンジーは机の上に準備されていたノートパソコンを引き寄せた。

「タカシ、再生してくれ」

「オッケー。ちょっと待ってくれ」

そう言って頭の中の取説を広げる。まずはマイクロSDカードをアダプターにセットしてからカードリーダーに挿し込む。これをUSBポートに挿せばかってにソフトが...立ち上がらない。ええと、こんな場合は。

「AVIファイルだからダブルクリックすればメディアプレーヤーが立ち上がるわ」

見かねたカオルからの助け舟。

「サンキュ。じゃあ始めるね」

メディアプレーヤーがフルスクリーンモードで立ち上がる。

おしゃれなノートパソコンのスクリーンに映ったのは...

素っ裸の巨人だった。

「サントスさんじゃないか。大里くんたちにこんな趣味があったとはね」

微妙などよめきの中、最初に口を開いたのは三上くんだった。

「アホか。まず止めろ」

言われるまでもなく右上のをクリックして即終了。危なかった。もしサントスさんが残ってたら殺されるどころだった。

「二時間後からじゃなかったんか」

「そうなるようにセットしたんだけど」

そう言いながらタイマーの基板をチェックする。抵抗を付け替えた跡は確かにあるんだけど...どうやら他のタイマーから外した同じ値の抵抗を取り付けてしまったらしい。

「すまん、どうやら間違えて同じもん付けちゃったみたい」

「また妄想モードに入ってたんじゃないだろうな。早送りで飛ばすか」

「いやそれよりもこのカメラは三十分おきに新しいファイルを作るみたいだから、次のファイルを見てみよう」

念のため再生画面を小さく固定してから、二つ目のファイルをドラッグ&ドロップ。

「今度は何も映ってないんじゃないか」

僕らの意図がわからず、少々イラつき気味の三上くん。

「部屋の中が真っ暗ってことさ。わからないか。これがさっきの続きだってことが」

ベンジーの言葉に、三上くんは僕らの意図を察知した様子。しかし、何もすることはできない。

「待たせるのも悪いから早送りしてやれ」

王子様の宣告で、運命の時が早まった。

「ストップ。そこだ」

画面が急に明るくなり、ピンクの部屋が写った。経過時間から逆算すると十一時十五分前後。誰かが部屋に入ってきたのだ。

「これはお前だろ」

ベンジーが指摘するまでもなく。入ってきたのは、今僕たちの目の前にいるままの姿の三上くんだった。

画面の三上くんは、落ち着いた様子でサントスさんのBluetoothアダプターを取り去ると、ポケットから取り出した同じ型のアダプターを置いた。次にスピーカーに近づきスイッチを操作した。

「ペアリングをやってんだろ」

病院のイヤホンとペアリングしたアダプターでサントスさんの部屋のスピーカーをペアリングし直せば、スピーカーの情報は書き換えられて新しいアダプターとしか接続しない。

「違う」

「じゃあ他人んちに勝手に入って何やってんだよ」

ベンジーの呼びかけに三上くんは返事をしない。

「お前が今まで病院のスピーカーを操作していたBluetoothアダプターでサントスさんのスピーカーをペアリングして、サントスさんを犯人に仕立て上げようとしたんじゃないのか」

「違う、同じ種類のスピーカーだから、僕のアダプターでも聞けるのかを確認したかっただけだ」

「わざわざ他人んちに忍び込んでか。何のために」

返事はない。

「一つ面白いことがある。お前があそこに入る前に、タカシがちゃんと予約してあの部屋に入ってな、タカシのスピーカーをサントスさんの部屋においてあったBluetoothアダ

プターでペアリングしておいたんだ」

ベンジーの目配せで、僕はカバンからスピーカーを出した。学校帰りにサントスさんから三千円で買った品だ。

「だから、もしこのアダプターが前々からあの部屋にあったもので、お前がすり替えていないのなら、このスピーカーでも聞こえるはずなんだ」

再び目配せだけで動く僕。すっかり下僕役が身についてしまった。

「何も反応しないだろ。従って、少なくともサントスさんは四階の幽霊には関係ないということだ。そして逆に三上が四階の幽霊事件の犯人だということになる」

三上くんは何も言わずに黙っている。

「でもどうして」

ベンジーから三上くんが怪しいことは聞いていたけれど、なんで三上くんが幽霊話をでっち上げる必要があるのかがわからない。

「前々からブラジル人が邪魔だと思ってたんだらうな」

「でも邪魔だからってなんで幽霊騒ぎなの」

「きっかけはサントスさんから治療費の話で相談を受けたことだろう。たまたまそこにあった無線機から、幽霊騒ぎにすれば病院を脅せるって話にうまく誘導したわけだ。コンビニ受診やモニターペイシエントがほとんどいないことから分かるように、大名寺病院は地元からすごく愛されてる病院だろ。そんな病院を小金欲しさのブラジル人が、危険な無線機まで使って陥れようとしていることが知れ渡ったら、ここらの住民は黙っちゃいまいからな。そして無線機だけじゃ確実に効果が得られるか自信がなかったんで、より確かな効果が得られる音の幽霊を作り出したというわけだ」

「でもそれならサントスさんだけが憎まれるんじゃない？」

「そうかな。特にホワイトヒルズあたりじゃ前々から対立が激しくなっていたし、三上にとっては都合よくゴミが燃える事件なんかもあったよな」

「俺がやったとでもいいたいのか」

「別に。ただ、ボランティアで掃除をやってるお前にも、ゴミに何かを混ぜるチャンスは一応あったってだけさ。それに、生石灰を濡らすと発熱するから可燃物、特に油やアルコールと一緒に捨てる危険だってことは授業で習ったよな」

「それが証拠になるのか」

「ならないさ。少なくとも俺達のクラス全員がその知識を持っていたというだけだ。お前は証拠を残すほど馬鹿じゃない。ただお前にとって計算外だったのは俺達がしゃしゃり出てきたことだ。学校じゃ俺は他人事には口を出さないからな。本当ならもう二三日幽霊騒ぎを続けて、もっと噂が広まったところで、お前自身が探偵役で解決するつもりだったんだらう。それならばサントスさんの所へも忍び込まなくても予約で堂々と入れたものを、急に明日解

決するなんて言われても土日は予約でいっぱいだし、月曜も誰かさんが最後の予約を入れちゃったから入れなかった。もし予定通りお前が探偵役で解決できてたならば、頼んだ記者に写真付きでいい記事を書いてもらえたはずだったんだろ。普段からボランティアで街のために尽くしている少年が悪徳ブラジル人を取り押さえた、なんて記事が載ればお前の株は上がるしブラジル人のイメージは悪くなるし、うまく煽れば三輪さんの奥さんみたいな反ブラジル派のホワイトヒルズの住民が結束して、四階みたいにブラジル人排斥運動が起こったかもしれないのに、残念だったな」

三上くんはもう何も言う気がないのか、黙って広いテーブルの真ん中に置かれた花瓶を眺めている。

剛毅さんにとってももうこれ以上証拠は必要ないのだろう。何も言わず三上くんを見つめている。あとはサントスさんが帰された後に説教部屋に行くことになるに違いない。

それにしてもあの爽やかでみんなの人気者だった三上くんこんな顔があるとは思わなかった。街のためにすすんでボランティアを買って出る笑顔の裏に、街を汚す人たちへの憎悪が潜んでいたのだ。そしてその憎悪を胸に、この寒さの中夜な夜な病院の近くまで来て幽霊電波を送っていたとは。

そこまで考えて悲しい仮説にたどり着いた。

「三上くんがブルトウスの電波を送ってたのは四階の窓から百メートル以内だよ。しかも中にいる人の位置がわかるとしたら遊歩道のあたりが一番いいんじゃない。もしかしたら、ベンジーが引っかかったロープを張ったのって」三上くんじゃない、と言おうと思ったら、珍しくベンジーが口を挟んだ。

「違うな。あのロープを張った奴は、学校で習ったことがそのまま世の中で通じると思ってる馬鹿だぜ」

「どういうこと」

「タカシには話したと思うが」と言ってベンジーは盗撮ボールペンを使って回転モーメントをカオルや剛毅さんに向けて説明した。股間をぶつける小芝居は抜きだ。

「しかしこれはあくまでも学校で習う物理に過ぎない。物理の授業では二点をつなぐ剛体に質量はないし支点は完全に固定されているけれど、実際は違う。剛体に相当する自転車は配達用の実用車で二十キロ以上もあるし、後部に新聞がまだ残っているから重心は理論値よりもずっと後方の低い位置にある。さらに回転の支点となるロープは空中に固定されているわけではないので回転する車輪が当たれば車輪の回転方向、すなわち下に巻き込まれ、回転モーメントを打ち消す力に変わる。さらにカーブを曲がる自転車は傾いているため回転にはねじれが加わる。結果として俺は前方に投げ出されるのではなく、ハンドルを取られて地面に向かって斜めにたたきつけられただけで済んだというわけだ」

そう言ってベンジーはギブスをまいた左足を叩いた。

「もし犯人がロープを使ってオレをどうこうするつもりだったとするなら、そいつは自転車が質量のない剛体で、ロープはたわむことなく一点を固定し、移動体は紙に描かれた図形のように二次元の動きををすると思っている大馬鹿者だ。東大でも楽勝で合格できる三上のように利口な男のやることじゃない」

口は悪いが、明らかに三上くんをかばおうとしている。誰もが戸惑い、広大な応接間は静まりかえった。

「お前、死ねばいいのに」

沈黙を破ったのは三上くんだ。

「お前そんなんでオレをかばったつもりなのかよ。ウゼエんだよ。やっぱ、あの時死んでりゃよかったんだよ。いつもいつも全てわかったような顔しやがってよ。テストで一番ばかり取ってる奴に二番の気持ちができるかよ。世界で二番目に高い山、世界で二番目に足が速い奴なんか誰が覚える。俺は勉強だってスポーツだってボランティアだって死ぬほど頑張ってるのに、勉強しかできないお前と比べられて、二番の烙印を押されるんだぞ。ボロい服着て、臭くて、偏屈で、おにぎりしか食えない貧乏人よりも下に見られるんだぞ。この気持ちがわかるか、ばかやろう。おまえなんか死ねばいいんだよ」

真っ赤な目に涙を浮かべ、叫ぶ三上くん。

「お前だけじゃない。ブラジル人たちだってみんな死ねばいいんだ。俺達がせっかく綺麗な街を作ってるのに、働きもしない奴らにぶち壊される気持ちがわかるか。おまえらがのうのうと学校で遊んでる間に俺たちは奴らが散らかした臭せえゴミを拾ってよ。わざわざ一軒一軒ゴミの出し方まで教えてやってんのに守らねえようなクズは、この街にいる資格なんかないんだよ」

いつもクールで爽やかな三上くんがキレた姿をはじめてみた。言っていることは勝手だし、真っ赤な目をして口から泡を飛ばす姿はどこから見てもカッコ悪い。だけど、こんなことを言っはなんなんだけど、こんな三上くんの方が人間らしくて友達になれそうだと思うのは不謹慎なんだろうか。

「前半だけはお前に同意するぜ」

罵倒されまくったはずなのに、ベンジーの顔は奇妙なほどに穏やかだ。

「俺もお前が死ねばいいと何度も思っていたんでね。明かりもろくにつけないような家庭に生まれ、偏屈に育ちまった俺にとって、裕福な家庭に育ち、みんなに愛され、成績もよくスポーツも出来るお前が妬ましかった。中古のママチャリをギコギコこいでる横を、最新のマウンテンバイクで颯爽と抜いてくお前を蹴倒そうと思ったことだって何度もある。乗鞍合宿の時には一番に登ったのは俺なのに、みんなお前のことばかりを褒めたたえているのを見て絞め殺してやろうかと思ったぜ。だから、お前が俺を殺そうとしたことに気がついたとき

、俺は心底ほっとしたぜ。お互い様なんだってな」

三上くんは泣いている。僕も違う意味で泣けてきた。僕はベンジーの一番の友達でいたつもりなのに、ベンジーのことを全く知らなかったのだ。しかもベンジーが妬みの炎の中で苦しんでいたとき、僕はベンジーとではなく他の友達とばかり遊んでいた。お金がなくなると消えていくような薄っぺらの友情を信じて。

「しかし、後半は全く同意できないぜ。お前生徒会選挙の時、学校内のことだけでなく私生活にまで干渉してくる校則に反対して言ってたじゃないか。僕たちは上から目線でさせられたり、してもらったりすることが大嫌いです、って。だから自分たちの力で自分たちにとっていい学校を作るために、僕らを縛り付けるのはやめて下さい、って先生達に向かって見得を切ったじゃないか。俺はあの時心底お前に感動してたんだぜ。そしてお前はその言葉通りに学校を変えていったじゃないか。それが何だ。ゴミの出し方を教えてやってるのに、って。思いっきり上から目線じゃないか。そんな上から目線でやられちゃ、俺たち生徒が学校に反発していたように、言われた連中がお前に反発するのは当たり前だろうが。そんなことに気がつかず上から目線で、しかも他人に罪を押し付けて、追いだそうとするとはな。説教部屋でたっぷり説教してもらおうしかないぜ」

そう言ったあと、ベンジーは僕の方をちらりと見て付け加えた。

「それから三上。お前、友達を選んだほうがいいな。お前を持ち上げるような奴ばかり近づけてるから上から目線になるんだぜ。タカシなんか俺の頭を便利なコンピューターくらいにしか扱わないから楽だぜ。それにお前の基準じゃ、タカシは理凡クラスのお馬鹿さんくらいに思っていないだろうけど、こいつはある意味俺やお前よりも遥かに頭がいいんだぜ」

「僕が...、ベンジーより」

「ああ。タカシをすごいなあって思ったのは、中学の時だったかな。地理の授業で炭鉱の露天掘りと坑道掘りを習っただろ」

「ああ」と返事をしたものの、何の話かわからない。露天掘りはオーストラリアなどで行われる採掘方法で、浅い層に大量の石炭があるため上からどんどん掬いとって行く。それに対し坑道掘りは石炭層が深いところにある日本などで行われている方法で、一旦まっすぐに縦穴を掘り進めて石炭層に当たると横にも掘り進めて石炭を採取する。

「この話を聞いたタカシは俺になんて言ったと思う。パフェは坑道掘りで食べるのが正しい、だぜ。パフェを露天掘りで上から順々に食べたら味の組み合わせは固定されるけど、坑道掘りにすれば好きな組み合わせを色々試せるから、ってのがその理由だ」

思い出した。たしかにそんなことを言った覚えがある。そしておにぎりしか食べないベンジーにパフェのおいしさについて滔々^{とうとう}と語ったことを激しく自己嫌悪したんだった。

「普通こんなことを考える奴がいるか。俺は目からウロコが吹っ飛んだね。一見何の関係もないものに関連を見いだす。大抵の場合にはスルーしたくなるような無意味なことばかり言

っているけど、時には驚くほど鋭い着眼点を見せる。教科書に載っているような遠い理屈を身近な世界に引っ張ってくるタカシの発想には未だに驚かされることばかりだぜ。三上も取り巻き連中みたいに当たり前の事しか思いつかない奴らばかりでなく、タカシみたいにおもしろい発想をする奴と付き合ったほうがいいぜ」

三上くんの話しかけているのだけど、たぶんベンジーは落ち込んだ僕の顔を見て、僕のことを励ましてくれたのだろう。優し過ぎるぜベンジー。

「さて、そろそろお迎えが来たようだぜ」

チェ・ホンマンでも楽々通れそうな巨大なドアを開け、院長先生とボディガードが帰ってきた。

「ちゃんとサインはもらってきたんかあ」

「はい。ただ証文にある、犯罪行為以外の指示にはどんな指示でも従います、という言葉に相当抵抗があったようですが、こちらが民事訴訟を起こした場合の損害賠償額を教えたら、あっさりとサインしてくれました」

院長先生は患者の容態を伝えるような生真面目な顔で報告しているけど、要するにそれって世間一般で言うところの脅迫じゃない？

「ほんなら次は三上んとこの小僧だが、こいは説教部屋より警察の方がええだらあ」

「俺は被害届を出していないし、これからも出すつもりはありません。それに三上は本当に頭がいい奴でね。本気で俺をどうこうする気なら、紐が短かったからといって斜めに張るようないい加減なことはしないタイプです。ほんとに気の迷って奴だと思えますよ」

「私もそう思うわ。三上くんが最初のベンジーの病室の前にやってきたとき、三上くんの気は後悔の色に染まっていたもの」

「ほいじゃあ説教部屋で勘弁したろまいか。やあっと何でもいうこと聞いてもらうでよ。覚悟しときん」

「あんまり俺に無茶させると、父がしゃしゃり出てくるかもしれませんよ」

この期に及んで逆に脅しをかけようとは、さすが三上くん。悪役キャラが身についたのか、もともと持ってたキャラなのか。

「なあにい、ほんなこと関係あらずか。わしはホワイトヒルズが白山町と呼ばれとる頃からよう知つとるだに。なんで県があそこを選びやあしたか、誰が一番得しゃあしたかはちゃっと調べとるに」

三上くんの家は県が肝入りで開発を進めた地域の一等地に立つ豪邸。確かに県会議員が建てるには豪華すぎる。カオルのおじいちゃんは、味噌まんじゅうのような人懐っこい笑顔も持っているけれど、煮ても焼いても食べそうにないジイちゃんだ。

「おんしはワシが直々に説教したるでよ。あんたらあは夜食でんよばれて待つとりん」

妖怪味噌まんじゅうに連れ去られる三上くんの背中。いつになく小さく見えるその背に向かってベンジーが声をかけた。

「三上、お前は一番じゃないといったが、そいつは違う。学校の誰に聞いてもいい。誰がこの学校で一番なのかって。みんなの返事は、間違いなくお前だ」

三上くんの背中が、微かに震えた。

さて、世間一般で夜食といえど何を想像するだろう。我が家では、かつてはカップ麺だったけど、緊縮財政に入ってから小倉トーストオンリー。東海地方以外ではあまり馴染みがないトーストらしいけど、一度やってみて欲しい。カリッとトーストした厚切り食パンにバターを塗って、じんわり染みてきたところにアンコをてんこ盛り。ザックリと熱いパンに冷たいアンコ、そして中から染み出るバターの塩味。食べたことがない人は人生の半分は損していると断言してもいい。ぜひ一度お試しあれ。

さてさて、大名寺家の夜食が世間一般とかけ離れているのは、ご想像の通り。ではどのようにかけ離れているのか。

一旦部屋に戻ると言ったカオルと離れ、僕とベンジーが通されたのは、豪華ではあるけど意外に小さな一室。それでも二十畳くらいはあるだろう。真ん中には大理石の丸テーブル。テーブルの上には果物の山。メイドが約二名。約がつくのは時々増えるから。執事は当然単数形。

渡されたのは気品に満ちた書体で記された手書きのメニュー。なぜ夜食のメニューにステーキや寿司があるのかは不明。

「サンドイッチで」とお願いしたら、かわいいメイドさんに生ハムとスモークサーモンはどちらが好きか、とかピクルスやケッパーはお嫌いではないでしょうかと聞かれてシドロモドロ。

ベンジーは無愛想に「塩おにぎり、焼き海苔付きで」。

注文して五分も経たないうちに注文の品がやってきた。もしかしたら「美味しくなるおまじないをさせてもらってもいいですか」て聞かれるかと思ったけど、さすがにそれはなし。どうやらメイドさんは大須のご出身ではないらしい。ちょっと期待してたんだけど。

さてここで想像して欲しい。壁一面の飾り棚にある分だけで家一件ぐらい買えそうなほど高価なベネチアガラスが飾られた部屋に、メイドさんが二人と執事さんが一人控えている、そこで友人と二人でどんな会話ができるかを。

正解は、「会話なんて無理」。僕は人生最高級のサンドイッチを段ボール箱を食べるような気分がちびちびかじり、ベンジーも黙々とおにぎりを食べるのみ。食べ終わってしまうと、やる事がなくなるので二人とも超スローペース。

誰だ、沈黙は金だなんて言った奴は。

「どえりゃあ腹へったに、ステーキをちょうすか。サーロインをレアで二百。太るでコメはええわ」

唐突にドアが開き、帰ってきたのは味噌まんじゅう、もとい剛毅さん。

「話は聞いとったけど勉士くんは米だけでえーのか。ほんなんでよう生きとれるわ」

「ユーカリだけで生きてるコアラと一緒にですよ。カロリーさえ十分なら、腸内細菌が必要な栄養素は作ってくれます」

「ほいでも、今日は他にもごつつおうがあるし、食うたらええじゃん」

じゃんというのは関東では若者言葉らしいけど、立派な三河弁。いい年したおっちゃんたちがじゃんじゃん言い合っている姿は、他所から来た人には異様に映るらしい。

「ここ何年もおにぎりしか食べてませんから、他のものを食べると腸内細菌のバランスが崩れてハラ壊すんで遠慮しておきます。それにここの米は素晴らしく美味しいし」

なるほど斗志輝おじさんがお腹を壊したのはこのためだったんだ。中学まで給食を食べてたベンジーと違っておじさんはずっとおにぎりばかりだっただろうし。

「ほうか」と頷く剛毅さん。

解説するほどじゃないけど「そうか」という意味。火はつけない。

そして剛毅さんは三上くんとの話を教えてくれた。三上くんの家庭では父親が絶対的な権力者で、成績で一番を取れない三上くんをしょっちゅう罵倒していたらしい。そんな不満が積もっていた最後の試験中だったこともあり、前々から気づいていたロープを張ってしまったらしいんだけど、このことについては本当に深く反省していたそうだ。

ただ、その一方で政治家志望の三上くんは、今回の事件は将来のための政治実験だったと主張した。イギリスのチャーチルという政治家が戦争に勝利するために五百人以上もの一般市民を見殺しにしたコベントリーの悲劇を例にあげ、より多くの市民が幸せになるためには多少の犠牲は必要なのだと力説したらしい。そしてこれには剛毅さんも激怒（でもたぶんお芝居、このジイさんは煮ても焼いても食えないからね）。罪の無い患者さんの命を危険に晒したことや、ケンタくん、ジュンちゃん、クニオくんと日本の名前をつけて日本社会で生きることを決めた家族をなぜ日本人と認めないんだと懇々と説教したらしい。そして最後は例の、何でもします、の証文にサインさせて家に送っていったそうだ。

ちなみに三上家は広すぎるため夜中の脱出は自由自在。夜の十一時を過ぎれば、どこに出かけていようとバレる心配はないんだそう。

では、この家ならどうだろう。迷いそうなくらい広いから、出かけるときは隙をついて出れそうだけど、帰ってくるときはどこにメイドさんがいるかわからない。万一見つかった場合に備えて、手土産を持って帰らなきゃならないだろうな。

メイドの土産に、ってオチでどうだろう。

ステーキを持って現れたのはメイドさんではなく、カオルとどこことなく似た少年。たぶん弟だろう。

「なあにい、薫が人前でメガネもヒゲもつけんと男のカッコとはどえらいやっとな」

「家族の前以外じゃ、中学校以来だからちよつとはずかしいな」

この声はカオル。てててててことは、このサラサラヘアーの男前がカオル。よくよく考えればもともと男なんだから当然か。ん。

ちよつと待った。その男前の唇に心奪われていたんかい、僕は。

でもメガネとヒゲという言葉は、頭の中の何かに引っかかる。

「カオルって、外でも男の格好することあるの」

「ああ、女の子の格好じゃ都合の悪い時もあるからね。ただ素顔じゃ、まだ出れないんだ」

「もしかして、ジュンちゃんの家に来た刑事さんって、カオル？」

「よく気がついたね。僕も仲間に入れてもらうために一応調べておこうと思って」

カオルもやはり幽霊のしゃべるポルトガル語が気になったらしい。気にならなかったのは僕だけ。ちよつとショック。でも別なことに気がついた。

「その時って、三河駅で着替えなかった」

「見てたの」と、話してくれた内容が驚いた。コスプレ好きのカオルは三河駅だけじゃなく、近くのショッピングモールや名古屋駅周辺にも何箇所か着替えや変装セットを仕舞っているコインロッカーがあるというのだ。

「そんなにあちこちに仕舞ってたら、場所とか鍵とかが分からなくなっちゃうんじゃない」

「そんなことないさ。どこも左端が一例全部僕の貸切で鍵も共通にしてもらってるから」

お金持ちのやることはスケールが違う。ちなみに、その合鍵は執事さんも持っていて、使った服は全部クリーニングして戻しておいてくれるそうだ。

「でも女子トイレで男に変身したら出られなくなっちゃうじゃない」

「だから男物が置いてあるのは、三河駅みたいに多目的トイレもあるところに近いロッカーだけ。だいたい外で男の格好をするなんて、めったに無いからね」

「ほいでも、薫にかっこう騙さんでもおれる友達ができたのはどえらいえーこっちゃん。こいからもよろしう頼むわ」

そう言ってカオルの肩に手をのせる剛毅さんの顔は、孫の成長を喜ぶおじいちゃんの顔そのもので、こっちまで嬉しくなるほどだ。

「勉強くんは、ほれ、三上のせがれより勉強できるのに名大に行くげなあ？、あそこもええ大学じゃけど、なんでえ、何がほんなにえーか」

「いや、本当は別の大学に行きたかったんですが家庭の事情で」

そう言ってベンジーは学費の負担だけでなく母親のためにも自宅から離れられないことを告げた。

「ほんじゃあ、なに、もしそんな事情がなかったらどこに行きたいんか」

「できる事なら応慶大学へ。あそこで小白水政権時代に経済を担当した竹下半蔵教授に教わりたかったんです」

そう言うとベンジーは、日本の経済が政治から干渉を受けすぎている現状を熱く語り、自らが考えている経済理論を実行するために、実際に政治の荒波の中で経済政策を実行していた竹下教授の教えを受けたいとのだと締めくくった。

「半蔵は大学の後輩だで、知らん仲じゃないに。なんならうちの大学に客員教授として招いてもええだよ。だども、いったいどんな経済理論を考えとるだに」

「交換性のない一方通行の紙幣です」

そう言ってはじめたベンジーの経済理論は、やっぱり普通のものじゃなかった。ややこしいことは端折って説明すると、ようは現在の通貨に加えて大名寺病院で行われている感謝状カードを国が発行するようなもの。人の働きに対する感謝の気持ちで渡すという点では通常の通貨と代わりはないけれど、受け取った感謝状は自分の気持ちの中で誇りとして残るだけで何かと交換することは出来ない点が大きく違うんだ。

「現在の交換通貨による経済では欲しい物に限界があるため、一生涯では使い切れないほどお金を稼いでいる人が、使い切れないお金を利殖のために使っているのが現状です。その結果、お金がある人とない人の格差が、ますます拡大しています。お金の使い道がないからお金を増やすためにお金を使うという循環が、バーチャル世界の経済を拡大し、リアルの世界にあるすべてのものを買っても使い切れないほどのお金を生み出しているのです。その結果、時にキーマン・ショックのような暴落を生み出し、世界に不幸を生み出している」とベンジーは、まるで講義でも行っているかのような口調で言った。

「一方で、ここには感謝状があるために、医師たちは激務に耐えられますし、地域住民も病院のためにコンビニ受診をなくすためのパンフレット等を作ったり配布したりするなどの活動を金銭的な報酬がなくても行えます。もし、僕が今考えているような紙幣が流通すれば、使い切れないほどのお金を持った人が、人から感謝されるというやりがいのために、持っている財産を人のためにも使えるようになるでしょう。そうすれば、経済はバーチャルな投機の世界ではなく、現実社会の中を今以上に流れ、経済活動は生活の場で活発に動くことになると考えているのです。しかし」とベンジーはこの説がまだ机上の空論であるだけでなく、まだまだ不完全であることを認めた。

「だから竹下教授から指導を受けたいのですが、俺のためだけに教授を招くなんて申し訳なき過ぎますし、残念ながら大名寺学園大学に教授を招いていただいてもこの名門大学の学費は奨学金だけでは まかな 賄えそうにないので、気持ちだけ頂いておきます」とベンジーは丁寧に

頭を下げた。

「なあにたあけたことを言うとするに。こん事件だけでも十分にそれだけの価値はあるじゃん。ほいで高志くんは大学でなんを学びたいん」

「僕は」

そう言って言葉に詰まってしまった。大学に行ければいいと漠然と思っていただけで、何をやりたいかなんて考えていなかったのだ。

「僕はあまり深く考えたことはないんですが、理科系が好きだし、最近料理も面白くなってきたので食品に化学が活かせるような学部に行きたいと思います」

「ほんなら、うちの大学の応用化学科は、大名寺フーズと産学協同で新商品開発をやっとるし、ドンピシャじゃん」

そう言うとカオルを僕らの前に押しやった。

「おまんた三人がおれば、大抵のことは解決できるだら。世のためにえーことになるんなら金のことは心配せんで好きに何でもやったらええが。三人で、うちの大学にこりん」

そう言って剛毅さんは、味噌まんじゅうのような顔をクシャクシャにして微笑んだ。

僕は一も二もなくうなずき、ベンジーは「竹下教授の指導が受けられるのなら」と慎重に同意した。

「ほんなこれで大名寺に心強い三人がそろったことになるし。おまんた三人で大名寺の三英傑、大名三（だいなさん）ちう名前が決まりじゃん」

だいなさん、ってダサイ名前はちょっと気に入らない。でも僕らは戦隊モノのヒーローじゃないから、いちいち相手に名乗る必要はないだろう。もし万が一、人に訊かれたら大名三じゃなくてダイナミックな三人組の意味だと答えることにしよう。

そんなわけで、この春僕らは三人そろって大名寺学園大学に入学した。

あの後、サントスさんや三上くんがどんな風にこき使われたのかは、僕たちに直接関係ないのでカット。剛毅さんのキャラクターから想像してもらうことにしておこう。興味のある人のためにちょっとだけ書くと、サントスさんはごみの山から発見され、三上くんは半ケツ写真が新聞に載った。一応どちらも日本人とブラジル人の溝を埋めるのには役立ったので、二人とも納得はしている様子。

そして僕らにとっては福の神のはずだった剛毅さんは、時々僕らにとっても疫病神に変身する。世の中のためになるならと、ポンと活動資金をくれたかと思うと、無理やり自分がらみの問題を押し付けてきたりもした。

僕らは大学入学と引換に、悪魔の証文にサインしてしまったのかもしれない。

あと、言ってもいいものか迷うけど、小悪魔と化したカオルから唇を奪われるという事件

?もあった。

でも人間というのはそんなもの。正面から見た美人の後ろ姿がツルツッパゲでもいいじゃないか。全部が全部いい人なんているはずがないんだ。

僕らにとって大切なのは、自分自身を認めてくれる友がいること。

大切なのは何が一番なのかじゃない。どんなことであろうと、何かが一番であることを認めてくれる人がいることが大切なんだ。

もつべきものは友、とありきたりの言葉で再び締めくくってみたりする。

了

ダイナサン

<http://p.booklog.jp/book/58801>

著者：栗原龍二

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cafekurikuri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58801>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58801>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ